



(詳不家畫) ラ ア キ 聖

妹たちの手に水を濯いだり、彼らの用を足したりした。他の人に何ごとを爲せと命ずることよりも彼女はそれを自ら爲すことを好んだ。彼女は親しく病者たちの看護をし、そしていかなる不潔な仕事をいとばなかつた、他の姉妹たちが外から修道院に歸つてくるとき、彼らの足を洗ふのはキアラであつた。夜には彼女は起き出でて、姉妹たちのうちで寝てゐるあひだに被衣をすべらして冷える恐れのあるのを氣をつけてまた包んでやつたりした。フランスは屢ば病者や衰弱した人々をサンダミアノに送り遣した、そこではキアラが彼らを看護して、屢ば彼らを癒した。もし彼女自らが病めるときにも、彼女は労働を止めなかつた、彼女は寢床のうへに起き直つて、一つの褥を背に宛て、そして祭壇の飾布を刺繡した。かやうにして彼女は、まったく聖フランシスその人の心もちで、五十に餘る祭壇の飾布を縫つた、それは *Corporale* といふ種類のもので、彼女はそれを絹の上蔽ひのなかに縫ひあげて、山のうへや平原にあるいくつかの寺院に贈つた。

彼女が労働について他の姉妹たちの先にたつて善行の例を示したやうに、それはまた彼女の信仰の生活についても同じであつた。 *Hora complura* (祈禱書にある一日の祈りの最終のもの) が果てたとき、キアラ一人は永いあひだ留まつて、フランシスがかの聲を聞いたのと同じ十字架の像と、祭壇のもつとも聖き聖器のまへに永しへの燈火に夜も日も生きそしてもえる小さな燭とのまへに通夜した。こゝで彼女は救ひ主の苦しみに心をあはゆる靜想に自らを興へた、こゝで彼女は *Crucis officium*、フランシスが撰びそして

彼女に教へたところの、十字架のキリストの榮えのための祈りを捧げた。けれどこれらのことに拘らず彼女は朝はたれよりもはやく起きた、そして自ら姉妹たちを起して、燈火を點し、そして早朝のミサのために鐘を鳴した。

同じときに彼女は彼女の肉體——それは生れつき多血質な健やかなからだであつた——をすこしも容赦しなかつた。彼女の床は、サン・ダミアノの初期に於てはただ一束ねの葡萄の蔓であつて、枕は一片の材木のはしであつた。のちに彼女は革のうへに、落ちつかない枕をして臥た、そして最後に聖フランシスの嚴しい吩咐に従つて、一つの藁を入れた囊のうへに眠つた。彼女がレントとサン・マルチノの斷食のあひだには、一週に三日しか食物をとらずに、それもただパンと水とを食べること——これはもとから彼女の慣はしであつた——を禁じたのも彼であつた。彼は僧正ギドーから彼女に命じた、そして義務として彼女は日ごとに少くも一オンス半のパンをたべることになつた。この嚴しい精進を止められたゝめに違ひないことであるが、彼女はしばらくのあひだ豚の裘の痛い毛を内側にして着てゐた、その着物を彼女はのちになつてから毛で織つた贖罪者の帯に換へた。

彼女が會堂から、そこで永いあひだ祈りをしてゐたあとで歸つてくるときに、彼女の顔は輝やくやうに見え、そして彼女の語る言葉はたのしさにみちてゐた。あるとき彼女はふしぎに深く心にしむやうに、キリストの血に象つた聖水の意義をさとつた、そして彼女は終日それを姉妹たちのうへに滴らし與へて、そ

してキリストの傷から流れ出た救ひの河をいつまでも忘れてはならないとくりかへしくりかへし説いた。あるときの洗足の木曜の夕に彼女はたましひのなかに酔つたやうにものごちなくなつて、そのまま二十四時間のあひだ覺ますことができなかった。「何故ここに燈火がついてゐるのであらう？」彼女はめざめたときに尋ねた。「それではまだ夜はあけないのですか？」あるクリスマスの夜彼女は病ひに臥してゐたので他の姉妹たちとともに會堂にゆくことはできなかった、しかるに床のなかにゐながら、彼女はサン・フランチェスコの修道院の會堂で行はれた聖式を悉く聞き、そしてそこに建てられた聖誕祭の秣槽のなかに嬰子イエスを見た。

フランスにとつて、彼がいかに高くキアラと彼女の姉妹たちの崇敬の対象となつてゐたか、そして彼らの信仰の感情の一部分は彼の個性に對する心もちをまじへてゐたかは決して祕密であつたはずはない、姉妹たちをこより顧みさせて、彼らの心をたゞ神にのみ向はしめるために、彼は目だゞぬほどに、けれど故意をもつて彼らから次第に距つた。彼がサン・ダミアノを訪れることは、はじめのうちは屢ばであつたが、次第に間を遠く稀なことになつた。この行爲はつひに彼の弟子たちの注意を惹くやうになつて、彼らは、彼が姉妹たちに對して親切を缺いてゐると解釋した。フランスは彼らに理由を説明した——彼が姉妹たちとキリストの間を距てやうと思はないことを。彼は何ものに換へても浮世の「牧師の戀」と呼んだもの、牧師に對するまつたく個人的な愛慕を避けやうと欲したのであつた。

あるとき彼はサン・ダミアノに来て説教することを承諾した。キアラはことにその説教を愛してゐた、法王グレゴリオ九世がのちになつて、フランスカンが彼女の修道院で説教することを禁じやうと思つてゐたときに、彼女はこの禁令に對する答へとして、一二一九年ごろにつひに閉鎖がサン・ダミアノでも強行されたのちに、姉妹たちのために戸ごとに物乞ひをする兄弟たちを他へ遣つてしまつた、そして彼女は曰つた、「もし私たちがたましひのパンをもたずに目を送ることができるならば、私たちは肉體のパンもまたもたずにゐることができませう、」そして法王は彼の禁令を撤回しなければならなくなつた。

そのやうにしてフランスは姉妹らのもとに行つて説教することを約束した、そして人々はみな神のこゝとばを聞くことのためばかりでなく、彼らのたましひの父であり導びきである人を見ることについて悦んでゐた。フランスは會堂に歩み入つた、そしてしばらく立ちどまつて、目を天に擧げて祈りに沈んだ。そのあとで彼は聖器をあづかる姉妹の幾人かにむかつていくらかの灰をもつてくることを乞うた。灰はそこに持つて來られた、フランスはそれをもつて彼のまはりに一つの環を描いて、そして残つたものを彼は己れの頭に撒いた。そのときはじめて彼は沈黙を破つた、けれど説教するのではなくて、たゞダヴ^ダデの第五十の歌を、かの大なる贖罪の歌 *Miserere* を唱へた。彼はそれを終りまで曰つたとき、直ちに外へ去つた——彼は姉妹たちに、彼の人格についてたゞ贖罪者の衣を纏ひ灰を頭に塗つたあはれむべき罪人のほか何者をも認めぬことを教へたのであつた。

「小^{ファイオレット}さき花」に傳はつてゐる物語、「いかに聖キアラは聖フランスス及び彼の兄弟らとともにサンタ・マリア・デリアンジェリにて食せしか」もまた上に曰つたとき思想の徑路から理解されなければならぬ。それはつぎのごとくである――

「聖フランススはアッシジに住みしころ屢ば聖キアラを訪れて聖とき教訓を與へたり。しかして彼女はたび彼とともに會食せむことをあつく願ひてやまさりければ、あまたたび彼にそのことを乞ひたり、しかるに彼は決して彼女にこの慰さめを與ふことを欲せざりき。それ故彼の伴侶なる人々はキアラのこの切なる思ひを見て聖フランスに曰ひぬ、父よ、我ら思ふにおんみの嚴格さは神の愛にふさはしからず、姉妹^{シスター}キアラのごときかくのごとく聖とく、神に愛せらるる處女がたゞおんみとともに會食せむといふごとき小^{サキ}さき願ひをも許さざるはよからず、ことに彼女はおんみの教へにしたがひてこの世の富みと榮へを捨てしものなることを思ひたまへ。しかしてまことに、もし彼女がこれよりも更に大なる恵みを乞ふ求むるともおんみはこれをおんみのたましひの草に對して許し與へざるべからず。そのとき聖フランスは答へぬ、汝らはわが彼女の願ひをきくべきものなりと思ふや？ 兄友らは答へぬ、さなり、父よ、おんみが彼女にこの慰さめを與ふるはまことにふさはしきことなり。そのとき聖フランスは曰ひぬ、汝らすでにしか思はば、われもまたしか思ふなり。されど彼女が最も大なる慰さめを得べきために、われはこの會食をサンタ・マリア・デリアンジェリにてなさむと欲す、何となれば彼女はすでに久しくサンタ・ダミアノの外に出でざ

ればサンタ・マリアの處、すなはち彼女がはじめて髪を剪りてイエス・キリストの花嫁となりしところを見ることは必ず彼女を悦ばすべし、されば即ちそのところにてわれらは神の御名に於てともに會食せむ。かくのごとくしてそのために定められし日きたりしかば、サンタ・キアラは一人の姉妹ともに修道院を出でて聖フランスの兄弟らに伴はれてサンタ・マリア・デリアンジェリに來りぬ、しかして彼女は眞心をこめて祭壇のまへより處女マリアを拜しぬ、こゝは彼女が髪を剪り覆衣を被たるところなり、それより人々は午餐の時至るまで彼女を導きて處のうちを觀せしめたり。しかしてそのあひだに聖フランスはつねに彼の爲すがごとくに食卓を何もなき地のうへに設けしめたり。しかして食事の時となりしかば、聖フランスは聖キアラとともに、聖フランスの兄弟の一人は聖キアラの姉妹の一人とともに座につきぬ、しかるのちすべて他の人々は謙だりて食卓の席につけり。しかして食事のはじまりしとき聖フランスは神につきていと妙へにうるはしくいと高くいとふしぎなるさまに語り出でたれば、神々しきめぐみの豊饒は彼らのうへに降りて、彼らはみな神に酔ひぬ。しかして人々はかくのごとく神に酔ひて、空を仰ぎ手をあげてありしとき、アッシジとベトナの人々およびあたりの村々の人々は、サンタ・マリア・デリアンジェリとその處のすべて、及びその處に近き森とがはげしく燃えあがるを見たり、彼らは會堂と修道院と森とがみな焼けつゝある大なる火災ならむと思ひぬ。さればアッシジの人々はまことにあらゆるもの燃えつゝあるなりと思ひて、火を滅さむとて急ぎゝたりぬ。しかるに彼らその處に到りしとき彼らはすこしも火あるを見ざりき。

しかして彼らは歩み入りて聖フランスと聖キアラと彼らの伴侶がみな謙たれる食卓にすはりて、靜觀に於て神に醉へるを見出でぬ。それによりて彼らはこれが神の火にて物質の火にあらず、それをば神はこれらの聖とき兄弟らと尼たちのたましひを燃やせる神の愛の火を示し象どりたまはむために奇蹟をもてあらはしたまひしものなることを知りぬ、それによりて人々は心に大いなる慰さめをうけ、しかして聖とき建徳をうけて歸りゆきぬ。」

キアラはかやうにしてフランスのまへでは慰さめと勵ましを必要とする女らしき弱者として自らを示した、けれど姉妹らに對する關係では彼女は強き女として他の人々を護り庇ふ人であつた。彼女がむかしの戰士の家の血を承けてゐるといふことは偶然ではなかつた。

このことはサン・ダミアノがフリードリヒ二世の軍隊に包圍されたあひだにあつた二つの機會に於て示された、フリードリヒは法王との戦ひのあひだに法王領の諸國に侵入を企て、そして狡猾にも彼はこのときに回教徒なる弓手を用ゐたのであつた、これらに對しては法王の破門はまつたく意味のないことであつた。アッシジから幾哩も距らぬノチエラの高い山砦からこれらのサラセン人は山蜂のやうにスポレットの谷へ飛び下りて、そしてある日はサン・ダミアノの修道院をも攻撃した。もしも回教徒が侵入すれば、姉妹らは死の怖しさに逢はなければならぬのみならず、また辱しめに遭はなければならなかつた、彼らは震へながらキアラのまはりに集まつた、そして彼女はそのとき——屢ばのことであるが——病に臥してゐた。勇

氣を失ふことなく彼女は自らを鎖した扉のところ運ばしめて、自ら危険に暴露される最初の人となつた、つぎに彼女は銀と象牙でつくつた盃、そのなかにはパンで形づくつた祭壇の聖物が貯へられてあるのを會堂から持ち來らしめて、そして救ひをもとむる祈りに深く沈んだ。そのとき彼女には盃のなかゝら一つの聲、幼兒のそれのやうな聲が出てくるやうに思はれた、そしてこの聲は曰つた、「われはつねに汝らの護りとならむ。」力を得て、主をたのみにして彼女は祈りから起ちあがつた、そしてやがてまもなくサラセン人は攻圍をやめてどこかへ行つてしまつた。

別のしかたでもキアラは彼女の恐れざる精神のあることを示した。一二二〇年にモロッコに於て五人のフランスカンが最初の殉教の死を遂げたことの知らせがイタリアに達したとき、キアラの心ははなはだしくうごかされ、彼女もまた異教の國に赴いて、彼女の姉妹らと、もに殉教の苦しみを受けようと願つた、そしてたゞフランスの嚴しい命令のみが彼女のこの企ての實行を沮み得たのであつた。あるひは彼女が法王その人とのあひだに、彼女が貧しくであることの誓ひを忠實に守らむがために、起した争ひに於てこそ彼女はみづからの最も雄々しく擔まぬ氣象を示したと曰へやう。幾たびも幾たびもくりかへして、彼女の親しき友ウゴリノは、一二二七年に法王となつてグレゴリオ九世となつたのち、まつたく好意から彼女と彼女の修道院に強ひてある財産を與へようと欲した、それによつて彼らも他の尼たちのやうに平和と靜寂のなかに棲むことのできるためと思つたのであつた。彼女は固く執つて聽かなかつた。そして彼の曰ふ

には、もしそれがたゞ彼女の爲した誓ひのためのものであるならば、彼女をその約束から解きはなつ力を彼はもつてゐる。「聖とき父よ、」彼女は答へた、「私の罪から私を解き放して下さいませ、けれど主イエス・キリストに従ふことからは解き放して下さいますな。」彼女の死ぬ二日まへに彼女はインノケント四世から、彼女と彼女の姉妹らが永久に貧しくある権利の不朽な承認を得た。

フランシスとはちがつて、そして彼女のなした厳しい生活にも拘らずキアラは老年まで生きてゐた、彼女は修道院のなかに送つた四十一年のうちに六十の年に歿つた。これらの時のあひだに一つの大きい悲しみは彼女に達した、それは一二二六年にフランシスの死んだことであつた。彼が歸つてポルチュウクラの小さな貧しい病室に臨終に横はつてゐたとき、一人の使ひはキアラの許から來た、彼女は今一たび彼に見えることを乞うた。けれど聖フランシスはそのことを返して、そして兄弟らの一人に曰つた、「行つて妹キアラにすべての悲しみを去れと語れ、今彼女は私を見ることはできない、けれど彼女は一つのことをたのみにせよ、彼女の死するまへに彼女とそして姉妹らは私を見ることができ、そしてそれによりて大いなる慰さめを得るであらう。」

そしてやがてフランシスは死んだ。けれど彼の死のあくる日アッシジの市民らは來ていのちなき骸をとりそして兄弟らととも、それをアッシジの上まで、聖歌と讚美の歌をもつて、喇叭を奏して、橄欖の枝と燃やされた蠟燭を手にして運んで行つた。そして十月の朝はやくに紫いろの霧はまだ平野のうへに力づよい

海のやうに横はつてゐるとき、彼らはサンダミアノの日のてらした高みへ登つた、葬りの列は停つた、そして魂なき骸をのせた柩は會堂のなかに引き入れられて、そして姉妹らの格子窓への近くをすぎたとき、彼らはその死せるたましひの父を見納めに見ることができた。「しかしして主の婢らが聖とき血肉を受け神のことばを聞くを常とせるところの窓の格子が除かれたるのち、兄弟らはこの聖とき骸を柩より扛きて、腕を擧げてこれを支へて窓のまへに示しぬ、しかしして女君キアラおよび他の姉妹らが彼らの慰さめのために欲するかぎり永くかくなしぬ。」^{スベクトルニルフェクテオニス}「完全の鏡」はかく物語る。そして小さな會堂は今や悲しみと別離のひびき歎きと涙に反響した、「たれか涙を催さざらむ、」チセラノのトマソは曰ふ、「平和の天使たちすらかくのごとく痛ましく哭くとき……」

年々は過ぎた、そしてキアラはまだ存へてゐた。フランシスは逝つた、けれど彼の近い友、レオネ、アンジェロ、ジネプロらは屢ばサンダミアノに來た、そして彼らとともキアラは彼らの師がまだ世にあつた時の思ひ出のなかに沈んでゐた。フラテ・エジディオも——この人はつねには彼の僧房のなかにじつとして少女が己が部屋にすわつてゐるやうにすわつてゐた、とクインタヴルレのヘルナルドは曰つた——時々キアラを訪づれた、そしてこれらのおとづれのあひだに、つぎに記すやうなまことのフランシスカン風な光景は見られたのである。

あるとき一人のイギリス人で神學博士なるフランシスカンがサンダミアノで壇に立つて説教をした、そ

これは彼の學問を傾けつくしたものであるが、この處でアッシジのフランシスの唇から聞かれた言葉とは甚しく異つたものゝやうに見えた。すべての人はそれに心づいた、そして突然にフラテ・エジディオは聲をあげて呼んだ、「師よ、休めよ、そして私が説教しよう！」イギリス人なる博士は説教をやめた、そしてエジディオはゝじめた、「神の聖靈のもゆるがなかに」と古い傳説はいふ。そして彼は壇を退いて外國の説教者に再びあとを續けしめた。けれどキアラはこれについて歡んだ、彼女のいふには、死せるものをこの世に復活せしめたのを見るよりも歡ばしかつた、「何となれば、神學の博士が彼に代つて一人の在俗の兄弟が語らうと思ふとき、口を閉づるがごとき謙讓はまことに私たちの最も聖とき父君フランスの欲するところでありませぬ。」つひに時はきた、そして死のよぶ聲はつひに聖キアラに聞こえた。二十八年のあひだ彼女はたえずある程度に病氣の犠牲となつてゐた、そして一二五二年の秋には彼女は終りの遠からぬことを感じた。けれどそのときにも未だ彼女の生涯の爲すべきことは果されてゐなかつた——彼女はまた彼女の貧しさの特權の最後の、有効にそして改削されない承認を得てゐなかつた。恰かもこの時にあつてインノケント四世はリヨンから歸つてきた、彼はフリードリヒ二世の軍隊を恐れてそこに避けてゐたのであつた。破門された皇帝は一二五〇年にフィレンツォで死んだ、そして一二五二年の九月法王はベルジアに住家をさだめた法王廳がウムブリアの都に落ちつくや否や姉妹らのために好意をもつて保護者となつてゐるカルチナレリナルド、のちに法王アレキサンデル四世となつた人は、サンダミアノを訪れた。こゝで彼はキアラに祭壇

の聖禮を與へた、そして彼女は法王から特權の承認を得むことを懇に乞うた。

法王は宮廷の人々とともにつぎの年一二五二年の夏にアッシジに來た。彼はキアラを病床に訪れた、そして彼女が習慣にしたがつて法王の足に接吻しようとしたとき、彼は足を一つの椅子のうへに上げて、彼女の欲することをたやすく爲さしめた。彼女はそのとき法王の祝福を乞ひそして彼女の罪のために全たき赦しを願つた。「わが娘よ、われもまた汝のやうにすこしも神の赦しを要せぬ身であつたならば、」とインノケントは嘆息しながら曰つた。彼が立ち去つたのちキアラは彼女のまはりに集まつた姉妹らにむかつて曰つた、「娘らよ、主の君を讃へませう、今朝私はみづからかの君を迎へました、そして今は私のやうな賤しいものもこの世にかの君の代表者たる人に見えることができました！」

このゝち姉妹らはキアラの床を離れなかつた。アニエザは三十年のあひだ姉と別れてフィレンツェのモンティチェリの修道院に院主となつてゐたが、跪いて彼女の床の側で泣いてゐた。日を経ても死なむとする聖女はそのやうにして臥してゐた、二週間以上のあひだ彼女は何も食へなかつた、けれど心ちは強かつた。彼女の懺悔を聞く牧師は忍耐をすゝめた。「私が主イエス・キリストの恵みを神の僕フランスから學び知つたのち、私にとつていかなる痛みも、いかなる苦行も重すぎたことはなく、いかなる病ひもあまりに苦しかつたことはありませんぬ、」彼女は答へた。彼女はそのつぎに彼女のポルチウンクラにある友だちに使を送つた、レオネ、アンジエロ、ジネプロらに、彼らは彼女にきて主の受難の物がたりを讀んで聞かせよと曰ひ遣

つた。彼らは来た、そしてフラテ・レオネは床の側に跪いて、涙ながら硬い藁の囊の床に接吻した、フラテ・ジネプロは彼の携へた「神よりのおとづれ」を開いた、アンジェロは咽び泣いてゐる姉妹らを慰さめた。

そのとき涙にみちた静けさのなかにキアラの聲をあげていふのが聞こえた。「恐れずにおいで、おまへは道に善き導きをもつてゐます！ 恐れずにおいで、おまへを創造なされた主はまたおまへを聖ときものにして下さいました、彼はいつもおまへを護つて下さいました、彼はおまへをやさしく、母が幼い子を愛するやうにいとしく愛して下さいました。おまへ主よ私はあなたをほめそして讃へます、あなたが私を創造して下さいました故に！」

キアラは黙し、そしてふたたびしづかに横はつた、そして目をひらいてみた。「あなたは誰と話していらつしやいますか？」姉妹の一人はつひに問うた。キアラは嚴そかに答へた、「私は私の祝福せられたたましひと語つてゐます。そしてあなたがたには見えませんか、」彼女はしばしたつて言葉をだした、「あなたがたにはあの榮光の王、いま私の見てゐる譽れの君が見えませんか？」

涙に盲ひたまなこをもつて人々は死にゆく人を見守つた。けれどキアラはもはや彼らを見なかつた。彼女は目をはなたず室の扉を見守つてみた——そして見よ、戸は開いた、そして白い衣を纏つて、輝やく髪には黄金の環をつけて、天つ國の處女らの一むれはキアラを永しへの故郷に伴ふために入つてきた。彼らの一人は他のすべてのものよりも丈たかくそして美しかつた、そして彼女の頭のうへに金飾は輝いて、そ

れがためにうす暗い僧房は眞晝の日のやうに照らされた。そして美しき輝く貴婦人は處女らのむれを出でキアラの臥床にあゆみより、死にゆく女のうへに身を屈めて、彼女を抱いて、彼女を一つの光の覆衣のしに蔽うた。マリアの腕に抱かれて、天つ國の女王の光りかやく純よき衣の襲につままれて、キアラのたましひはとこしへにつきぬ榮えにのぼつた。けれど硬くなつた手のあひだに、死せる聖女は二日まへに送られた法王の文書をもつてみた——それはキアラと彼女の姉妹らがフランスの理想にしたがつて生活する権利の最後の嚴そかな承認であつた。

サン・ダミアノの修道院は今なほ立つてゐる、そして殆どキアラと姉妹らのときと變らない。こゝには彼らが祈禱書の章句を誦した小さい狭いコルスがある、壁に沿うては椅子が並んでゐて、永年の使用のために光つてゐるが、それは昔の粗末な木の細工である、そして古い、軌んで音のする板敷の眞中に一つの古い机があつて大きなアンチフォネスの本がそこに開かれたまゝになつてゐる。こゝでキアラが姉妹らを祈禱に呼びあつめるときに用ゐた鐘や、彼女が祭壇の聖禮をさづかるときつねに用ゐてゐた錫の杯や、レオネが彼女に書き與へて、そして彼女が日々その文を誦して祈つた祈禱書や、またインノケント四世の贈つた銅製の小さい龕がある。こゝに見られる食堂はかつて法王グレゴリオ九世が賓として招かれたところであつて、こゝで彼女は法王の命によつてパンを祝福した、そして彼女が祝福したときいづれの塊にも十字のしるしがあらはれた。こゝで我々はキアラの小さい狭い、低い寢室を見ることが出来る。こゝで我々は最

後に彼女のいはゆる園——二つの高い壁のあひだの小さい空地の一片を見るのである。

けれどこの小さい階から、二つの壁のあひだに、丁度劇場の額縁プロツキエウに囲まれたやうに、愛らしいウンブリアの國の美しい眺めが開いてゐる——リヴオ・トルトやボルチウンクラや、白い道や、橄欖の生えた野や、青い山々のなかにベットの小さい町などが見える。この園みづからはたゞ幅のひろい階のやうなものであつて、そこに土が積まれ花が植ゑられてゐるのである。そして古い傳説によれば、キアラはたゞ三種の花をこゝに植ゑることを許したといふ、それは、純潔を意味する百合と、謙だりを意味する葎と、そして神と人とに對する愛を意味する薔薇とであつた。

聖キアラの傳記のよるべきものはロカテルリ(Vita breve di S. Chiara, Assisi 1682)による、著者は不幸にもはや得られなくなつたこの原文を用ゐることができなくフランシス譯("St. Claire d' Assise, Rome 1899-1900)を用ゐた聖キアラの傳記の根據はその他に、彼女の遺言書、アレクサンデル四世が彼女に聖位をあたへた文書、そしてフラテレオネとフラテ・アンジエロによつて助けられてスポレットの僧正バルトロメオの書いた、そしてトマス・デ・チェラノによつて文飾された傳記等である。

(譯者は一九一四年ごろに出たイギリス人スミス氏の "Life of St. Chiara" (London) がまづに引いた根據から、ことに彼女と聖とき貧しさの掟の發達との關係を叙べた本であるのを聞いてゐる、その他に無名の著者の "St. Chiara and her Order" は姉妹の團體が近代のヨーロッパとアメリカに於いてもつてゐる發展までを叙べてゐる。)

1. 「小さい花」第三十、
2. 「小さい花」第十五、
3. 「完全の鏡」百八、

第三編 神の歌人

Quid enim sunt servi D. i nisi quidem jocularores
 ejus, qui corda hominum erigere debent et movere
 ad lætitiã spiritualem ?

Speculum Perfectionis

「神の僕は人々の心をたましひのよろこびにまで擧げ進
 むるを務めとする神の歌人ならずして何ぞや」

「完全の鏡」に於ける聖フランシスの言葉

一 小鳥の説教

フランシスは聖キアラと彼女の最初の姉妹たちのあつまりがサン・ダミアノでいとなんだ静かな、心の内
 部にかむつた、幸福な生活を見たのちに再び彼の召されたるつとめについての疑ひをおこしたやうに見え
 る。あるひはむかしの隠者のしたやうに世を遁れてたゞひとりおのがたましひの福祉のために生きる方が
 よりよきことではないだらうか？ 彼の弟子のうちにも多くはこののがれみちをたどつた！——シルエス
 トロやルフィノやある程度までエジディオもさうした。そしてフランシスは隠遁の生活の危機——たましひ
 の専恣と禁欲の驕慢(それについては「小さき花」Floresの二十九に特色のある叙述が讀まれる)——を知つ
 てゐた、けれど彼にとつては説教者としてのさまよひの生活によつてたやすく彼が「たましひの足のうへ
 に塵を積らすこと」と名づけたものに自からを落すことは疑ひにすべきことではなかつた。

これについてフランシスがどう考へてゐたかを理解するためには我々は彼のあとを逐うて、彼が一二
 一年から一二年までに企てた大いなる布教の旅を見なければならぬ。

シルエストロとゞもに彼はトスカナに行き、まへに語つたごとくベルジアの内訌を和解し、コルトナで
 はギドー・ヴェニョテリ¹とそして——もしワッディングが正しいとすれば——名だかいそして怖れられたエリ

ア・ボンパロネに逢ひ、市の近傍にチェルレと名づくる隠者の住家を設け、そしてそのうちアレツオとフィレンゼに旅した。フィレンゼでは一人の秀でたる法律家が彼に加はつた、それはジョヴァンニ・パレンティと呼ぶ人でボロニヤ大學の博士でチギタ・カステラナで法官となつてゐた。ワッディングはロドルフォに據りつゝパレンティが團體に入つたことについて一つの逸話を語つてゐる——彼が散歩してゐたとき彼は一人の豚飼ひが強情な豚どもを小屋に追ひ入れながら、「豚どもさつさと小屋に入つて行け、法律家が地獄に墮ちるやうに。」と曰ふのを聞いた。古い諺で *Die Juristen sind böse Christen* (法律家は悪い基督教徒である) といふのはすでに十三世紀には、やつてゐたらしい。

いづれにしてもパレンティは彼の官職をすて、フランスカンになつた、同じとき他にボロニヤの法律學者ニコロ・デ・ベポリは興味を感じてボロニヤ市にフランスカンの布教に便宜を興へた。フィレンゼからフランスはビザに行つた、こゝではのちに團體の長職となつたアンジエロと、のちに兄弟のイギリス布教の先達となつたアルバートが加はつた。彼はそこから引きかへしてアッシジへ、サン・ジミニヤノを経て、キウジとチエトナの道から歸つた、そして滿一年の不在のうちに彼は寺院カセドラルでまへにも曰つたレントの説教をした。

けれどフランスのこの旅の後半は殆ど凱旋の行式であつた。彼が一つの市に近づかうとすると、鐘は鳴らされ、人々は棕櫚の葉を手にして彼を出で迎へ、そして彼を導いて祭りのやうな行列のうち地方の

牧師のもとに案内して、そこに宿らしめた。人々は彼のもとにパンを持つてきてそれを祝福せむことを乞ひ、そしてのちに遺物として保存した。そして彼らはイタリアの人がすぐに口に出す叫びを、「聖者を見よ、」をくりかへした。²

弟子らもこれはあまりに甚しいと思つた。ある時は彼らは——使徒たちが彼らの師に問うたごとく——フランスに問うた、「あの聲をお聞きになりませんか？」フランスは答へた、彼には彼にさへげられる尊敬は寺院のなかの繪にさへげられる光榮と同じものであつた、何となれば、神を畏れる人はたゞ神の姿繪であつて、その肉と血は、木や石と同じやうなもので、神にのみたゞ屬してゐる光榮を自らに占めることはできないのであるからと思つてゐた。³

けれど永いあひだにはこのことは彼にとつて十分な満足ではなかつた、そして彼はそれ故に彼の能ふかぎり自らを卑しめやうとした。彼は好んで曰つた、「まだ私を讃めるのは早すぎる、今に私も息子や娘を生ませるだらう。」あるひは彼は叫んだ、「もし神様が私に下さつたほどの恩寵を山賊にお與へになつたときには、山賊は私のしたよりもつと有りがたく思ふであらう。」彼は、テルニの僧正があるときフランスの説教のまへに小さい前置きを語つて、このフランスのやうな、つまらぬ、やくざな男が、やうな大きい結果に到達するのは何といふ神のふしぎであらうかといふ主題を敷衍して曰つたときに、僧正に心から感謝した。⁴ 彼の生活の嚴しい方法を讀へる人々に對しては、彼は曰つた、「私のするやうなことは罪人にもま

たできます。罪人も祈りをし、断食をし、涙をながし、肉を責めることはできます。たゞ一つ罪人にできないことは——主なる神に誠であることのみ。」

フランシスはあまたの神に對して誠ならざるふるまひをみづから責め、そしてそれを決して隠さなかつた。あるとき彼は病に臥した、そして病のあひだに雛鶏を食べたことがあつた。病の癒えるや否や、彼は頸を縛らせて市の罪人の曝し場へ曳いて行かせて、そして曳かれてゆきながら、繩取りのフラテをして呼ばしめた。「こゝにゐる大食漢は人々に知らせずに雛鳥を隠し食ひした男でござる！」そして人々はたゞ彼の謙だりをのみますま讃へたのを見て、フランシスはフラテらの一人をして厳しく彼を責めしめて、一たび人々から眞のことを聞かうと欲した。心ならずもその兄弟は彼を罵つて、禮儀知らずと呼び、怠けものと呼び、役にたゝぬ僕と呼んだ。そして満足の微笑をもつてフランシスは答へた、「神様は汝の言葉に對して恵みを賜はるであらう。それこそピエトロ・ロディ・ベルナルドネの息子の受くべき言葉である。」

あるときはフランシスは孤獨のなかに退いて、そして人々の好意を遁れようと努めた。かやうにして彼は一二一年のレント(Lent)のあひだをすべてトラジメネの湖の人棲まぬ小島ですごした。そして彼はつぎの冬の大部分をキウジに近いところのサルテアノの山の上の隠栖ですごしたやうに見える。その隠栖の小舎は木の枝を編んでつくつたもので、そこに彼は少數の兄弟らとゝもに住んだ。それは何よりも野獸の穴に似てゐた、けれどフランシスは「その荒寥のありさまの故に、その寂しさの故に、そして最後に、彼

はそこからほかにアッシジを望むことができる故に」いたくこの處を愛した。この寂寥のなかで彼はさまざまの大なる誘惑のおとづれに逢つた、それはあるときは殆ど絶望させた、一つの心のうちの聲は曰つた、「救ひはあらゆる人に與へられる、たゞ汝のごとき自らを苦しめるものには與へられない！」そしてあるときは獨棲の境涯をすてゝ妻帯を思はせた。彼の誘惑に對しては彼はむかしの隠者から行はれた仕方を試みた、——彼は帯として結んでゐる繩をもつて、自ら裸かの脊をいたく打擲した。けれどこの「兄弟なる驢馬」(とフランシスは彼の肉體的な我を名づけた)がそれでも満足しなかつたとき、そして彼は他の方法をはじめた。彼の僧房のそとに土は雪に覆はれてゐた、そしていつものやうに半身裸かのまゝでフランシスは雪のなかに出て、雪で七つの像をつくりはじめた。その仕事が終わつたとき彼は己れに向つて曰つた「見よ、フランシスよ、こゝにゐるのは汝の妻である、その向うの大きいのは——その側らにゐる四つは、それは汝の息子二人と娘二人とだ、そして他の二つは僕と婢である。彼らはみな寒さに凍えて死ぬところだ——行つて何か着せてやれ！ 汝にそれができなければ、それならば汝は神のみのほかにたれにも仕へる必要のないことを歡べ。」

さまざまな仕方、まつたくこの世から脱れるといふ思想はフランシスの心に入つてきた。彼は屢ばそれを團體の兄弟らと諮つて、その利害を考へた。彼が隱者の生活を選ぶのを妨げたものはいつも一つであつた、それは、我らの主の示された例であつた。イエスは父君の右手にあつて光榮のなかに止まつてゐる

ことができたのである、けれどそれをば顧みずに、彼は人の生の轉變を堪へ忍び、十字架の上に恥辱のくるしい死を遂げむがために地上に降られた。そして十字架こそは最初からフランシスの模範としたものであつた、十字架、それに向つて彼は中世のすべてと、もに、モーゼに曰はれた神の言葉を適用した——*secundum exemplar*……「なんぢ山にて示されし式様にしたがひてこれをつくれ。」

疑ひのなかにあつて、フランシスは神よりこの決定をもとめやうと決心し、そしてこれがいかなるものであらうとも、傍を顧みずにそれを追はうとした。かへつて他のときには彼は聖書を聞いて、彼の見いだした章句を指示としてとつた。このときには彼は二つの恩寵をうけたたましひたちのインスピレーションに身を任せることにきめた。フラテ・マッセオはそれがためにまづスオラ・キアラに、つぎにフラテ・シルエストロの許に遣はされた、後者はこのときモンテ・スバジオの上なる窟のなかで隠者の生活をしてゐた、こゝは今ではカルチェリの修道院となつてゐて、その窟のなかにはフランシスカンの最初の僧房が今もなほ見られるのである。フランシスはシルエストロとキアラの判断に従ふべく決心した。

“*Actus beati Francisci*”には語られてゐる、「そのときフラテ・シエストロはたゞちに祈りをはじめたり、しかして祈りつゝ彼はたゞちに神より答へを得てフラテ・マッセオのもとに歸りきたり、かく告げぬ、「神はこれを謂ひたまへり、フラテ・フランシスに語れ、神は彼をたゞ彼自らのために召したまひしにあらざして、なほ彼はあまたの人のたましひたちの收穫をなし、あまたの人々彼によりて救はれむためなり。」この答へ

を得てつぎにフラテ・マッセオはたゞび聖キアラに赴きたり、しかるに彼女は答へて曰ひぬ、彼女および他の姉妹らは神よりフラテ・シルエストロとまつたく同じ答へを聞きぬと。これをもつてフラテ・マッセオは聖フランシスのもとに歸り往けり。聖フランシスはもつとも大いなる愛をもて彼を迎へ、彼の足を洗ひ、彼のために食を供へ、しかして食せしちフランシスは彼を招きてともに森の中に行きぬ、しかして聖フランシスは頭巾を除けて、両手を胸の上に組み、跪きて問ひけるは、「わが主イエス・キリストがわれに爲せとて何ごとをか命じ給へる？」フラテ・マッセオは答へぬ、「フラテ・シルエストロにもスオラ・キアラにもともに他の一人の尼にも榮えあるイエス・キリストは答へしかして示したまひき、これ主の御旨なれば汝は世に行きて教へを説くべし、何となれば神は汝をたゞ汝自らの故に選びたまはず、されど他の人々を救はむためなり。」しかしてそのとき主の御手は聖フランシスのうへに置かれ、彼は聖靈の火に跳り、高きより來れる力に激まされ、しかしてフラテ・マッセオに曰ひぬ、「よし、さらば神の御名に於いて往くべし！」しかして彼はフラテ・マッセオとフラテ・アンジエロを共に伴ひぬ。この二人はともに聖とき人なりき……しかして彼らはカンナラとベヅニヤのあひだに來れり。しかして聖フランシスは目をあげて道のかたはらなる木々のあひだにさまざまの鳥數かぎりなく群れ集ひたるを見たり、これはかつてこの處に見たることなき光景なりき。しかしてなほ多くのものは木々の下なる地上にもありき。聖フランシスこの大いなる群れを見しとき、神の聖靈は彼に降り、彼は二人の弟子に告げぬ、「こゝにてわれを待て、われは我らの姉妹なるこの小

鳥に説教せむ。』しかして彼は野に歩み入りて、地上に居る鳥らに近づきぬ。しかして彼が説教をはじむるや否や、木々の上にありたる鳥はみな周囲に飛び下りて、彼はその真中に歩み入り、僧衣の裾はその幾つかに觸れしかど、一羽の鳥も身を動かさざりき。

聖フランシスは鳥にむかひて語りぬ、『わが姉妹なる鳥たちよ。汝らは神に多くの恵みを負へり、されば汝らはつねに、いかなるところにても神を讃へ神をほめざるべからず、そは汝らがかく自由に好むところに飛びゆくを得るが故に、また汝らの二重三重なる毛の衣と汝らの色美しく飾りたる上衣と、しかして汝らの勞せずして得る食物のために、また創造の主が汝らに與へたまへる美しき聲のためにすべきなり。汝らは蒔かず、また刈らず、しかれども神は汝らを養ひたまひ、汝らに川と泉を與へてこれを飲ませたまひ、丘や山や、崖や岩を與へて汝らを隠したまふ、高き木々には汝らの巢をつくらしめたまひ、また汝ら紡ぐこと織ることを知らざれども、彼は汝らと汝らの幼なきものに必要なる衣服を與へたまふ。されば汝らは造りたまへる主をよく愛せよ、彼は汝らにかくのごとく大いなる恵みを示し賜ひたれば、されば汝らよく心せよ、わが妹なる小鳥どもよ、御恵みを忘れざれ、しかしてつねに神を讃へむことをつとめとせよ。』

しかるに聖とき父のことばかくて畢りしときこれらの小さき鳥はみな嘴をひらき、羽をうち、頸をのばし、頭を恭しく地にたれはじめたり、しかしてその歌と身振によりて聖フランシスの言へることいたく彼らを悦ばしめたることを示したり。聖フランシスはこれを見て心に歡こびぬ、しかしてこの鳥の數のかく夥しきと、その種類の差別かぎりなきこと、そのよく馴れたることを感歎し、しかしてこのために彼は萬づをつくりたまへる主を讃めまつり、また彼らもみづから主を讃ふべきことをやさしさとて訓へたり。しかして聖フランシスこの説教を終へ、神を讃ふべきことを訓へたるのち、彼はこの鳥たちの群れつどへるうへに一つの十字の印を描きぬ、しかして鳥はみなたちちに飛びたちて、妙へにめざましく、力をこめて囀へづりつゝ四方にわかれて舞ひ去れり。⁷』

1. 「小さき花」三十七はたしかにこの人のことである。
2. *Clano Vita prima* I, VIII. 62. *Tres socii* XIV. *Speculum perfectionis*. Cap. 45.
3. *Speculum perfectionis*, cap. 81. 4. 同じく、四十三
5. 「小さき花」七
6. *Celano, Vita sec.* II. 82.
7. 「小さき花」十六

二 傳道旅行

今は聖フランシスの決心は新しい布教の旅をイタリアのみに限る企てはなかつた。このたびアッシジをたち出たとき彼はより大いなる計畫をもつてゐた、ある意味に於て、彼のこの心もちは三十代にある人

のむねに歸つてきたむかしの若々しい武功の夢であつた。それは十字軍遠征の時代であつた——いくばくもなくしてブリアンのジョン、即ちフランスがむかし崇拜した英雄ワルテルの弟はダミエッタにむかつて基督教徒の大軍の統帥として出で立つた。フランスもまた十字軍に赴きたかつた、けれどその武器は他になくたゞ福音のみであつた、そして彼が心に抱いてゐたことは基督教と悔い改めをサラセン人らに説教しやうとする事のほかになかつた¹。

第一に彼はこの新しい提議について法王の同意を得ることを願つた。聖ドメニコについて、「いつも教示を乞ふためにローマへの途に歩むのを見た」と謂はれてあるがフランスについても同様である。彼が團體の掟についてインノケント三世の不文の承認を得てから二年のうちに、彼は再びローマに赴いて法王があつたとき彼にした約束を思ひ出させやうとした。彼は今や恃むところあつて「神は私の兄弟らの數を増して下さいました」と曰ふことができた、そしてそれ故に彼はより大いなる使命が與へられむことを乞ふことができたのであつた。

我々は聖フランスの第三回めのローマへの旅について知るところは少ない。彼の途に於て彼はトードイに近いアルギアノをおとづれて、そこで彼は市場で説教したときに、彼のあたりに群れつどうて、囁りさげぶ聲で彼を妨げた燕のむねに命じて沈黙させたといふことである。恐らく彼はこのときナルニとトスカネラをも通つたであらう。

ローマに在つては、フランスは例のやうに街や小徑に立つて教へを説いた、それらの説教のあひだに二人の新しい兄弟は加はつた——のちにイスパニヤの布教師となつたツァカリア、そしてキリアム、これは團體に入つた最初のイギリス人である。團體の全たき將來について、それらよりもはるかに重大なできごとフランスがこゝで一人の女と結んだ友情である、この婦人をばのちに彼はその男性的な性格から戯れに「兄弟、ヤコバ」と呼んだ。彼女はローマの貴族グラチアノ・フランジバニの妻で、名はジャコマ——もしくはヤコバ・ディ・セッテゾリと曰つてそのころ二十五の年ごろであつた²。

このフランジバニ家はローマの最も高貴な家柄の一つであつた。それはかのgens Aniciaの岐れであるといひつたへられて、一族のうちから幾百年のあひだには、ムルシアのベネディクトゥス、ノラのパウリヌス、そして聖グレゴリオを出したといふことである。七一七年にフラキウス・アニキウス・ベトルス・レオがそのとき一族の家長であつたが、彼はローマにあつた饑饉のときに仁慈あるパンの施しによつてFrangipanni¹、パンを割く人」といふ美しい姓を得た。十三世紀のはじめにはフランジバニ家はローマに棲んでテゼレ對岸とエスキリーノに廣大な地所を有ち、そしてエスキリーノにはさまざまなものうちにもセブチムス・セズルスの築いたLeptizoniumの城のやうな古跡を所有してゐた——この名は姿はかはつたけれど今でもローマの町の名Via delle sette Saleに残つて、そしてその名からグラチアノ・フランジバニの妻のデ・セッテゾリといふ名がついたのであつた。

ジャコマの生れにはノルマンの血統とシチリアの血統がまじつてゐたと曰はれてゐる。彼女は多分一九〇年ごろに生れたのであらう、彼女は一二二一年にはすでに結婚してジョヴァンニといふ子をもつてゐた、のちに彼女は今一人の男の子グラチアノを生んだ、それは一二二七年で彼女の良人が死んでからまもなくであつた。すでに一二二二年に彼女はフランスと相知つた——それはつぎにこのウムブリアの福音傳道者がローマに来るときごとに、一つのまことなる、内面的な友情にまで發展したのである。

フランスはたしかに多くの困難もなく彼の事業にむかつてインノケント三世の祝福を受けたにちがひない。彼は船に乗つた、けれどいつこの港からであるか、それは我々には知られてゐない。暴風は船をあらぬ方に逐ひ遣つて、それはつひにスラヴィヤの海岸についた、そこでは東方の國にむかつて船出するみちがなかつた——その上年は終りに近く、天候もまた渡海には不適當であつた。フランスはアンコナにゆく船を求めた、けれど船員らは彼と彼の隨從者を載せることを好まなかつた、そこで彼らは船員の知らぬまに一計を案じて船の積荷のあひだに隠れてゐた、そして船が海原の沖に出たのちに彼らは、じめて姿を現はした。そして船路が不順な天候のために豫定よりも延びたために、船内の糧食は乏しくなつたとき、二人の隠れてゐた船客は許可を得て彼らのもつてゐた糧を船員らに分つて彼らのふるまひを詫びた。

フランスの足がイタリアの土に觸れるや否や、彼はむかしからの生活状態をつゞけて町より町に教へを説きつゝ旅した。アンコナの町では彼の説教はめざましい彼果となつて三十に餘る人々——あるものは

司祭たち、あるものはまた俗人であつたが——は兄弟の團體に入れられむことを願つた。到るところに彼はまへのにとくに人々の歡迎と群集に圍まれてゐた、人々は少くも彼の長衣の裾にも觸れようと努めた。たゞアンコナのあたりにもひろまつてゐたカタリ派のものゝみは彼から遠ざかつてゐた、何となれば彼の説教の核心は、彼の宗教的生活のすべてと同じく、ローマ教會に對する絶對的な、無條件な、すべての瑣事には目を閉ぢたる服従であり、従つてその結果として正教會の僧職に純に第一義的な深い尊敬をもつてとであつたゝめである。これらそして他の同様な布教の旅のことを顧みて、フランスは彼の遺書のなかに「あたりの教區に棲める貧しき小さき僧職ら」についてかやうにも記したのである——彼はいかなることにも拘らず彼らを彼の師長として「恐れ、愛ししかして敬ふ」とゝもに「彼らの過ちに目をとめざる」ことを欲した。この最後の感情はカタリ派には缺けてゐるのであつた、彼らは今まで永く、そして廣く僧職の罪惡について絶叫し、そしてこの僧職の代表する教會から多くの人々を奪つた。フランスは稀に見るところの鋭敏な、物と人とを區別することのできる性格であつた、そしてそのうへ彼はいかにしてこの精神を彼の兄弟らにも吹き入れるべきか——をわきまへてゐた。「けれどもいかにして牧師が偽りを曰ふことができよう？」フラテ・エジディオはあのやうな理由のない妄想のあひだにも、この精神で問うたのである。

アンコナに在つてこのときフランスは當時のもつとも名だかい人々の一人を改宗せしめた、それはローマなるカビトルの上で月桂冠をうけた巡歴詩人、グリエルモ・ディ・井ニ人々から歌の君と呼ばれた人で

あつた。ディギニはマルカダンコナなる小さい町サン・セゼリノを訪れた——そこに彼の親族なる一人の尼が棲んでゐた。フランシスはそのときその尼の住む修道院で教へを説いてゐた、そして名だかい詩人はここで彼を聴いた。

あらゆる考證に従へば、聖フランシスの語る調子にはことに心に迫りくる何ものかあつたのである。スバトのトマソの日ふには、それは説教とはいへまつたく純な實踐的なもの、道徳的改革についての講話であつた。³そしてフランシスはまた擔まぬ道徳家であつた、彼は己が目撃した誤れることについてしづかに黙つてゐることはできなかった、そしてたゞちにすべてのものにもつとも正しき名を與へた。彼の見すばらしい風采にも拘らず彼はそれによつてたゞに駭きを感じさせたのみでなく恐ろしさをも吹き入れた、彼には洗禮のヨハネの面影があつた。⁴彼の書いたものには數知れず罪人の受くべき「禍なるかな、彼らの酬いはとこしへの却火なり！」が記されてある。彼は神の審判をもつて嚇かすことを恐れなかつた、彼のことばは心臓を貫ぬく劍に比べられた。⁵

かやうにしてグリエルモ・ディギニはサン・サゼリノの僧院で名だかい悔い改めの説教者を聴聞した。詩人は好奇の心からこゝにきた、そして町のたのしい青年の群れも彼とともにきた。はじめフランシスはさほど彼らを動かさなかつた。けれど歌の君王はまもなく耳を傾けはじめた——それはあたかもこのアッシジの小さき賤しき人はたゞ彼にむかつてのみ語つてゐるやうに、彼の聞くすべての言葉はたゞ彼にのみ向け

られたやうに見え、そして言葉はあひついで熟練せる射手の手から覗ひはづれぬ矢のやうに、その鋭い鐵尖を彼の心に貫ぬきとほした——

フランシスは何ごとについて語つたのであらう？ それは彼の常の話題であつた——この世を輕んじ、悔い改めて來るべき怒りの日をまぬかれること。そして彼が語りをはたつときたゞちに單純な、そして大いなる事が起つた、グリエルモ・ディギニは起つた、そしてフランシスの足もとに身をたふして叫んだ、「兄弟よ、私をば人々から放ち去つて、そして私を神に贈つて下さい！」

つぎの日にフランシスは彼に團體の鼠色した衣服を着せ、そして腰には繩の帶をしめさせて、彼にパチフィコといふ名を與へた——何となれば彼は浮世のさわがしさをはなれて神の平和ペイチェを求めたからである。⁶

これと同じやうにして一世紀ののちに一人のもつと大いなる詩人がアッシジの聖フランシスの子どもらにあひだに平和を求めたことがあつた。ある夕ぐれにダンテは、すでに灰色になつた頭して老いかゞまつて、アペンニニの山のなかなるさびしい修道院のまへに立ちそして戸を敲いた。そして門守が彼に何を求めるのかと尋ねたとき、この大いなるフィレンツェ人はたゞ一言にすべてを包んで答へた、⁷「平和をこそ。」

フランシスがかやうにしてたれでも悔ゆる心をもつて彼のもとに來るものを受け入れて、そしてそのうへに新參の試みもせず團體の服を着せた——一二二〇年になつて新入者の一年間の試みといふ制度は定

められたのである——けれど彼はふしぎなほど兄弟らのなかに入れられることを願つてくる多くの人々を判別し選擇する力をもつてゐた。パチフィコの悔い改めよりもなく、一人のルッカからきた若い貴族はフランスを求めて、涙をながしつゝ彼の足もとにひれふして、彼の子どもらの一人たらむことを乞うた。フランスは彼にむかつてにべもなく曰つた、「汝の泣くのは嘘だ、汝の心は神のものではない、何故汝は聖靈と私にむかつて嘘をいふのか？」まもなくかやうな修道院へのおこがれはたゞ若い人の氣まぐれであつて、恐らくは家庭の状態についてすこしく不満であつたときに起つたことであるのが明らかになつた。彼の両親がそこに來て彼に歸つてくることをすゝめたとき、彼はすぐに承諾した。

ことにフランスは *virtuosi*——學識あるものについて油斷しなかつた。彼はかう公言したことがあつた。「かやうな學問のある人が私のところへ來るときに、彼の決心がまじめであるか否かは、彼が私にむかつてする最初の乞ひでただちにわかる、『見よ、兄弟よ、われは永く浮世に生きてつひにわが神を正しく知ることあたはざりき、われに世の騒がしさよりはるかに遠く、そこにわれは心のくるしみともだえのうちにながしへる、また浪費せるむかしの年々について思ひ、未來に於て更によき生涯をなさむそなへをなすべきところを教示したまへ、』これはまじめなのである。」

たゞこの世のそとに棄てられた人々のためにのみ、貧しきもの、虐げられたるもの、不幸なるもの、よるべなきもの、癩病のもの、盜賊らのためにのみ、聖フランスの心は隈なく開放されてあつた。まこ

とに聖ベネディクトゥスの掟にこの頃にも「すべての旅人はキリストのごとく迎へらるべし、」といふことは記されてあつたけれど、フランス自らも彼の青年時代の経験を知つてゐたことであるが、この掟は必ずしも守られず、そして社會上にある地位を要求することのできる人々が賓客となつたときのみ守られながら恵みを最も多く要すべき家なきもの、浮浪者または乞丐らに對しては顧みられなかつた。されば彼がサンタ・マリア・デラ・ロッカで経験したことを念頭に置いて、彼は彼の掟のなかに、その劈頭にかやうな美しい言葉を書いた、「兄弟らのもとに來らばたれにてもあれ、友または仇、盜賊または剽盜、これらみな懇に迎へらるべきなり。」

彼のもつとも近きまめやかな弟子たちさへもこのことについては彼の命に従ふのを難しとしたことがあつた。「完全の鏡」は團體の初期のことのでつぎの印象の深い物語をのこしてゐる——

「ボルゴ・サン・セポルコロの上なる隠者小屋に於て、あるときあたりの森に伏して道ゆく人を襲ふをつねとせる山賊らきたりてパンを乞ひたり、されどそのとき若干の兄弟らは彼らに施をなすは善からずといひぬ、そのとき聖フランスはこの修道處にきたりぬ、兄弟ら問ひけるは、盜賊に恵みを與ふるは正しきことなりや、しかして聖フランスは彼らにかく答へたり、「もし汝らわが曰ふごとく爲さば、そのときわれは神によりて望むらくは彼らのたましひを救ふことを得べし。されば行きてよきパンとよき葡萄酒をとりきたれ。それを森にもちゆき呼び彼らに語れ、わが兄弟なる盜人らよ、こゝにきたれ、われらはよき酒とよき

パンを汝らのためにとりきたれり。しかして彼らはたゞちに來るべし、汝らは地の上に布をしきて彼らのために食卓を設け、己れを謙りてたのしく彼らの食ふあひだその給仕をなすべし。されど彼らの食し畢りたる時汝らは神のことばを彼らに語りて、最後に彼らが汝らの乞ひを容るゝやうに乞へ、すなはち彼らは何人をも殺さず、何人の身にも害をなさざることを汝らに約束するやうに乞へ。もし汝ら直ちにすべてのことを彼らに求めなば、彼らは必らず否といはむ、されど今汝らの謙たりと善のために彼らはこれを汝らに約束するならむ。あくる日彼らのよき約束の償ひとして汝らは彼らにむかてパンと酒、卵と果實を携へゆき、彼ら食する時彼らに給せよ、しかして彼ら食し畢りたらば、汝らは彼らに曰ふべし、何故汝らは終日さまよひて餓えをしのび、多くの苦しみに逢ひ、しかして心と行ひに於て多くを損ひ、汝らのたましひに禍をつくるや？ 主に仕ふるははるかに優れり、彼は汝らにこの世にて必要なものをあたへたまひ、同時に汝らはたましひを救ふを得べきなり。かく曰はゞ主は彼らにめぐみをたまひて汝らの謙たりと忍耐の故に彼らを悔い改めしめたまはむ。」されば兄弟らは聖フランシスの曰ひしがごとく爲しぬ、しかして盗人らは感謝と神の慈しみより兄弟らの乞ひたることを守りぬ。まことに兄弟らの謙だりと信頼の故に彼らは兄弟らを助けて修道院に薪を運び、そのあるものはつひに團體に入りたり。他のものは罪を懺悔し、その非行の贖ひをなし、兄弟らのまへにて嚴そかに誓ひて、己が手の勞働によりて生活し決してかゝることを爲すまじといへり。」

この物がたりが最も古い傳へに於いてすでに我々のまへに置かれてあるごとく、これは我々に聖フランシスの人を知る明知とともに（彼は一人の飢ゑたる人に説教することの無益なるを知り、そして彼はローマは一日で築かれたのではないことを知つてゐた、また彼のまつたく非バリサイ人風な人を愛する心をまつたく理解せしめる。こゝに基督教の歴史のうちに、福音のことばがまつたくその謂はれたときと同じ意味に理解された一例がある——）「しかしてもし汝らおのれを愛するものを愛しなば、汝ら何をか報いとして得むや？ こは税吏もなすことにあらずや？ たゞ何ものをも望まずして假しあたへよ。さらばその報酬は大いなり、且つ汝らは至上なるものの子とならむ、そは彼は恩を忘るゝものまた不善なるものにも慈愛ふかければなり。」

フランシスはかやうに極端にまで大いなる罪人に寛容であつたが、これに反して彼は善き人々を苛酷なる試みに與へた。多くのことを許されあたへられてゐる人々からは彼はまた多くを期待した。「小さき花」には彼のかやうな特色を例證する多くの物語がつたはつてゐる——ルフィノの場合にしたやうな行ひはそれである、彼はアッシジの最もよき家の族たる彼に命じて、ボルチウンクラより町まで赤裸かで行かせて、そして赤裸かで寺院で説教せしめた。同様な命令はボルゴ・サン・セポルクロの近くでフラテ・アニョロにも與へられた、彼はおなじ市の出であり、やはり貴とい家の族であつた。彼もまた赤裸かで町に赴いて、あくる日にフランシスが來て説教すべきことを告げしめた。けれど彼は市門に近づいたときに呼び戻されて

そしてフランスは彼が己れを賤しくすることの熱心さを讀へて天國の報いあらむと語つた。

つぎの二年のあひだにフランスのした旅についてはたしかに知られてゐることはなほ少ない。ワッディングは讚歎すべき慧しさをもつてこの時代に對する傳記的材料となるべき多くの斷片を整理して、一つの技巧的なモザイクを造りあげようとした、けれど彼は成功しなかつた。たとへば彼はフランスが一二二年より一三年のあひだの冬にアッシジに病臥して、そして病ひの床から彼の「基督教徒への手紙」を送つたやうに記してゐるが、これには多くのもつと後年のできごとを混じてゐるのである。

我々はフランスがなほイタリアのなかを旅しつゞけたことを信ずるに足るいくらかの根據をもつてゐる、我々はまた一二一三年のはじめに彼が同様な使命をもつてロマニヤの縣に旅してゐるのを見る——この地方にサン・マリノの小さい共和國から遠からぬところに、昔しモンテ・フルトロと呼ばれた一つの貴族の居城があつた、(今はサン・レオの町に近いサッソ・フルトリオといふところである。)

フランスとその友——恐らくそれはレオネであらう——はこの町に來た、それはある美しい五月の朝で、恰かも城の塔には旗や幟が翻つて、誇りやかな喇叭の響きは盛大な祝ひ日であることを示してゐた、花やかに装つた小姓たちや兵士らは釣橋のうへを忙しげに行きかひ、美々しく飾つた強い馬に跨つた騎士たちは城門に列んでゆき、そして若き老いたる貴婦人たちの、レースの胸當や高い髪飾を着飾つた群れをのせたたのしい馬車は城にむかつて坂道を馳せた。あらゆるものがけふは晴れの祝ひ日の試合が舉げられ

てこの處の高貴な人々がすべて招かれてあることを示した。

この輝やかしいすべての花やかさはフラテ・フランチェスコを憤らせなかつた。信心のあつた人々は屢ばこゝに缺點をもつてゐる。それ故フランスはつねに弟子たちを戒めて貴といふ衣服を着て、奢りのなかに住んでゐる人々を審判き、これを輕んずることならしめた。「神はまた彼らにも主で在せられる、されば彼は御心の欲したまふとき、彼らを召して、正しき聖ときものとなさることができぬ。」それはフランスみづからにもそのやうに起つたのではなかつたらうか？

それ故彼はしばしそこに立つて、モンテフェルトロの男爵らの紋のついた旗が城門のうへに翻へるのを眺めた。そして彼は微笑みを浮かべて彼の友の方に向つた。

「汝は何と思ふ？ 私たちもこの祝ひへ入つて行かうではないか、あるひは私たちが神のために一人のよき騎士を味方に引き入れることができるであらう！」

彼のことばのごとくそれは行はれた。この祝ひは一人の年若い軍人が騎士に叙せられるためであつた。人々はみなミサに出席した、そのあひだに若き人は騎士となる宣誓をした、そしてそれが畢るとフランスは城の庭園にある一つの階を幾歩が上つて行つて、そして語りはじめた。彼の語る題として彼は地方のことばでつぎのいくつかの言葉を選んできた、それは小兒の口にするやうな簡単な歌で、つぎのやうな單純な二行であつた——

Tanto é il bene ch' io aspetto

Ch' ogni pena m' é diletto.

(わが待てる幸ひはいと大いなれば

あらゆる苦しみもわれに悦ばし)

人はたやすく想像することができよう、あのやうにアーサー王や圓卓の騎士のロマンスの空氣に生ひ立つたフランスはこの主題をつぎのやうな風に敷衍したことであらう——

「美しい貴婦人の心を獲むと欲する騎士はさまざまの大いなる苦しみを冒すことを覚悟しなければならぬ。彼女はあるひは彼にむかつて、十字軍にスルタンと戦ひにゆくことを求めるであらう、あるひは彼に一角獣の角を取りきたれと命ずるであらう、またはロクと呼ぶ鳥の卵を取りきたれといふかもしれない。あるひは彼は囚はれの處女を救はなければならぬであらう、または暴れたつ急流の注ぐうへに架けた一人の人も渡るに覺束ないやうな狭い橋のうへを戦馬に乗つて馳せなければならぬかもしれない。そしてかやうな危険や苦しみを、忠實な、貴といふ騎士はよるこんで冒すのである、もし彼の思ふ貴婦人がそれを命じたならば敢へて背くことはできない、そしてこれらの危険のあひだにも彼はたゞ彼女の白い手のことのみ思つてゐる——それは彼がこれらのことをすべて成し遂げて、この責任と従属のつとめが終つたのちに歸りきたつて接吻することのできるその手のことをのみ、そしてすべての恐れは去てしまふ

「けれどこゝにいま一つの更に貴といふ騎士道がある、それには人はみな召されてある、そしてたゞ貴族に生れたものゝみではない。こゝに他の一つの戦ひがある、それは浮世の美しき人の恵みをわがものとするためではなく、とこしへなる、そして上なき美しきもの、即ち神の御心を行ふとである……何となれば、神はそれらの浮世の美しい貴婦人たちよりもはるかに美しいものではないか——それは彼女らはみな彼の御手につくられたものゝこの世の塵よりつくられたものではないか？ そのやうにあまたの美しきものをつくられたその人は、彼こそあらゆる彼のつくつたものよりも美しくはないだらうか、然り、彼はまことに美しい、そしてそれ故に彼は私たちが彼のために騎士として赴きそして勇ましく彼の榮えのために敵なる浮世や肉や悪魔と戦ふべきものである。そしてもし私たちが彼に忠誠を勵んだならば、騎士がその愛人にむかつてするやうに妨げやくるしみにもうち克つて彼のために仕へたならば、彼は私たちに何物かを許し與へぬことがあらう！ 彼は、この世にもつとも美しい貴婦人が與へることのできるものよりもかぎりなくまさつたものを與へることが出来る。貴婦人はたゞ彼女みづから、彼女の手、彼女の心のほかに何もものもたない、けれど手はいつかは朽つべく心はいつかは潰へるであらう。けれど試合に勝つた人に輝やく賞品を與へるときやうに神が勝利の賞として自らを與へたまふとき、そのとき彼は我々に生命と光と幸ひをつきざる、滅びざる永しへに於て與へて下さるのである。¹⁰」

フランスの語つたのはこのやうな仕方であつた、そして彼の言葉はたしかにあまたの若い貴といふ心を

動かしたことは考へられる。そのなかに一人は——これはカゼンチノなるキウジの城の伯爵オルランド・デ
イ・カッタニであつた——フランスのまへに行つて曰つた。

「父よ、私は私のたましひの福祉についてあなたと語りたのでございます！」

けれどフランスは、神の聖靈がたましひのうへに作用するにまかせて、急ぐことなく、そしてかう答
へた。

「まづ行つて友だちとともに招かれた祝ひと宴に行つておいでなさい。そのあとで私たちは静かに平和に
於いて話ませう。」

試合がはて、若い伯爵は再びフランスを訪れた、そして彼らはともに語つた、そして二人の話の
終りになつてオルランドは曰つた。

「私はトスカナにラ・エルナと名づけられた山を所有してゐます、それははなはだ寂しい山で静かな敬意に
適してゐます。もしあなたとあなたの兄弟がそこに棲まうと仰せられ、ば私はたましひの福祉のために彼
處をあなたがたにさしあげます。」

“Actus Beati Francisci”には語られてある——「しかるに聖フランスは祈りするに適せるさびしき處を求
めむことを願ひぬたり。されば彼はまづ第一に神に謝してその信ずるものに山りて小羊らのためにまめや
かに心つけたまふことをたゞへ、つぎに彼はオルランドの君に謝して曰ひぬ、「公よ、家に歸りたまはゞ我

はわが兄弟らのうちより二人を遣さむ、きみは彼らにその山を示したまへ、もしその處祈りと靜想に適せ
るところならば、我はきみのめぐみふかき賜ものをよるこびて受くべし。」¹¹

そのときは、フランス自らはオルランド大公の贈物を視察に行かなかつた。何となればまたも殉教の
榮えの冠は彼を遠くから招いてゐた。彼は聖地に渡ることは失敗した——今彼は福音を地中海の彼岸なる
モロッコモロッコの回教徒に齎らすことを思つてゐた。スルタン・モハムメド・ベン・ナッセルモハムメド・ベン・ナッセル（基督教國ではその稱號
なる「信徒の統治者」を轉じてミラモリンと呼んだ）は恰かもトロザの戦ひでスパニヤ人に敗られてアフリ
カに退いてゐた。こゝにフランスは彼を訪れることを決心して、恐らくは一二一三——一四年の冬のお
ひだに旅に出發した。彼はスパニヤを経て旅した、けれど旅の目的地につくまへに病に罹つて、再び果
されぬ目的を抱いて歸つてきた。ポルチュウンクラについたとき彼はあらたに數人の兄弟を團體に迎へた、
そのなかにはチェラノのトマソがゐたのである。

彼の効果を得なかつた異教徒への傳道の、ちの年に、フランスは第四のラテラノ會議に出席してゐた
やうに見える。彼がその折にインノケント三世からキアラとその姉妹らについて貧しさの特權を承認され
たことは確かである。

これと同じころにフランス人なる僧職ジャック・ド・ギトリーは聖地へ旅するみちでイタリアをすぎて、そ
のときに初期の「小さき兄弟ら」を知つた。一二一六年の十月にジェノヴァから故國の友に贈つた手紙に、こ

のフランス人の寺院法律家はかやうに謂つてゐる――

「クリア（ベルジアに於ける法王廳）にて日を過せしあひだに我は多くの不満なることを目撃せり、人々はみな浮世の雑事に、政治あるひは法律に身を委ねたれば殆んどたましひのことについて一言も曰ふいまなかりき。されどかくの如きあひだにありてたゞ一つ我を慰さめしものありき、多くの男女、そのうちには富めるもの、名あるものも尠からざりしが、キリストのためにあらゆることを棄てて浮世を逃れたるものあり。これらは小フラティミリさき兄弟らと呼ばれ、法王およびカルチナレフのあひだにも尊敬せらる。されど彼らはこの世の事物にすこしも心をもとめずして、日々おのが手にて熱心に勤勉に働らきて人々のたましひをこの世の虚榮より引きはなち、人々を地に墮ちしめず彼ら自らとゞもにかしめむと努めたり。しかして神の恵みもて彼らはすでに豊けき收穫を刈り入れぬ……

「彼らは古への人々の例に従ひて生活せり、即ち「信ずるもの」群れはたゞ一つの心なりき、」と書かれたるものなり。晝は彼らは働らき、また町々あるひは街道に出で、人々のたましひを撫へ、夜は歸りて荒れたるところあるひは人なき處に赴きて祈りに耽れり。團體中の女は町々の近くなるかなたの隠栖に集まり住めり、彼らは他より何ものを受けず、おのが手の勞働によりて生活せり……されど團體に屬する男子は年に一度許多の伴侶とゞもに豫め定めたる處に集まり、ともに會食して主に於て樂しみ、しかして善き人々の助けによりてこのとき彼らの掟を定めこれを宣ふ、そは法王によりて認可せらるゝなり。この

のち彼らは分れて、一年のあひだあるひはロンバルディアに、あるひはトスカナに、あるひはアペリアに、シチリアにあり。聖とく、神を敬ふこと篤き人、ニコラウスは法王の懺悔父なるが、近ごろクリアを捨てて彼らの許にのがれ行けり、しかれども法王が彼を缺くあたはざることをあるにより、彼は呼び返されたり。¹²

一二一六年の夏には法王廳はベルジアに駐まつてゐた、そしてジャック・ドゥ・ギトリーの簡単な叙述の終りの數行によつても知られるごとく、フランスの創めた運動は最高ムイスマントの僧官たちのあひだにも擴まつたのである。僧正ニコラウスとここに曰はれてゐるのはトックスクルムの僧正、のちにカルチナレ・ニコラ・キアラモンテイといはれた人であつた、我々が彼について知ること、即ち彼がフランスカンに對して極めて好意を抱き、そしてその一人を彼の側らに置かうと思つてゐたことである。或はその同じ頃に、他に一人のカルチナレはじめて小さき兄弟らを訪れた、それはオスチアのカルチナレ・ウゴリノであつた、彼は後に團體に對して親しき友であり倦まざる保護者であつた。彼は多くの僧職や軍士の從者を従へてボルチウンクラに來た、「完全の鏡」によれば、そこで兄弟らは集會を開いてゐたのである。そして彼がこの兄弟らのいかに貧しく生活し、藁の上に寝て、そして蔽ひのない大地に食事を設けるかを見たとき、彼は心を動かされて涙をながし、そして叫んだ、「あのやうにすべての日々を虚榮と娛樂に送つて奢りに住んでゐる我々の身はいかになりゆくであらうか？」

フランスと法王の宮廷とのあひだに更に密接な關係が結ばれる時の近づいてゐることは明らかであつ

た。まへにあるやうにこの二二一六年の夏の大部分に亘つてクリアの駐まつてみたベルジアからボルチウ
ンクラは遠くはなかつた、そして訪問はお互ひにあつたやうに思はれる。アッシジのフランシスの生涯のあ
ひだのもつとも議論の問題となる事件の一つを、この夏のあひだのこととするのは多くの傳記著者の一致
すると五ろである——それは、ホノリウス三世の位についたはじめに、アッシジより來たれる神の小さき貧
しき人は、キリストの代表者のまへに跪いて、名だかいボルチウンクラの赦免状を乞うたのである。

1. Celano, Vita prima, p. 55.
2. 著者はエトワール・ダランソンの“Frère Jacqueline” Recherches historiques sur Jacqueline de Settesoli,
l'amie de St. François Paris, 1899. に據る。
3. Boehmer: Analecten zur Geschichte des Franciscus v. Assisi, 1904. S. 106.
4. Tres socii XIII, 「完全の鏡」一〇五
5. Tres Socii XIV, 「もつとも鏡とき言葉、それは人この心を刺し貫いた。」
6. Celano: Vita secunda, III, 49, III, 27, III, 76. 「完全の鏡」五九、六〇、一〇〇
7. 第一の掟 Regula prima, c. VII. Et quicumque ad eos venerit, amicus vel adversarius, fur vel raptor,
benigne recipiatur.
8. 「完全の鏡」六六、「小さき花」二六
9. Tres socii XIV, n. 58. Regula secunda (第二の掟) 第二章
10. サバチエ氏が「聖フランシス傳」に、「愛のこゝろから神に仕へるものとそして報いのために神に仕へるものとあ
ひだの對照を十分に説明し、前者を純に聖フランシス風なもの、後者を教會の主張なりと考へようとするならば、そ
れは存在せざりし對照を掲げるものである。却つて我々はフランシスがつねに彼の説教に於いて報酬と罰のモチーフ

から出發してゐるのを見る。彼の「薔の集會」に於ける言葉は誤解されてはならない、「大いなることを我らは神に約せ
り、より大いなることはまことに我らに神より約せられたり……樂慾はみちかく罰は恒ねなり……」馬太傳六章一、ロ
マ書八章一八、參照

11 「小さき花」、烙印についての第一の考察。“Aelus”は「小さき花」の原本と見るべきラテン本である、このことは
その第九章にある。

12 Boehmer: Analecten, S. 98—99.

三 ボルチウンクラの免罪

第一に注意する必要があることは、ローマの正教會は、ボルチウンクラの免罪狀を制定する以前には、
たゞ一種の絶對免罪の制をもつてゐるのみであつた、即ち十字架を手にとつて聖地に於ける戦役に加はつ
たものに許されたそれである。十字軍に加はり、そして罪を懺悔し、司祭より解決を得る等の要件を果し
たものはすべて完全な除罪を得て、たゞに教會に由る贖罪のみならず煉獄の罰をも悉く除かれ、そして彼
のたましひは死のうちに直ちに神のまへに出ることができるとなつてゐた。

この十字軍の免罪狀はIndulgentia de Terra Sancta はのちになつて範圍をひろめ、何らかの理由から自か
ら十字架をとることをしなくても、金錢もしくは軍士をこの聖とい戦役に提供したのものにも適用された。
この關係にあつてもつとも重大なことであるが——法王から許されてかやうな擴張された意味の免罪狀を

布める権利をもつてゐたのはフランシス派であつた。

他の場合に於いて、例へば一つの寺院聖潔のごときときに、正教會が免罪狀を承認するときには、それは全たく明白に異なる形式で行はれた。一二一五年のラテラン會議はこの慣習に更に拘束を加へることを提議した寺院の聖潔の場合にはたゞ一年間の教會法上の贖罪が免除されそして聖潔の一年ごとの記念の祭口についてはたゞ四十日間の免除を與へることに定められた。アッシジのサン・フランチェスコの聖潔のときには、グレゴリオ九世によつて、全たく例外のものとして、海を渡つてきて祭式に出席したものには三年、そしてアルプス山を越えてきたものには二年の免罪が許し與へられ、そして普通の順禮は通常の一年間の免罪をもつて満足しなければならなかつた。

これに對して、フランシスが法王から得やうと試みたもの、更によりよく曰へば、克ちえたものは何であつたか？ 信ずべき典據に従へば、ある美しき日に彼はマリニャノのフラテ・マッセオとよもに法王ホノリウス二世の前に出で、そしてボルチウンクラの寺院のために、聖地に於ける十字軍士の受けるとおなじ免罪狀を乞うた。彼はかう曰つて法王のまへで宣べたといはれてゐる——「願はくは、犯せる罪の悔いをもちてこの寺に入りきたり、そして罪を懺悔し、司祭より解決を得たるものには、すべて、彼の受洗の日よりこの寺に入りきたりし日までの生涯のあひだになせし罪の責めと罰とを解き放ち給へ。」法王は、ローマの法王廳はかつてこのやうな免罪權をいかなる寺院にも與へたことがないといひそしてフランシスに通常

の免罪の一つを許さうとした、けれどもいづれも徒勞であつた。フランシスは彼の心を翻さなかつた、そして彼は、主みづからが彼を遣してこの免罪を乞はしめ給ふのであると公言した。このとき法王にはかにあたかも神の導びきたまふかのやうに、この點について屈從した、そして残るところは、ホノリウスがこの新しい免罪狀が十字軍の免罪狀に對して有害であるとして指示した個所についてカルデナレたちが新しい制限を設けることだけであつた、即ちこの免罪は毎年たゞ一日のみ與へられる、即ち前日の晩鐘から全二十四時間を経て日没に至るまでである。フランシスは満足して去つた、そして法王が彼に文書の保證を欲するかと問うたときに、彼はその必要はないと答へた、何故となれば、「神は自らの御業をいかにして日の光のうちに出たすべきかを知り給ふ故に。」

此の關係を基礎として傳説の一群は作られた、オーフェルベックがボルチウンクラの禮拜堂の正面に畫いた薔薇の傳説はその一つである。これらの傳説の裝飾は最初に十四世紀の作品に現れたのである。上に曰つたものはそれよりも古い源に引用することができる。

一目見たばかりでこの物語は自らあり得べきことに思はれる。彼の傳記を著した人々はみなフランシスがいかに彼のなつかしいボルチウンクラを愛したかを語る、そして我々はまた彼がいかに熱心に罪人らの悔い改めに努めたかをも知つてゐる。彼はあるとき異象のうちに、いかにあらゆる國々より人々が遠近からきて小さいボルチウンクラのまはりに漲るやうに集まるかを見た、そして彼の弟子たちの一人も同じ

夢想をもつた。

また書類を嫌ふこともフランスの特色の一つであつた。一二一〇年に彼はインノケンツ三世の口頭の許可で甘んじ、そしてラテラノ會議でも彼はこのうへに何も欲しなかつた。オルランド・ディ・カタニが彼にラエルナを贈つたときにも、これは「書類を作らずに」定められたことは、その子の伯爵カタニの贈與の覺書にも(一二七四年)記されてある。彼の遺書のなかにフランスはフラテラに向つて斷然と禁じて、「寺院についてもまたいかなる場所についても」クリアから書面にした特權を求めるときを許さなかつた。古い説話にあるやうなフランスがホノリウスに與へた答へは、まつたくフランスの精神に於いてであることは明瞭である。

フランスがかやうな答へをしたであらうか？ あるひは換言すれば、かやうな會見が實際の出來事であらうか、これはまつたく別問題である。

第一に重要なことは、十三世紀の疑ふべくもない嚴正な權威のある典據によれば、ボルチュンクラの免罪狀については一片のことばも曰はれてゐないことを、我々はこゝに言はなければならぬ。トマソ・デ・チエラノはグレゴリオ九世がアッシジの聖フランチェスコ寺に與へた免罪狀のことを知つてゐる、けれど、彼も、また古い傳記著者たちもボルチュンクラ免罪なるものの存在については夢想だにしてゐない。一二一六年以後は毎年、ホノリウス三世の定めた日取、即ち八月一日の夕から二日の夕までのあひだにこの赦免

狀を得ることができたといふのを保證するのはたゞ比較的近代の諸書のみである。かくのごとくふしぎにも公認の傳記著者が口を噤んで曰はないことは、今は存在しない法王の勅令の結果が、あるひはコルトナのエリアとその一派と、「ボルチュンクラ派」——即ち團體内の嚴格な派との對抗の結果とも考へられる上にはれたる傳記著者たちは有力な側に従はなければならなかつたのである。

これがもし正しい結論ならば、一方に於て我々は嚴格な一派から出た傳説集、たとへば「完全の鏡」もしくは「Actus beati Francis」そして「小さな花」のなかにボルチュンクラ免罪狀のことが光榮ある地位に書かれてあるべきことと思ふ。けれどこゝに於ても上に曰つたやうな説話の痕跡すら見出さうとしても徒勞である。

免罪狀の傳説はそれ故に直接にではなくともなほ間接とはいへフラテ・レオネやその他の聖フランスにもつとも親しい伴侶たちに據るところを見出さうとするのは自然である。そして第一の列に現はれてくるのは、一二七七年十月三十一日に數多の人の見るまへで記されて、アレツオの公證人の署名のある證文である、これは二人のフランスカン、「聖フランスの生前の伴侶たりし」アレツオのフラテ・ベネデットと、フラテ・マッセオの親友と稱するアレツオのフラテ・ライネロによつて作られたのである。この證書のなかにフランスカンの二人は、彼らが「眞實それ自身である」といはれるフラテ・マッセオから、いかに彼とフランスとがともにベルジアに赴いて、「法王は聖使徒の座よりかゝる免罪の權利を與ふるをつねとせず

といひしにも拘はらず」つひに法王ホノリウスから上に曰つた免罪狀を得たかを語るのを聞いたことを保證してゐる。

文は極めて短かく、證書の日附はまつたく完全で且つかかなる點にも精確である。

原本は今傳はらない、サバチエは今アッシジにある謄本の一つは十三世紀の末のものであると主張してゐる。

種々な他の同時代に出た物語はアレツツオのフラテ・ベネデットに由つて、またフラテ・マッセオの證言を基礎としてゐるのである。サバチエはそれらを彼の校訂した一三三五年ころのフランチェスコ・バルトリのポルチウクラ免罪に關する著書のなかに取り入れた。それらはけれどラ・ゼルナのフラテ・ジ・ヴァンニもしくはアックス・バルタのフラテ・オドーラから出てゐるにせよ、一つも新しい事實を提供しない。それは一つの源泉マッセオ・ベネデットの種々なる處に形を變へて新たに現はれるのに過ぎない。ピエトロ・ツァルファニといふ老人がその若年のころにポルチウクラの寺院聖潔の式に出席したといふこと、そしてそのとき彼がそこでフランシスが「一枚の紙を手にして立つてゐた」のを見たといふことを主張するのは、けれど實際は問題にならない。

同じ時代についての他の一群の典據となるものはフラテ・マッセオの代りにフラテ・レオネに關するものである。ペルジアの貴族ヤコボ・コッポリは一二七六年の二月十四日にペルジアなるフランシスカンに彼らの

モンテ・リビドオの古い修道院の建つてゐる丘陵を贈つた、彼は同じ頃に、アレツツオのベネデットと同じやうな形式で、彼がフラテ・レオネからポルチウクラ免罪狀のことを聞いたといふことを保證してゐる。コッポリの語るところでは、法王はフランシスに七年間の免罪を許さうとした、けれど彼は諾はなかつた、そして法王は聖地の免罪を與へようとした、けれどカルチナレらはこれを阻んで制限せしめやうとした。フランシスがこのことをフラテ・レオネに語つたのち、彼は今しばらくこの免罪狀については何も曰つてはならないと命じた、「何となればこの免罪のことはしばらく隠されざるべからず、主はやがて好き機を以てこれを外にいだし示したまふ。」

ワッディングがこの證言を一二七七年のこととしたのは恐らく正當であらう。これはすでに免罪狀の許可のち二代も經てゐるのである、されば團體のうちに、もしくはむしろ、そのベネデットの屬するより厳格な一派のうちには、まづ第一にできるだけ有力にポルチウクラ免罪狀の存在を證明し、つぎに何故にこれが以前に現はれなかつたかを説明しやうとする努力が爲されたのは明らかである。この理由でフラテ・ベネデットは彼の證言を公證人に承認させ、そしてヤコボ・コッポリの多くの目撃せる人のまへで、ウムブリアの地方牧師長のフラテ・アンジェロ（一二七〇—七八〇年）の前に與へられたのである。

ファブリアノのフラテ・フランチェスコが親しくポルチウクラの赦罪を得たのもまたこの時のこと、もしくはやゝ先のことである、そして彼はまたフラテ・レオネから、いかにしてフランシスがそれを法王から

乞ひ得たかを語るのを聞いたと曰つてゐる。フランチェスコがこゝに引用する著書を書いたのは彼の晩年であることはまづたく確かである、何となれば、彼は早くとも一三二〇年頃のである文書を引抄してゐる。一二五一年に生れて一三二二年に死んだフランチェスコは、彼の追想録を書くときは六十か七十近い年であつたであらう。彼がさきに曰はれた年にボルチウンクラに赴いたことは疑ひない。我々はまた、フランチェスコが老年になつてから、彼のなした順禮の目的が免罪であつたのだといふことを挿入したのであるといふ説明の可能は拒むことができない、始めから多くのフランシスカンたちは彼らのたましひの父なる聖フランシスの墓とボルチウンクラに順禮した、そしてこの關係から最大の重要さをもつてゐるのは、法王ニコラウス四世——彼みづからもフランシスカンである——が一二八四年五月十四日の書簡に、アッシジに流れ入る數知れぬ團體兄弟の群集について語りながら、けれど彼らの旅の理由としては決してボルチウンクラの免罪について曰ふところのないことである。この法王によれば、聖者の墓のあるサン・フランチェスコ寺、そしてボルチウンクラの禮拜堂との二つのみが順禮の目標であつて、免罪のためではなく、すべてはたゞ聖者の光榮のために」爲されたのである。

このことは、アンジュラ・ダ・フォリニョ（一二五八——一三〇九）が聖フランシスの第三團體に入つてまもなくアッシジに順禮して、けれどこの時にはボルチウンクラについては何も曰はず、たゞサン・フランチェスコの記念の寺院に二度詣つたことを語つてゐる事實によく適應する。そして彼女は聖フランシス派のなか

で厳格な遵法の人であつたとして知られてゐる。そして厳格なる派の偉大なる首であつたカザレのウベルチノは彼女の死ぬ數日まへに彼女を訪れ、そして彼の著「Arbor Vitae」の緒言のなかに最大の尊敬をもつて彼女のことを語つてゐる。アンジュラ尼のアッシジ訪問は恰かも免罪状を受くべき季節ではなかつたかも知れない、彼女は八月の一日あるひは二日にそこにゐなかつたのであらう。けれどなほ彼女が一こともボルチウンクラについて曰はないのはふしぎである。

すべてのことはボルチウンクラ免罪状がはじめて十三世紀の後の五分の一（ファブリアノのフランチェスコによれば後の三分の一であるが）に至つて人に知られはじめたことを指示する。もし近代の考へ方をこの時代の風習に適用することが許されうべきものならば、我々は免罪状の起源を、免罪状の認許の五十年目に置きたくなる（一二二二年——一二六二年）（そしてフランチェスコ・ダ・ファブリアノのアッシジ訪問は一二六八年であつた）赦免状が知られるとともにそれが各方面に反對者をもつたことは明らかである——それ故にアレツオのベネデットやライネル、コッポリ、ツアルファニらの公證の宣言が出た。厳格なフランシスカンの掟を固守してゐた偉大な導者ピエトロ・ジョヴァンニ・オリギー（一二四八——一二九八）さへも免罪状の問題に携はつた。ある小さいパンフレットに（不幸にも目附が缺けてゐるが）彼は第一に教理的基礎から、つぎに歴史的基礎からこの確實を主張せむことを努めた、不幸にしてその歴史的な部分は散逸してしまつた。この論争に於て幾多のカトリックの研究者がこの免罪状の起源が聖フランシスとともにあつたか否かを

疑ひ、ある者はつひにこれを否定したことは怪しむに足りない。その證明は今まで甚しく不十分であつたのである。この書の著者もかつて一たびはこのやうな意見であつて、この書の第一版にはさう書いたのである。その頃の私の考へではボルチウンクラの免罪狀は單に *De terra sancta* の、即ち十字軍從軍の免罪狀の制限あるものに過ぎないとした。さうして聖地は敵の手に落ち(聖ジャンダアクルは一二九一に陥つたこれが基督教徒の最後の守りであつた)てしまつたとき、法王がその頒布をフランシスカンに許した十字軍の免罪はたゞボルチウンクラに於いてのみ得られることになつたのである。免罪狀を得られる日として八月の二日が選ばれるといふのは當然であつた、この日は寺院聖潔の年々の記念日であつた。かやうな擇びかたはフランシスカン風であつた。八月の一日には「聖ペテロの鎖」の祭りが祝はれる。そしてアッシジの聖フランシスのこの聖使徒に對する尊敬はよく人に知られてゐた。そしてこの日に讀むミサのなかにはつぎのやうな節がある——「おゝ神よ、きみは幸ひある使徒ペテロをその繫縛より脱れて自由に恙なく行かしたまへり、我らねがふらくは、主よ、われらの罪の繫縛より我らを放ちたまへ。」

小さいボルチウンクラの禮拜堂、新しき聖地テルラサンクタに於いて、フランシスカンたちはかくて獲得せられてある權能の徳によつて、これらの日に於いて、かつて十字軍從軍者に屬してゐたのとおなじ絶對の免罪を領ち、そして悔いる心をもつ順禮者たちを罪と罰の谷から無罪の聖地へと導びいたのである。

私がこの本のこゝの章を書いてからすでに四年を経たあひだに、フランシスカンの歴史について最も價

値ある研究をしたミュンヘンのヘリベルト・ホルツアッフェル氏はこの問題についての考證のために新しい見地をひらいた。長老ホルツアッフェルは聖フランシスの生きてゐた時にはこの問題の免罪狀はあまり知られずまた用ゐられもしなかつたことを承認してゐる。彼はいふ、「我々に奇異を感じしむることは、すべて後代の諸書がたゞ免罪狀が聖フランシスの手に保管されてゐたことのみ曰ひながら、けれどそれが聖者の生時にもまた死後の初年にもあまり顧みられなかつたとは曰はないことである。されば尠くもその初めにあつて、免罪狀の公布を妨げるべき力が働いてゐたにちがひない、これらの原因を探るとき我々は臆測の國に追ひやられる。私はつぎの解釋をこの討究のために暗示させて戴きたい。

「法王は永いあひだの説得ののちはじめにこの免罪狀を許した。後年の諸書によつて知ることくカルヂナレらは明白にこの提案の敵であつた、近在の諸市(アッシジ、フォリニヨ、ベルジア、グッピオその他)の僧正らもさうであつた。これらの僧正たちはかやうな特別な恩惠の證據がつまらぬボルチウンクラの禮拜堂に與へられることを好まず、そしてこのことについてさまざまに聖フランシスに謂つた。それは彼らが疑ひなくクリアの意嚮を知つてゐるだけです／＼甚しかつた。聖フランシスがこのとき僧職に對する尊敬から沈黙してゐたとすれば、それはまつたく聖者の精神には一致することである。彼は決して戰闘的な性質ではなかつた。こゝでも他の場合と同じく、彼は忍從した。彼が心から悦んでそれを爲したか、それは我々は確言しない。それはあるひは他の彼が屈しなければならなかつた、そして變改することのできなかつた

場合と同じやうに彼を痛ましめたであらう。彼はこの失望を彼の依頼する伴侶にむかつて語りたかつたであらう、彼はよりよき未來の期望によつて己れを慰さめ、そして伴侶をば今はひたすらに忍耐つよき服従に勵まざうと思つたであらう。けれどこれは若干のフランスとともにこれについて知つてゐるフラテラまたは在俗の同様な人々が、免罪狀を公認されたものとして用ゐたらうといふ可能を除外するのではない、たと我々はそれが廣くひろまつてゐたと思つてはならないのである。これについて知つてゐるものゝ範圍は時に従つて廣まり、それととも免罪狀は屢ば用ゐられることゝなり、同時にまたその反對側の反抗をも増したであらう。そのときまだ生きてゐるフラテラたちは彼らの熟知してゐることについて犯すべからざる證據を残すことを義務として感じた。彼らはもはやクリアの惡感情を恐れる必要はなかつた。それはすでに團體と親密であり、また僧正たち、ことに直接に利害の關係するアッシジの僧正たちについても憚るところはなかつた、彼らはあるときはみなフランスカンであつたのである。」

この臆測はよく諸ろの傳記著者の沈黙を説明してゐる。その上もしも免罪狀がまつたく知れ渡つてゐた一三一八年に書かれた「完全の鏡」がすこしもそのことを曰はないほどならば、それより早くの傳記著者たちの沈黙はどうしてそれを書いたところに赦免狀が存在しなかつたといふ證明になり得やう？ 他の多くの場合と同じく、我々はこゝでもむかしの認められた證據にたよるほかにしかたがないのである。

四 集會と布教區劃

アッシジのフランスの創めた兄弟らの團結はその初めから贖罪者と使徒との集まりであつた。そしてフランスみづからはこの團體の首かしらであつた。團體の掟を書き、そして法王への從順を約束したのは彼であつた、そして彼は説教することを許され、彼によつて他の人々も同じ許可を受けたのである。最初の兄弟六人はフランスと同じ權能をもつてゐて新しい入會者を團體のなかに入れることができたのはたしかである。けれどもかく新入者はポルチウンクラに伴はれ、そこでフランスみづからの手から贖罪の着衣を受けるのであつた。兄弟らのなかに入れられることはむかしの僧侶の團體への *Compassio* (悔い改め) と同様の意義をもつことゝ考へられてあつた——それによつて人はこの浮世を奢りと榮えとともにするのである。この印しとして志望者はその有する所を貧しきものに與へた¹。

また最初フランスは彼の周圍につねにできるだけ多くの兄弟らを置くことを好んでゐた。されば第一の弟子たちを傳道の旅行に送り出したときに、彼は何時彼らが再び残らずポルチウンクラに集まるべきかといふ時 (*Statuto termino*) を定めた。のちにはつひに一定して、一年にかやうな時を二回さだめて、兄弟らがすべてポルチウンクラに集まることゝなつた——それはペンテコステとサン・ミカエロの祝ひ日 (九月

二十九日)であつた。

この二つの集會——もしくは修道院生活のやゝ古い時代の用語でカピトロといふ——のうちでペンテコステのカピトロは最も重大であつた。「そのとき兄弟らは悉く集りきたりて、いかにして彼ら掟を保つべきかを相ひ議れり。」そして彼らは饗食を乏しさとたのしさをもつてすこし、そのちにフランスは説教した。彼の Admonitiones (訓戒)はのちに詳言すべきであるが、これらのカピトロの集會に源を發してゐるやうに見える。それらは「山上の説教」の一節、あるひはかやうな章句「己の命を保たむとするものは必ずそを失はむ」、または「我らこゝに在るは仕へられむためならず、たゞ仕へむためなり」、また、「有てるものをみな棄てざるものはわが弟子たる能はず」といふやうなことを説明した。彼が最も屢はくりかへしまた最も好んで語つたのは彼の得意の主題の、祭壇の聖物を尊ぶこととそれよる起るところの司祭に對する尊敬とであつた。ある時は彼は兄弟らをして一人の牧師の騎つた馬の蹄に接吻せしめた。「しかして汝らの心のなかにはつねに平和を保て、他人に平和を齎さうとてきたる汝らは。」それ故もしもたれか弟子のうち誘惑に苦しむことがあれば直ちに師のもとに往いて、彼にすべてをうち明けて任せた、そして何人も慰さめを受けずして歸るものはなかつたのである。

最後にフランスは説教師を選ぶことを企てた、それをのちに彼は諸の布教區、(のちになつて Provincia と名づけられた)に派遣した。この選擇に當つて彼はたゞ推薦される人の能力を考へるのみで、そして彼

は在俗兄弟らをも牧師らと同じやうに派遣した。彼の溢れるやうな父らしい愛情をもつて、彼は彼らを悉く祝福し、そして彼らは二人づゝ伴ひあつて悦び勇んで世のなかへひろく旅に出た、「旅人や順禮のごとく」に彼らの勤行の文を読むときのために必要な本のほかには何も邪魔な荷物をもたないのであつた。

これらの集會のときにした聖フランスのつねに強く個性的な説教は屢ば詩歌の境ひに入つたことがあつた。こゝに彼の訓戒から引く一節は疑ひもなく寺院の洗足木曜日の讚美歌 *ubi charitas et amor, Deus*

ibi est (愛と情のあるところ、神はそこに在り)を思ひ出させるが、その一つの例である——

「愛のあるところ叡智あるところ恐れと無智はあらず。忍耐と謙たりとあるところには不安また怒りもなし。貧しきと樂しきとあるところ、そこには樂欲・貪婪なし。平安あり慎しみあるところ、そこにうれひあるひはわづらひはなし。主の恐れ戸口を守れば恐しき敵歩み入るあたはず。同情と賢かさあるところには浪費と心の頑なることあらず。」(Admonitio 27)

すべての基督教徒の模範としてフランスは特別な篤い愛をもつて祝福されたる處女、神の聖母マリアに對した。彼のまことのトロゾートル(巡歴詩人)風な心から彼は彼の「讚美」のうちでも最も美しものゝ一つを歌ひ、「處女マリアを飾りそしてまたすべて聖ときたましひらの飾りたるべき徳」を讚美した。

「榮えあれ、女王なる「叡智」よ、」彼はかく叫ぶ、「主はおんみを輔くるに聖と純なる妹「單純」をもてしたまふ。聖とき「貧しき」の聖女よ、主はきみをきみがたふとき妹「謙たり」もて助けたまふ。聖とき「愛」のき

みよ、主はきみをきみが聖とき妹「從順」もて輔けたまふ。おんみら上なく聖とき諸ろの徳よ、おんみらを
 いだし來させたまふ主はおんみらを助けたまふべし……聖とき叡智はサタナと彼の惡を悉く破りたまふ。
 純なる聖とき單純さはこの世の智慧と肉の智慧を破り、聖とき貧しさはこの世の憂いとありとある貪欲を
 破る。聖とき謙たりは誇りと浮世の人々としかして浮世のものなる諸事を破る。聖とき愛はありとある惡
 魔と肉體の誘惑またありとある肉の恐怖を破る。聖とき從順はありとある肉と體の欲望を破り、肉體をつ
 ねに靈に從はしめ同胞に從順ならしめ、人をしてこの世界のあらゆる人々に仕へ能はしめ、營に人のみな
 らず、ありとある畜類、獸をも順はしむ……」

かやうな諸徳の讚美は必らず人にジヨットーの「聖とき從順」「聖とき純潔」そして「聖とき貧賤」、アッシジの
 聖フランシスの墓を飾る壁畫を思ひ出させる、こゝから詩人は更に颯つてもつとも純よき處女の御座に翔
 りゆく――

「榮えあれ聖とき貴女よ、こよなく聖とき女王よ、神のみ母マリアとこしへに處女なるきみ、聖とき極み
 なる父によりて天より選ばれ、聖とき愛すべき聖子と慰さむるもの、聖靈をもて潔められ、恩寵と諸善の
 源たりし、源たるきみよ。榮えあれおん彼の宮なるもの、榮えあれ彼の塔なるもの、榮えあれ彼の家な
 るもの、榮えあれ彼の衣なるもの、榮えあれ彼の婢女なるものよ、榮えあれ彼の母よ、榮えあれ、おんみ
 ら聖とき諸ろの徳よ、聖靈のめぐみと光によりて信ずるもの、心に流れ入り、信ぜざるものをして神に從

ふものとならしめよ。」

基督教の理想として理解せられたるマリアの讚美のかゝる歌を畢へたのちに、フランシスはかう叫んだ
 であらうとも思はれる。

「我ら小さき兄弟らは、我らは神の歌ひ人として人々の心を天へとみちびき、そをたましひの悦びもてみ
 たす、しからざれば我らそも何物ならむや。」よき人々を天國に歌ひみちびき、世の人の戸口に立つて主に
 仕ふることの美しさと歡喜を歌ふ――これはフランシスが自らアッシジにあつて試みたことである。そして
 彼は同様な巡歴詩人の仕方をして他の兄弟らにも教へた。「親しき兄弟よ、汝は知つてゐるか、」彼はあるときフ
 ラテ・エジディオに謂つた、「聖とき悔いと聖とき謙たりと聖とき愛と聖とき歡喜はたましひをして善良に、
 そして幸福ならしめる。」アッシジの聖フランシスの頃にはこれを知らないものが多くあつた、それ故神の歌
 ひ人たち(Jocundiores Dei)は世界に出て、このことを人々の胸に歌ひ込ませようとして出でたつた。

最初からこのカピトロ集會はかやうに互に修養教育する實際的な集會であつた。團體は他に何の組織も
 もつてゐなかつた――そして他に何を組織すべきであらうか？「彼らは旅するとき金囊もまた行包も持た
 ず、腰にはパンも金も佩びず、足に履を穿たず……彼らは會堂また修道院を有せず、畑地、葡萄園、家畜
 また家を有せず、土地なく彼らの頭を枕すべき處さへ有せず。彼らは毛皮もまた綿布も用ゐず、たゞ粗き
 羊毛織りの僧衣と頭巾のみにして、帽子も肩衣も外套も、その他の衣服も用ゐず。人彼らを食に招けば、

彼らは己が前に置かれたるものを食ひまた飲む。何ものか彼らに憐れみ施さるゝことあれば、彼らはそれを翌日まで蓄はふることをせず……彼らの言説の力のみならず、彼らの聖とき生活と完全なる生活方法によりて彼らはあらゆる階級よりあまたの人々を引きよつてこの世を軽んぜしめ、家を去り家族と大いなる財産とを捨て、^{フラトレス・レス}小なる兄弟の服なる簡単なる上衣に腰に結ぶ繩とを受けたり。」

かやうにして生活する人々にとつてあまたの規則や掟は必要でなかつた。かの雲雀が空に高く上り、聲たかく神の讚へをうたひその美しさに人は歩みをとめて空を仰がずにはゐられないときに、雲雀は泉より吸ふ一口の水と野に拾ふ食物のほかに何を必要としやう？「さればフラテ・フランチェスコは他鳥のうちにもことに俗語にて頭巾ある雲雀と名づけたるをば愛しぬ。しかして彼は語りぬ。「わが妹なる雲雀は我らと同じ頭巾を有し、またよく謙れる鳥なり、それは好んで道の側らを行き己のがために穀物を拾へばなり……その羽毛の色は土と同じくして、我らに美しき彩りある衣を着ずたゞ賤しき一色なるを用ゐよと教ふる模範なり。されどその飛ぶとき彼らはわれらの團體のよき足弟らのごとくに熱心に神の讚歌をうたひその生命は天にあり、その快樂はつねに神の榮えにあり。」

この幸福な、拘束のない雲雀の生活はいつまでもさうあることはできなかつた。益々兄弟らは加はつたそして若き男子のみならず、夫なき、また夫ある女、つひに妻子ある男さへ彼らのもとに來た。若い未婚の女を助力するのは容易いことであつた、彼らは修道院に入つて命ぜられた。そして兄弟らのうち一

人は一時彼らを輔導する仕事に携はつた。けれど年嵩の妻子ある男は來て曰つた、「我々には去ることのできぬ妻があります。私たちがいかにして生活したならばよいのか教へて下さい。」そして彼についてもまた心を用ゐてやらなければならぬ——けれどいかなる方法でしやう？

フランスの覺醒させた運動は彼の頭上を飛び超えむとする氣色を示した。彼は彼の兄弟らが尼の監督をすることを好まなかつた。「惡魔はやつてきて私たちが神のために捨てた妻の代りに姉妹たちを私たちの頸にかじりつかせるやうになるだらう！」と彼は曰ひましたであらう。そしてカンナラでは彼は自ら彼の聽衆の熱心さを止めなければならなかつた。——そのとき居あはすものはみな彼のあとを趁はうとした、未婚既婚の男女、一市の全人口は彼に従はうとした。「そのやうに急ぐな、」彼は忠告した、「私は汝らの救はれのために訓へることのできるものをよく考へて見やう。」

團體の發展はそれとともに大いなる困難を齎らした。フランスは一方には彼の軍勢の數を見て悦ぶことができらばかりであつた。けれど一方には彼はそれを宿す處がなかつた。彼の網はかの聖使徒らのそのやうに、あまりに多い魚を獲て今や裂けやうとしてゐた。

團體の掟も、彼がそのとき「多からぬ單純な言葉で」書いたのは彷徨する福音の宣傳者と歌ひ人には相應したであらう、けれど尼や況して妻ある男には適用すべきものでなかつた。一群れの雲雀をこそフランスは悦んで導かうと思つてゐた——そして野鳥はいつも眞先に彼に跟いてきた。けれど市民の階級にあ

る青年、修道院生活にあこがれる處女たち、温順しい、有益な被造物たち、またタボールやカルメルの山の崖に鳴く神祕的な鳩たちの身の上——いかにして單純に愚かなる simplex et pichota なる彼はこれらに生活の掟または規則を與へることができやう。

われ知らずフランスは助力の手を求めた。それは彼の思つたよりも近いところにあつた——それは差出されてゐた。白く、たしなみよく、力つよく、そして僧正の印なる瑪瑙入りの指環をもつた手は彼を助けるためにインノケント三世の甥なる、オスチャとズレトリの僧正、カルチナレウゴリノによつて伸ばされてゐた。

1. Tres socii XI. n. 41, XIII, n. 56, XIV, 57.

2. De virtutibus quibus decorata fuit sancta Virgo et debet esse sancta anima. Boehmer, Analectica S. 113, S. 70.

3. Dottrina di frate Egidio, Cap. I.

4. 「完全の鏡」一三三章

五 カルチナレウゴリノ

アナニイの伯爵フーゴーあるひはウゴリノは、フランスがはじめて彼を知つたときには七十歳に近い

そして畏敬の念を起さしめる外貌の人であつた。彼は當時の最高の教養を経たので、ボロニヤとパリで學び、そして正しい敬虔をもつて秀でてゐた。彼の重なる二つの興味は教會の獨立とそして修道院生活の改進とであつた。一一九九年には彼は身命の危険を冒して、僭王マルクワルトに對して教會を護つた。そして彼は親密な、そして渝らぬ關係をもつてカマルドリテ派、またクリュニーの修道僧たち、そして聖フィオレの協會（そのために彼は二つの新しい僧院を建てた）そしてのちにはフランス派とドメニコ派に親しんでゐた。彼の故郷アナニイに彼は一つの救貧院とそれに附屬した寺院を建てた、そしてそれを一二一六年十月にトスカナのアルトバシオの病院の兄弟らに譲り與へた。一一九八年には彼は法王の禮拜堂を司りそれとともにカルチナレディアコノとして聖エウスタキオの教會を稱號としてゐた。一二〇六年に彼はオスチャとズレトリの僧正職に任ぜられた、これは教會のなかで法王につぐ高い位置なのであつた。ウゴリノその人に未來の法王を見ることは、フランスも見たといはれてゐるが、ことに豫言の靈をもつ人なくともできたであらう。法王グレゴリオ九世としても、ウゴリノは多くの宗教團體の忠實な友として恩人としてつゞいてゐた。他のことのなかにも、彼は己が資を出してギテルボに一つのフランス派の修道院を建て、ローマには貧しき聖キアラの尼たちのためにも修道院（サン・コスミアトオ）を建てた。ロンバルディアに於いて、またトスカナに於いても、數多の修道院はその存在を彼に負うてゐるのであつた。この人の任務となつたことは——彼の傳記に書いてあるごとく——「小さき兄弟らの危ふく、形定まらざる團體を視、

これに形を賦與する」ことであつた。

前にも曰つたやうにフランスとウゴリノの相知つたはじめは一二一六年の夏、法王の宮廷がベルジアに置かれた時からであつた。その時はそれ以上に親密な關係は結ばれなかつた。

翌年一二一七年五月十四日、フランスは例のペンテコステの集まりをポルチュンクラに開いた。彼は沈痛な不安をもつて現はれた。こゝに來る途で彼は一人の友に彼の心をうちあけた。「今私はかうして集會に行く、そして兄弟らは常のごとく私に説教せよと乞うであらう、私は従つてそれをする、けれどももし兄弟らが悉く起つて私が曰はうとしはじめるときに、私に向つて叫んだならば何としやうか、『私たちはもう汝が團體の首たるものになつてゐることを希望のぞまない、何となれば汝は辯舌がない、汝はそして單純であり小さい、そして私たちは汝のやうなつまらぬ見すばらしい人を上として戴くことを恥づる。それだから汝はこれよりは我々の最上の長であると曰つてはならない、』さう曰つて彼らは私を大いなる侮蔑をもつて逐ひ出すであらう！」

今は兄弟らのなかに入り來つたあまたの賢き、學識ある人々の前に、恐れながらフランスは彼の平生の單純な方法で説教しはじめた。そして一つの不思議はこゝに起つた——何人も彼にむかつて叫ぶものはなかつた、却つて兄弟らはみな大いに徳を高められ平和をもつて滿されてあつた！ そのときフランスは勇氣を得て、そして彼の大いなる計畫をそこに持ち出した、即ち今兄弟らの數がかく多いとき、彼ら

は傳道に出で立つべきものである、たゞイタリアのみならず、山のあなたなる國らへ、ドイツへ、ウングリアへ、フランスへ、イスパニヤへ、そして聖地へさへも！ この動議は歡びをもつて迎へられた、そして彼らはイタリアのみならず他の國をも一つにして傳道區劃 *Provincia* に分割することをはじめた。聖地はそれ自身に一つのプロギンスであつた、そしてそこにはフランスが大いなる信賴を置いた一個の人、エリア・ボンパロネが指定された。彼自身にはフランスに行くことを擇んだ、「何となれば、かしこは他のありとある正教の國よりも、人々主の聖體を敬ふこと篤ければなり。」別れるとき彼は平生の訓戒の説教をした、そのなかに彼は兄弟らに多くの沈黙と内心の祈りをしつゝ行くことを勧めた。「あなたも汝隱者の棲家若くは僧房のうちにあるがごとくせよ。我らはいづこに行くも住まるも我らはつねに室やうを有せり。兄弟なる肉體は我らが室なり、そのなかにたましひはすはりて隱者のごとく、神を想ひ彼に祈るなり。」「小さき花」のなかにフランスのこのフランスへの旅は多くの附け加へをもつて記されてゐる。そのうちまつた確かなことは、フランスが一二一七年の五月の後半にフィレンゼへきて、そこでカルヂナレウゴリノを求めたことである。

トマス・デ・チュラノがこのときフランスとウゴリノはまだそれほど親密でなかつたといふのはたしかに正しいのである。二人は互ひに他のことを敬虔と信仰について讃へられるのを聞き、そして進んで密接な友情に入ることはあらかじめ定まつてゐた。ウゴリノは法王ホノリウス三世によつて法王代表者としてト

スカナに二つの任務をもつて派遣された、——共和市たちのあひだにつねに絶えぬ争ひを静めて平和を結ばしむること、そして十字軍出征を説教することであつた。フランシスはフィレンゼ市に着いて、カルチナレがこゝに在ることを知るや否や、彼は彼を求めた——たゞ彼がいつも行つてゐる慣はしで在俗の人々よりは僧職とゞもに宿るつもりであつた。カルチナレは彼を大いなる禮儀と款待とで迎へた、そして話しが始まるとフランシスは彼の心の重荷を軽くした、恰かもかつてアッシジの僧正ギドーのしたやうに。その果てはフランシスは敬はれた僧官の前に身をたふして、そして彼に彼と兄弟らのことをその手にとるやうに請うた。このことをウゴリノは悦んで約束した、そしてこれよりフランシスは彼をたましひに於ての父として視、そして子のやうな尊敬と服従とを示したのであつた。

この新しい關係の第一の効果は、フランシスがフランスへの旅を思ひ止まつたことであつた。ウゴリノは曰つた。「兄弟フランシスよ、私は汝がアルプを越えて彼方へ行くことを好まない。何となれば、ローマなるクリアには汝について好意を抱いてゐない僧官たちも多くゐる、けれどもし汝が遠方に行かずにおれば、私と他に汝の味方なるカルチナレたちはよく汝を助け、保護することができらうであらう。」フランシスはもし彼自らがさうして安樂に止まつてゐたならば兄弟たちを遠い危険の多い國々の傳道に送り出すことはできないと曰つて抗辯したけれど効がなかつた。カルチナレは動かすべくもなかつた、そしてフランシスは自らフランスに赴くことを止めてその代りにそこへは「歌の君王」フラテ・パチフィコを他の多くの兄弟

とともに遣した。

ほかのどのうちでもまづウゴリノの心を惹いて、そして彼の組織的な精神を働かしめたのは、小さき兄弟らの説教が女の社會に起した運動であつた。フランシスは親しくキアラと彼女の姉妹たちのためにサン・ダミアノの修道院を興へて力をつくした、そして彼は靈の上にもまた世間的な意味に於ても、彼の生きてゐるあひだ彼らの後見をすることを約束した。けれどこの約束は今來り集まつて兄弟らに救はれのみちの導きを求める人たちがすべてを包含するまで擴張されることはできなかつた。

フランシスがキアラと姉妹たちに與へた *Forma vivendi* 即ち生活の掟はたゞ簡單に「福音に従ひて生活せよ」といふだけであつた、即ち貧しさと勞働と祈りとに生きるのであつた。彼らの所有をすべて貧しきものに施したのちサン・ダミアノなる姉妹たちは彼らみづから、若しくは他の仲介を経たときにも決してある財産を享有することはできなかつた、たゞ一つの例外は修道院そのもので、これにはその隔離に必要なだけの地所を周圍に附屬させてあつた。けれどこの土地は姉妹らの必要のためにする菜園としてのほかに耕作を禁ぜられてゐるのであつた。この貧賤の特權はキアラがフランシスの仲介によつて一二一五年にインノケント三世から承認されたものであつた。

これがキアラと姉妹のために存在して規則のすべてであつた、そしてこの掟は、我々の殊に注意しなければならぬことは、これはたゞサン・ダミアノのみ適用されたのであつた、それはたゞフランシスがこ

の種類の修道院がこのほかに多く成立しやうといふことの可能に思ひもつかなかつたからなのであつた。そして今あらゆる市ごとに來り集まつて宗教的な生活を願ふ若い女たちのために途をひらくことの問題になつたとき、ウゴリノはまつたくそれについて自由にすることができたのである。

一二一七年より一二一九年のあひだに、それ故ウゴリノはのちに「クラリッサ」と呼ばれる一つの團體を設けることに忙しかつた、それはけれどその當時の文書には極めて雑多な名稱で呼ばれてゐたのであつた。クラリッサの團の發展を理解するために最も重要な價值のあるのは、ホノリウス三世からウゴリノに送つた一二一八年八月二十七日の書翰である。それはカルチナレが法王に宛て、數多の處女が他の女とよもに浮世の華美と虚榮から脱れて、何も所有することなくたゞかやうな家とそれに附屬した禮拜堂もしくは寺院を有するところに棲まうと願つてゐることを告げた手紙への返書である。この目的のためにいくつかの土地がウゴリノに捧げられたのであつた、そして彼は今十分な權威をもつてこれらの土地がローマの教會の名に於て受納されることを求め、そしてかやうにしてその土地に建てられた修道院は地方の僧正の法治の外に在つて直接にローマに從屬することを欲した。ホノリウスは返書のなかにこの權威を許した、即ち彼らの修道院については決して他の寺院もしくは政治上の權威は容喙することができず、そしてこの除外の地位は姉妹たちが貧しさの誓ひを守つて棲んでゐるあひだいつまでも有効なることを承認した。ウゴリノがこの手書を受けたより前にもベルジアの僧正ジ・ヅンニは一二一八年七月三十一日に上記の

やうな性質の修道院を尼たちのためにベルジアのモンテ・ルチュに建てることを許した。修道院に對する彼の法治權を棄てた報償として毎年八月十五日に一斤の蠟を納めることを定めた。同じ頃にあつてウゴリノはまつたく同じ性質の修道院を三つ——一つはシエナにボルタ・カモリアの外に、一つはルッカ(サンタ・マリア・ガッタヨラ)に、一つはフィレンゼに近いモンテ・チユリに建てる計畫をはじめた。

はじめこれらの修道院に於ての宗教的生活の唯一の要件は無所有であつた。これらの女たちを浮世より修道院に引き入れたのはフランス派の説教とフランス派の生活とであつたからである。

これらの新しい修道院のために團體の適宜な掟を建てるのが問題となつたとき、ウゴリノのまつ爲すべきことに見えたのは一二一五年のラテラノ會議とその時の「新しき宗教團體の掟に對する禁令」を顧慮することであつた。この大なる教會内の集會決議は、一二〇〇年ごろから數多く成立した新しい團體とその惹き起す混亂を考へたうへで、これより先は決して新しい團體の掟を承認しないことを議決し、そして新しい修道院もしくは宗教團體を設けやうとするものは古くよりの、そして認定された掟のうちから一つを選び取るやうに教示されるべきことを定めた。

この規定の第一に適用されたのは聖ドメニコであつた。サクソニアのヨルダヌスに據れば、ドメニコ派たちのみならず小さき兄弟らもつひにラテラノ會議によつて承認された、けれど二つのいづれも彼らの掟について法王の承認を得なかつたといふ。ドメニコは再び家に歸つて、兄弟らと既存の掟のうちいづれ

を彼らが擇ぶべきかをよく商議せよとまで命ぜられた。彼らはブレモンストラテンシアの掟を選んだ、そしてホノリウスはこの選擇を認可しドメニコ派團體を「聖アウグスチノの掟に従ひてつくれる正法の團體」として定めた。

これと全く同じ様にしてウゴリノは聖キアラの尼たちの場合にも行動しなければならなかつた。ドメニコが彼と彼の伴侶のためにブレモンストラテンシアの掟を擇んだやうに、カルヂナレウゴリノは今フランス派の尼たちのために西方教會の諸團體の掟のうちで最も古き、そして最も尊重せられたるもの——即ち聖ベネディクトゥスの掟を取つた。フランスが斷乎として、必然の基礎として福音による貧しさは捨てゝはならないと曰つたことを、ウゴリノは正確に遵奉した、一たびも姉妹らは彼の修道院の建つてゐる土地を所有することを許されなかつた、それは教會の名に於てウゴリノの有であつた。これはフランスがポルチウンクラの所有を欲しなかつたのみならず、そしていつまでもその土地をベネディクト派の所有と考へて、毎年の借地料を納めたのと同様な趣意であつた。

クラリッサらの生活の規則の大體は聖ベネディクトゥスの掟によつて與へられた。インノケント四世も後になつて宣言したとほり、彼らは文字通りにこの掟に繋がれてゐるのではなかつた。彼らはたゞ一般的に従順と貧しさと純潔とに基いた生活をする務めであつた。これに修道院の嚴しい隔離の限定が添へられた。修道院のなかにはすべて他人の入ることを許されず、そして病者の看護をすることも、ジャック・ドゥ・ボト

リーに據れば姉妹たちの實行してゐたことであるが、これもいかなる場合にも止められなければならなかつた。兄弟らと尼たちと逢ふことを防ぐために嚴重な隔離の制度を欲したのはフランスであつたのは明らかである、けれどウゴリノは彼がフランスと、もにこの限定を書き下したときには憐れみのために泣いたといはれてゐる。フランスの死後に彼は掟のうちの最も嚴酷な若干を和らげたのであつた。

一二一九年以後はクラリッサたちは聖ベネディクトゥスの掟のほかに謂ゆる「サン・ダミアノの法規」を加へてそれに従つて生活した。この最後のに於て、ある程度の信用を置いて見ることのできるのは、フランスが當時キアラに與へ、そして今比較的第二の位置に置かれた *forma vivendi* は、決してそれで無力なものでなかつたことである。これらの法規の中心の核は想像するに、こゝにもまた貧しさの特權のことであつて、それをキアラは當時の習慣に従つて各の、新しい法王の即位ごとに保證を受けたのであつた。

フランスの生きてゐたあひだはサン・ダミアノの姉妹らにも、あるひは一般のクラリッサらの團體にも決して新しい完全な掟は與へられなかつた。はじめ、フランスの死後に法王グレゴリオ九世はそれを緩和することをはじめやうとし、何よりもさきに貧しさの掟について試みたのであつた。「有利ならざる時代なるを以て」修道院は全然喜捨によつて立つてゆく代りに、たしかな収入をもつことのできる土地を所有する方が適當である——彼のこの意見を彼はキアラの深慮のまへに提出した、けれど最後に拒絶された。一二二八年の九月十七日、キアラはグレゴリオより——彼女がその前の法王にもしたやうに——貧しさの

特権を受けた。ベルジアのクラリッサらは一二二九年六月十六日にその特権を再び新たに得、そしてキアラの實妹アニエザはフィレンゼの傍らなるモンティチェリの修道院のために同じものを授けられた。

他の修道院はこれらよりも強固でなかつた。その多くは全たく同じ年にグレゴリオに許された所有権を獲得した、そして常に收納権のみならず、それを所有し相續する権利をも持つてゐた。

この缺點はキアラの心を憂ひと悲しみをもつて満たした。彼女が生きてゐるあひだは、サンダミアノはいつまでも「最も高き貧しさ」の守れる壘であらう、けれど彼女がなきのちにはいかになりゆくであらう！ それ故に彼女が聖ベネディクトゥスのに換へて、その貧しさの特権の中和をすて、全たく新しい、眞のフランシス風な團體の掟をもつてしやうとする熱心な努力は起つたのである。彼女が自からそれを書いたこと、そしてそれは彼女の死に先たつこと二日にインノケント四世によつて承認されたものであることは疑はれない。

この掟は能ふかぎりフランシスの掟を模範としてゐる。そのやうに、これは十二の章に分たれてその各のは一二一九年のウゴリノとフランシスの掟にあまり差違はない。けれどキアラの掟の基を据ゑた第一の點は貧しさの務めである。そして彼女がこの綱目に筆を下すとき、彼女は非個人的な爲法者ではなくなつて、彼女の胸の底から語りはじめ――

「天にまします父わが心を恩寵もて明らかにしたまひ、われを導きて、そのとき恰かも悔い改めよりもなきときなるいと聖なる父フランシスの模範によりて贖罪のみちに入れたまひしを、われとわが姉妹らは彼に心より従順なるべきことを誓ひぬ。」

そして彼女が思ひをこれらの今はいと遙かな時のことに顧みて、彼女がはじめて浮世に別れたときを思へば、おもひでは互ひにあとを逐うて彼女の心に迫つた。彼女は愛する師、導師の口より出で、その最愛の情人、氣高い貴女「貧しさ」の榮えのために語られた多くのことを思ひ出し、そしてそれを書き下した。そして強き手をもつて彼女はかゝる章句を主張し、そのなかに理想の要求はあらゆる請願を超えた厳しさに於いてかたく置かれてゐる――

「姉妹らは家も修道院もまた何ものをも所有すべからず、たゞ旅人のごとく順禮のごとくこの世をさまよひ、貧しさと謙たりに於いて主に仕ふべきなり。」

これらの言葉の下に、キアラは瀕死のまなことを瞑らんとせるとき、インノケントは犯すべからざる口

1. 「完全の鏡」六四

2. 「完全の鏡」六五

3. 同じく、六五

六 異邦傳道

フランススがウゴリノともに團體の内部の事務に忙しかつたときに、一二二七年のカピトロから派遣された傳道の兄弟らは各の、方向に赴いてみた。その孰れも特別な成功はしなかつた。フランスに赴いたものは彼らはアルビジョア派かと問はれたときに、問ひの意味が解らないために然りと答へた、そしてアルビジョア派は異端であるからそのやうに取り扱はれた。ドイツの傳道も決してそれより善いことはなかつた。それはジ・ヴァンニ・ベンナを先導とした六十人の兄弟の一隊であつた。これらもまたその國の言語を知らなかつた、たゞ彼らは然りと云ふ言葉だけ覺えた。そして彼らは人に問はれるたびごとにこの言葉を用ゐて、そして食物や飲料や宿りを得たので、彼らはどこでもこの呪文を使つてみた、けれど、彼らは異端教徒かと問はれたときにもこの答へを用ゐたので、形勢は悪くなつた、彼らは牢獄に入れられ、禁錮され、また他の方法で虐待された。ウンガリアでも彼らの兄弟たちをよい運命は待つてゐなかつた。農民は彼らに犬を啖け、そして豚飼ひは彼らを長い杖をもつて逐つた。「何故彼らは我々をかやうに苦めるのだらう？」兄弟らはお互ひに問うた、けれど解しがたかつた。そして彼らの一人は、ウンガリア人は彼らの上衣を取りたいと思ふのだらうと想像した。そして彼らは彼らを苦しめる人々に上衣を與へた、けれどその甲斐は

なかつた。つぎに、彼らは福音書の言葉に従つて、內衣を與へた。けれどこれもウンガリア人を満足させなかつた。「神の名に於て私たちはこの股引をも與へよう！」忍耐つよい兄弟らは謂つた、そして彼らは今裸かで旅をした。兄弟らの一人は、ジョルダノ・ジャノの物語るには、七度まで股引を脱いでやらなければならなかつた。つひに彼らは一計を案じて彼らの股引に牛糞を塗つた、そして農夫たちはそれを剥がうと思はなかつた。

すべて彼れらのヨブの苦しみはフランススの心を憂ひと不安をもつてみたした。下に記すやうな夢を見たといふのはたしかにこの時のことであらう。小さな黒い牝鶏とそのまはりにつどふ小さな雛の一群は走りまはつて嘯つてみた——雛鳥の数はあまりに多くそして哀れな母鶏はそれを悉く羽の下に覆ふことはできなかつた。「その牝鶏は私だ、」彼はめざまめとき獨り曰つた、「私は小さくそして黒い、そして明らかに私は私の子どもを護ることができないのだ。」そして彼にはますますはつきりと心のうちに、彼が彼の團體の保護を教會に依らなければならぬことが明らかになつた。これはウゴリノをして容易く彼を説得してローマに赴いて法王に謁見を求めるやうにさせた。これはたしかに一二二七年——一二二八年のあひだの冬に起つたことである、我々はすでに一二二七年十二月五日から翌年四月七日までのあひだウゴリノがローマにゐたことを知つてゐる。

この折にカルチナレはフランススが新しい法王とクリア全部にむかつて不利な印象を與へることを懼れ

てみたやうに見える。それ故彼はフランスに説いて豫め一場の演説をする準備をさせた、けれど彼がそれを曰はうとして始めたときに、彼はその言葉を一つ残らず忘れてしまつてみた。これは彼にはしばしばあつたことで、かやうなときには彼は聴衆にむかつて、その旨を告げて、そして彼はそのあとでまた準備してきた辯舌を述べるよりは一層立派に話すことも屢ばであつた。彼は自ら何も謂ふことができないことを知つたときには、人々に彼の祝福を與へて、そして彼らを往かしめた。

彼が法王のまへに立つたときにもそのやうにして彼は忘れた。恐るゝことなく、フランスはたゞちに跪つて祝福を乞うた。それから彼は語り、そしてはげしい狂喜の状態に陥つてつひに彼は幽のまへなるダビデのやうに兩足を舉げて拍子をとつて躍りはじめた。これを可笑しく思ふどころではなく、法王とカルチナレたちはこの驚くべき人について深い印象を受けた、そして最後にフランスが、カルチナレ・ウゴリノを團體の特別な保護者とすべきことを乞うたときに、この請願は直ちに許された。

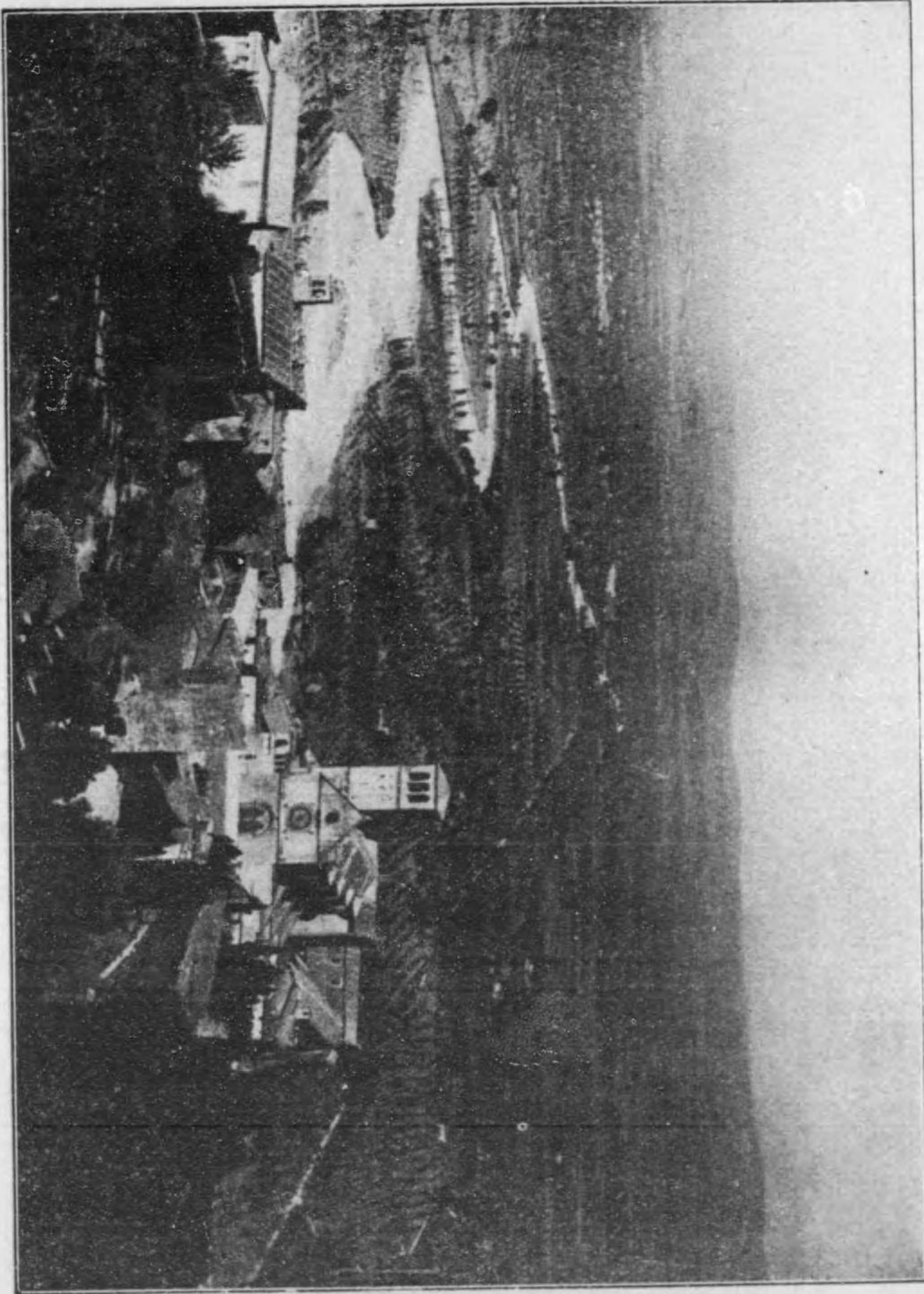
彼はローマに滞在したあひだに聖ドメニコと交りをつ結んだ。ウゴリノは二人を引き合はせたのである。大なる團體を建てたイスパニヤ人は矮小な跣足のアツシジより來れる神の貧しき人に對して最大の、そして最深の崇敬を抱いた。「私たちは團體を一つにしやうではないか、」彼は曰つた、けれどフランスは應じなかつた。そしてドメニコはフランスが腰に結んでゐる繩をでも、敬虔なる記念として與へられることを乞うた。まもなく二人の建設者はボルチウンクラで會ふことになつた、そしてドメニコの死に先つこと一年

に彼らは再びローマに出逢つた。この最後の機會に、一二二〇——一二二一年の冬に、ウゴリノは僧職の改革を胸に懷いて、フランスとドメニコに向つて、新しい二つの團體の人々をもつて高級の僧職を満すことを勧めた。ドメニコもフランスもかやうな事情に立ち入ることを拒んだ。「私の兄弟たちは小さきものである、彼らを大なるものたらしむる莫れ、」後者の答へはかうであつた。ドメニコが一二二〇年にポロニヤで開いたペンテコステの集會で彼の團體へ所有權の無力を入れたのはフランスの感化の上にあつた（彼は一二一八年に團體に附屬する財産の承認を法王に求めたばかりであつた）そして彼は瀕死の床に於て彼の兄弟らの福音的な貧しさを改めようとするもの悉くにむかつての呪詛を述べた。

一二一八年に第一回のペンテコステの集會は開かれた、それにウゴリノは團體の保護者として出席した。兄弟らは嚴そかな行列で彼を迎へた、そしてウゴリノは馬を下つて、美々しく飾つた衣服を脱ぎ捨て、跣足になつて、フランス派の僧衣を着てボルチウンクラまで歩んだ。こゝで彼は小さい禮拜堂でミサを歌ひ、そしてフランスはディアコヌス（輔祭）として勤めて、聖書を讀誦した。あるひはこの集會のときであらう、ウゴリノは後から兄弟らと力を協せて若干の貧民の足を洗つた。茲で足を洗つてやることは儀式以上のものであつた、そしてカルチナレはある一人の氣むづかしい乞食の足から泥を洗ひ落すことができなかつたときに、乞食は懇ろな兄弟が教會の偉大な君であるとは心つかずに怒つて曰つた、「止める、だれかもつと氣の利いた奴を呼んで來い！」

すでに謂つたやうにドメニコは再びフランスに會ふ機會を捕へた、彼はカルチナレの扈從のなかにゐた。彼がこの集會で見たことは深く心のうちに刻まれたに違ひない。

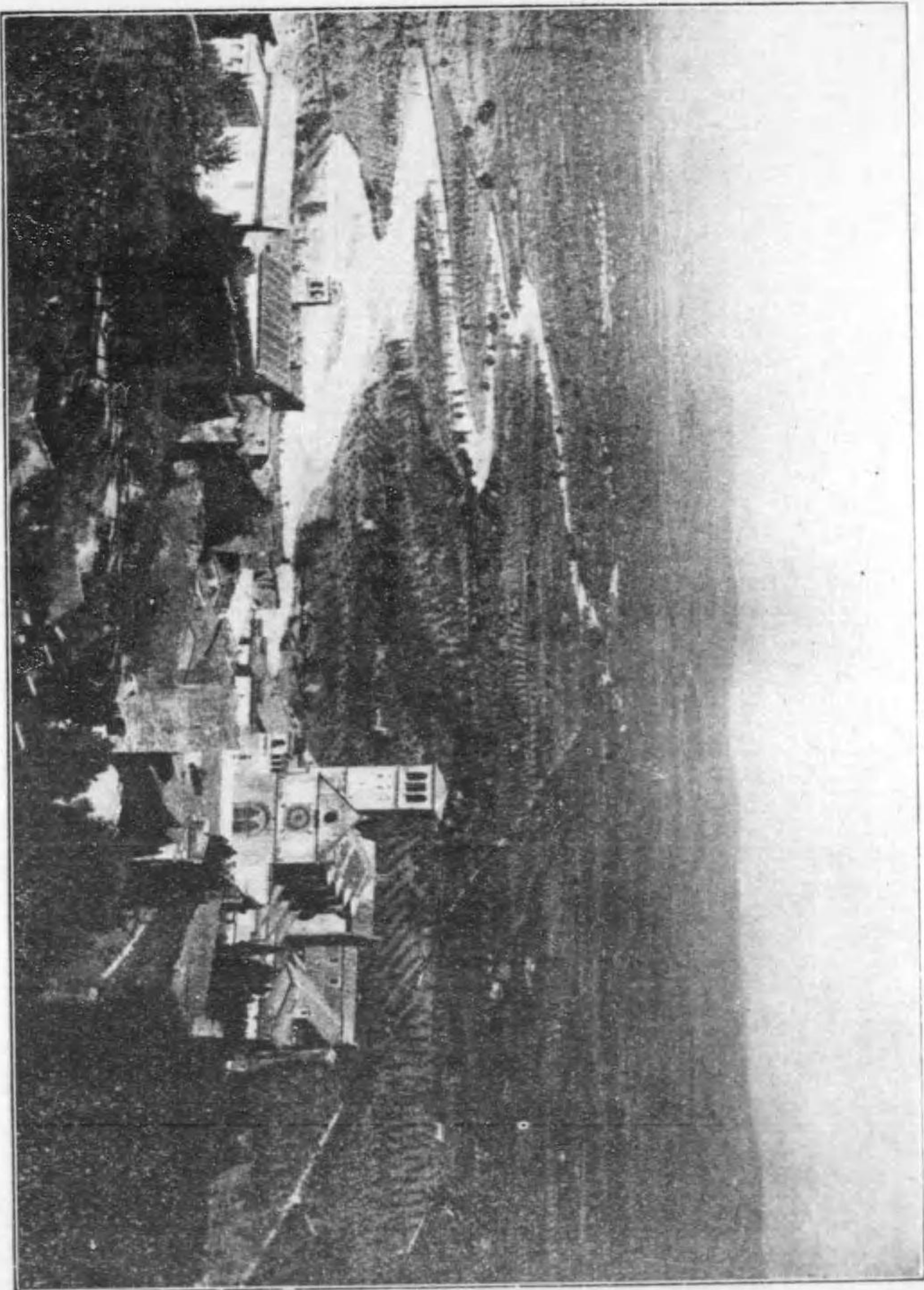
「何となればかくあまたなる人々のうちに一人として雑談をなした鄙しきことを口にするものなく、到るところ若干の兄弟が集まれる一群あれば、そは祈りをなすかあるひは聖文をよみ、あるひは己が罪もしくはその恩人らの作せる罪のために泣けるなりき……しかして彼らの臥床は裸はなる大地にして、されどあるひは少許の菓を用うるもあり、枕は石または一片の木なりき……しかして聖フランスは兄弟らにいへるやう、「聖とき従順の名に於て我はこゝに集まれる汝らすべてに乞ふなり、汝らの何人も、汝らの何を食すべきか、また何を飲むべきか、あるひは汝らの肉體の要するものについて心を煩はす勿れ、たゞ神に祈り神を讃ふことをのみ思ひ、汝の肉體のうれひを神にまかせよ、彼は汝らのために慮かりたまへばなり。」しかれども聖ドメニコはこのときたえず見わたるが、聖フランスの語れる命令に駭き、かつ思ひぬ、かくのごとく數多の人の集まれるところにて、何人も己が肉體に必要なものについて思ふ勿れと曰ひしは甚だ愚かならずや、と。……されど主イエスキリストは彼が殊なる愛もて貧しきものを愛せることを示したまはむと欲し、ベルジア、フォリニヨ、スペルロ、アッシジまた近在の他の町々の人々の心に入りて、聖とき集會に多くの食物と飲料を持ちきたらしめたまへり。見よ、直ちに人々はこれらの町々より驢馬、騾馬、あるひは馬にパン、果物その他の好き食物を載せて牽きゝたりぬ。そのほか卓布、壺、皿、椀等の



近びよお院寺ジツツア

すでに謂つたやうにドメニコは再びフランスに會ふ機會を捕へた、彼はカルチナレの扈從のなかに
みた。彼がこの集會で見たことは深く心のうちに刻まれたに違ひない。

「何となればかくあまたなる人々のうちに一人として雑談をなした鄙しきことを口にするものなく、到
るところ若干の兄弟ら集まれる一群あれば、そは祈りをなすかあるひは聖文をよみ、あるひは己が罪もし
くはその恩人らの作せる罪のために泣けるなりき……しかして彼らの臥床は裸はなる大地にして、されど
あるひは少許の藁を用うるもあり、枕は石または一片の木なりき……しかして聖フランスは兄弟らにい
へるやう、「聖とき従順の名に於て我はこゝに集まれる汝らすべてに乞ふなり、汝らの何人も、汝らの何を
食すべきか、また何を飲むべきか、あるひは汝らの肉體の要するものについて心を煩はす勿れ、たゞ神に
祈り神を讃ふことをのみ思ひ、汝の肉體のうれひを神にまかせよ、彼は汝らのために慮かりたまへばな
り。」しかれども聖ドメニコはこのときたえず見わたるが、聖フランスの語れる命令に駭き、かつ思ひぬ、
かくのごとく數多の人の集まれるところにて、何人も己が肉體に必要なものについて思ふ勿れと曰ひし
は甚だ愚かならずや、と……されど主イエスキリストは彼が殊なる愛もて貧しきものを愛せることを示
したまはむと欲し、ベルジア、フォリニヨ、スベルロ、アッジまた近在の他の町々の人々の心に入りて、
聖とき集會に多くの食物と飲料を持ちきたらしめたまへり。見よ、直ちに人々はこれらの町々より驢馬、
騾馬、あるひは馬にパン、果物その他の好き食物を載せて牽き、たりぬ。そのほか卓布、壺、皿、椀等の



近びよお院寺ジツツ

大小の器物をかゝる大群の人々の要するだけ運びきたりぬ。しかして兄弟らに多くをもちきたることを得しものは自らを益す幸福なりと思ひぬ。」

事實に於てこれらの集會の時に於ける近傍の住民の寛大な喜捨は大なるものであつた。ジョルダノ・ジ・アノは、彼があるとき出席してゐた集會のことを語つて、彼らはそのうち二日以上もその場所に止まつて、そこに持つてきて呉れたものをすべて食ひ盡さなければならなかつたといふ。

翌年のペンテコステの集會で（一二一九年五月二十六日）二年前に甚だ不成績に失敗した傳道を再び始めることが議決された。ウゴリノはそのあひだに兄弟らのために彼らの赴く諸處に宛て、紹介の書翰を書いて、彼らの道を開かうとした。彼らは僧正たちにもかつて責任をもつて、彼らがよき正教の人であつて、聖使徒の座から承認を受けた、安んじていづでも説教を許さるべきものであると書き送つた。そのとき最も適當な時に（一二一九年六月十一日）最高の教會の權威よりの文書は來た、それを獲たのはウゴリノの好運であつた。それは法王ホノリウスが兄弟らを推薦する書翰で、彼らの出逢ふべきすべての「大僧正、僧正、アボット、輔祭、大輔祭、」その他の僧職に宛て、あつた。この法王の書狀には、これを携ふるものは善き正教の信者で、聖使徒の模範にしたがつて神の種子を播き、その生活の方法は法王より認可せられた人々であることが布告された。この文書の寫しと、そしてフランスより受くる、團體に新しい兄弟を入れることの許可とを武器として傳道の導者たちは各の小さい一隊の頭に立つて出立した、かゝる人々は

のちにミニストロと名づけられた。)

このたびはドイツには一人も傳道師は派遣されなかつた。兄弟らはそれほどにもチュートン人の牢獄を恐れてゐた。その代りにフラテ・エジディオとフラテ・エレットはチュニスに行き、アレツオのフラテ・ベネデツトはギリシヤに、パチフィコはフランスに再びゆき、そして擇ばれた少數の一隊はフランスの昔の企てを取り上げてモロッコのミラモリンに赴くことに着手した。

チュニスの傳道は悲しむべき結果に終つた。エジディオとその友は境外に伴れ出されるために強制的に船に乗せられた。これは傳道の兄弟らがそこに在るためにモスレムとのあひだに紛議の起ることを恐れた土地の基督教徒の仕業であつた。そして仲間から別れたばかりのフラテ・エレットはまもなく殉教の苦しみを忍んだ、彼は跪いて、握つた手のなかには團體の掟をしつかりと持つて、そして彼が團體にあつたあひだに犯したかもしれない罪の懺悔を叫びながら殺された。

フランスは大いなる愛情をもつてモロッコに赴く兄弟らを抱きしめた。それらの名は莽ターレ、ペラルド、ピエトロ、アヂュトオ、アックルソリオ、そしてオットーであつた。彼らを送るまへにフランスは彼らにかく謂つた、古い記載によれば彼のことばはかやうであつた。

『わが子らよ、神の命令によつて私は汝たちをサラセン人の國に送り、神の信仰をかしこに宣べ知らしめ、そしてモハメッドの法典と戦はしめるのである……されば主の御旨を満すために、よく用意せよ。』して彼

らは頭を垂れて、そして曰つた、「父よ、私たちはいかなるときにもあなたの命に従ひます。」フランスはかくのごとき完全な服従を殊に歡び、そして愛情をこめて曰つた。「したしき子らよ、汝らが最もよく神の命令を果し得むがために、汝らはことに汝らのあひだに平和と同心とかたき愛を保つことを心がけよ。何人をも羨むなかれ、羨やみは墮罪の機會である。惱みのときには忍耐つよかれ、そして汝らのためによきときにも自らを謙だれ。貧しさと、従順と純潔に於てキリストを模範とせよ、主イエス・キリストは貧しさに生まれ、貧しさに生き、貧しさを教へ、貧しさに死なれた。そして彼が純潔を好みたまふことを示さむがために彼は一人の處女より生まむことを欲し、そして純潔を守り人に教へて、また處女たちに圍まれて死なれた。そして彼は生るゝより死に至るまで、然り十字架の死に至るまで従順であつた。たゞ神に於てのみ希望せよ、彼は我らを導びき助けをたまふ。汝らとゞもに掟と祈禱書を携へ、そして聖とき時々には残すところなく祈りせよ。しかして汝らはみな汝らの兄なるギターレに服従せよ。おゝわが子たちよ、私は汝たちの善き心のために悦ぶ、けれどまた汝たちに別れることを思へば、それは私の胸を悲ます。けれど神の命令には従はなければならぬ。しかしてこれをも私は汝らに乞ひ求める、汝らはつねにわれらの主の苦しみを汝たちの目のまへに視、そしてそれによつて彼のために堪へしのぶ力を強くせよ。」

そのときこれらの聖とき兄弟らは答へた、「父よ、いづこへでもあなたの欲するところへ私たちを遣つて下さい、私たちはあなたの意志をいつでも爲さうと思つて居ります。けれど父よ、あなたはあなたの祈り

をもつて私たちがあなたの命令を果すことを助けて下さい。何となれば私たちはまだ若く、そしてまだイタリアの外に出たことなく、私たちの赴くべきところの人々を知りませず、たゞ知つてゐることはその人が基督教徒を憎むことのみ、そして私たちは何も知らずアラビア語を話すこともできません。そして彼らが私たちを見るときかやうな貧しい着物に繩を結んで着てゐたならば、人々は私たちを狂人のごとくに笑ひ、そして私たちに何人も耳を借すものはありませぬ、それ故私たちはことにあなたの祈りを必要としません。あゝよき父よ、まことに私たちはあなたから離れなければならぬのでせうか？ あなたをはなれたら如何にして私たちは神の御旨を爲すことができませう？」

けれど聖フランシスははげしく感動した、そして大なる力をこめて彼は曰つた、「私の子たちよ、神にたよれ、汝らを遣はしたまふ彼はまた汝らに力を與へ助力を賜うであらう、それが彼の御旨である。」そして六人はひとしく跪いて、多くの涙をもつて彼の手に接吻し、そして彼の祝福を求めた。そして聖フランシスもまた泣いた、そして眼を空に舉げて彼らを祝福し、そして曰つた、「父なる神の祝福は汝らの上に來やう、恰かも聖とい使徒たちの上にあつたやうに。汝らのなやみのなかに彼が汝らに力を假し、汝らを導びき、しかして安んぜしめたまはむことを。そして恐れてはならない、主は汝らとゞもにありそして汝らのために戦つて下さる。』」

この物語は若干の細かいことについて幾分歴史的事物であらう、いづれにせよ人はフランシスと彼の

兄弟らのあひだの關係について印象の深い觀念を確めるであらう。そしてそのうち六人の若い傳道師は出發した——聖書の教へに隨つて、杖も旅囊も携へず、足には靴を穿たず、腰には金も銀も佩びてゐなかつた。彼らのみちはアラゴンを過ぎた、こゝでギターレは病ひに罹つて跡に残つた、そしてカスチリアとポルチュガルを過ぎて行つた。これより二年前に小さき兄弟らはポルチュガルに來たことがあつた、そしてアルフォンソ王の敬虔な妹サンチアは懇ろに彼らを迎へて、アレクセルなる小さい禮拜堂を與へ、そして彼らのために一つの家を建て與へた。そのうち間もなく女王ウルラカは彼らにコインブラの近くに一つの修道院を建て與へた。五人の傳道師はこゝからセギリヤに出發した、そのときそこは回教徒の支配の下にあつた。

セギリヤに着くと彼らは市の最大のモスクの外に立つて説教を始めた、そして直ちに捕へられて、官廳に曳かれた。モロッコに住むミラモリンはそのときアブ・ヤクブであつた。彼の父モハメド・エム・ナルジが一二二二年にトロサで敗れたのち、彼は基督教徒の反感を憚かつてゐた、そしてまた彼は軍隊の總指揮官に一人の基督教徒を用ゐてゐたからであつた、それはドム・ペドロと呼ばれて、ポルチュガルのインファンタ（嗣子ならざる王子）であるが、その兄即ち現王との不和のために回教徒のために使役されることを諾したのであつた。アブ・ヤクブは全體として平和な心をもつてゐたやうに見える、彼の最も好める遊びは羊飼ひの姿をして親から一群を草場に率ゐてゆくことであつた。五人のフランシスカンがセギリヤから彼らの

運命を決せらるべく彼の許に送られたとき、彼は彼らを放免することにもつとも意があつたやうに見える。いづれにしても彼らは彼によつて牢獄に入れられることはなかつた、そして彼は五人をしてその同宗なるドム・ペドロととも棲ましめた。兄弟らは今この自由を利用して市場や街上で説教した。彼らは少し許りのアラビア語を覺えた、ことに一行の頭であるベラルドは多く學んだ。ある日ミラモリンは市の外なる彼の父の墓へと馬を走せたとき、通りかゝると、ベラルドは車の上に立つて説教してゐた。そこで彼は五人の兄弟らを所刑せず基督教國まで送還することを命じた。

この命令の執行はドム・ペドロに任せられた。そして彼は五人の傳道師たちを護衛兵のもとにセウタに送つて、そこから船で歸らせやうとした。却つて兄弟らは引き回してモロッコに来て、そして再び説教しはじめた。そしてミラモリンは彼らを禁錮した、けれど再び釋放され、再びセウタに送られた、そして前のことくまたモロッコに歸つてきた。ドム・ペドロは國の内部へまで、戦争のあひだに彼らを伴つた、彼もそして他の基督教徒たちも、兄弟らの傳道の活動は基督教徒に對する迫害を來すことを恐れてみた。それ故にこの戦役から歸つたのちドム・ペドロは兄弟らを厳しく監視せしめた、けれど彼らがある金曜日(これはモハメット教の休日である)に脱走の機會を見出すや否や、彼らはすぐに説教に出た。そして彼らはミラモリンの通行すべき處に立つた、彼らはこんどは助かることはできなかつた。恐ろしい責苦のちに——中にも彼らは赤裸かにされて一夜のあひだ砕けたガラスを散らした床の上に轉がされた——そして彼らは鞠問され

た、そのとき彼らの答へはローマの法官のまへに立つた最初の殉教者の答へを思ひ出させるものであつた。つひに彼らはアブ・ヤクブの怒りを激させて、そして彼は起ち上つて親ら手を下して五人の殉教者を首刎ねた。ドム・ペドロは彼らの屍體をコイムブラに送るやうに計らつた、そしてそこで女王ウルラッカは民衆の頭に立つて殉教者を出で迎へ、彼らをサンタ・クルスの寺院に葬つた。

これら五人の殉教者の死の告知らせは一二二一年のペンテコステの集會で讀まれた——彼らが殉教の死を遂げたのは前年の一月十六日であつた——そしてそのときフランスは叫んだ、「今こそ私はまことに謂ふことができる、私には五人の眞の兄弟がある」殉教の冠に對する彼の深い尊敬を思へば、彼のかう叫んだのはありらべきことに思はれる。他の根據では、彼は兄弟らの苦難の記録を讀むことを禁止したといはれてゐる、「たれしも己れの殉教に悦ばしめよ、たゞ他の人のそれのために悦んではならない、」彼が兄弟たちの團體のうち五人の殉教者ができたことを誇りとするを思つたとき、彼はかやうに命令したといはれる。

これらはいかやうにもあれ、フランスがこのとき自からも殉教の苦難を克ち獲んために出かけたことは疑ひもない。一二一八年にすでに彼はフラテ・エリアを傳道師として聖地に遣した、そしてエリアはこゝで他の人々のうちにも最初のドイツ人を團體のうちに入れた、それは學識すぐれた旅行家なる、スパイエル・ケザリウスであつた。一二一九年の夏、ホノリウス三世の命によつて十字軍は強力な攻撃をエヂプトに

加へることになつた。フランスは彼の獨特の方法でこの聖戦に加はることに決心した。フラテ・マッテオ・ダ・ナルニを彼の代理者としてボルチウンクラに置き、そして新しい兄弟らに團體の服を着せしめ、そしてナポリのフラテ・グレゴリオをイタリアの他の地方に於ける代理者に定めたのち、フランスは舊友ビエトロ・カッタニとともに聖地へ出發した。

1. Tres socii, XVI.
2. Celano, Vita prima, l. n. 73. Tres socii e. XVI.
3. 「完全の鏡」四三、
4. 「小さき花」一八、
5. 「完全の鏡」七七、

七 異邦傳道と蒔の集會

キリストの愛のために異教徒に赴むく兄弟らはそれらに對して二様の方法で行動することを得る。第一の仕方は争はず、言葉をもつて論ずることなしに、たゞ神の愛の故にあらゆるものに従ひ、そしてかやうにして彼らが基督教徒であることを知らしめることである。他の仕方は、それが主の御旨に適つてゐると思つたときに、神の言葉を告げ知らせ、そしてすべての人々に父なる神、聖子、そして聖靈を信ずることをもとめ、そして彼らに洗禮を授け基督教徒とすることである。そして兄弟らはつねに彼らが己れの身と

を我らの主イエス・キリストに獻つたことを忘れず、そして彼らは主の愛のために決して有形また無形の事に降つてはならない、何となれば主の言葉に、「わがために生命を失ふものは、永しへの生命を保全せむ」とあるを以て。

たしかにフランスとその伴侶ビエトロ・デイ・カッタニが聖ヨハネの日に(一二一九)十字軍の艦隊に乗せられて、アンコナの港を出で、イタリアが海のうしろに隠れゆくを見たときの心ちはこのやうなものであつたらう。聖地への船旅はそのころでは一月を費すのであつた。つひに七月の末になつてフランスはセント・ジャン・ダアクルに上陸し、そこでフラテ・エリアに迎へられた。フランスは若干の兄弟らをヨーロッパから伴つてきたことは有り得ることで、キプロス島であつたことだといふフラテ・バルバロの話もこのことを指すのである。あるひはパレスチナにあつた若干の兄弟らが彼にセント・ジャン・ダアクルで加はつて、そして彼に従つてエジプトのダミエッタに駐まつてゐた十字軍の陣まで行つたかもしれない。

この強固な一個處の包圍はすでに永いあひだ繼續してゐた(一二一八年五月より)そしてその終局はまだ目に見えてゐなかつた。殆ど毎日のやうに新しい戦ひがあつた、恰かもフランスの到着のまへにも、一二一九年七月二十九日にも大戦があつて、そのとき二千人のサラセン人は斃された。そこで七月三十一日に十字軍士はダミエッタの強襲を試みたけれど、二人の勇敢な、機敏な大將の率ゐるモスレム人のために大損害を受けて退却した、その二人は、エジプトのスルタン、メレク・エル・カメルと、その弟なるダマスクスのス

ルタン、メレク・エル・モアッデム、即ち基督教徒よりコンラーディンと呼ばれた人であつた。

はじめフランスは十字軍の軍隊のなかに、十分な事業の舞臺を見出した。基督教徒の陣營は道德上より見て甚だ低かつた、そして十字軍の側の八月二十九日の又もや大なる敗戦の、中には、(そのとき五千人の人は戦場に放棄された)人々の心は聖フランスの悔い改めの説教を聞くやうに傾むいてきた。これらの説教の結果については、ジャック・ドゥギトリーはダミエッタから故國の友にかく書き贈つた——

「聖ミカエル(セント・ジャン・ダアクルなる)の院主ライネルはフラトレス・ミノレス(小さき兄弟)の團體に入り、これは今や全世界に擴まらむとす、何となれば彼らはことに初期の基督教徒の生活と、すべて聖使徒の精髓を模するが故なり……わが祕書なるイギリス人コリナス及び他にわが友二人、マギステル・ミカエルとドミヌス・マッテウスもまた然せり、後者はわが聖十字の寺院なる人々の保護を托せし人なり。しかしわが輔祭とヘンリクス及びその他を引き留むるにつきても大いなる困難ありき。」

何よりも第一にフランスはこゝでつひに彼の永く心に懐いてみた夢を實現する機會を得ることに惹きつけられてきたのであつた——即ち異教徒に面と向ひあつて神のことはを宣べることである。大敗のちに平和の會議は始まりかけた、そしてフランスはこの機會を利用してたゞ一人の兄弟(ボナゼントウラはイルミナートの名を記してゐる)とともにメレク・エル・カメルを訪問したのであらう。

サラセン人の前衛に達したときに二人の小さき兄弟は容易に迎へ入れられなかつた、けれどフランス

は口を休めず「ソルダン、ソルグン」と叫んで、つひに「信ずるものの支配者」の前に伴ひ行かせるようにした。スルタンは二人の説教を好意をもつて聞いたやうに見える、そして大膽な福音宣傳者たちを「私のために祈つて呉れ、そして神はいづれの信仰が彼の御心に適ふか示し給はるであらう、」と曰つて、害を加へずに送り出した。ジャック・ドゥギトリーに據ればフランスはなほ數日のあひだモスレムの陣營のなかで説教した、けれどあまり大いなる結果はなかつた。

我々は聖フランスがどれくらゐのあひだ十字軍の軍隊とともに留まつてゐたかは知らない。ダミエッタは一二二〇年十一月五日に陥つた、そして市街の掠奪は始まつた、それは溫和な傳道家を悲痛と恐怖をもつて滿すばかり野蠻な暴行であつた。彼が足に塗れた汚れの砂埃を拂つて、そして去つて聖蹟を、まのあたり近く、そしてつねに彼の心に抑へがたい憧れを起す處々を訪れたことは考へられぬことであらうか？ どうしてフランスは一二一九年の聖誕祭をベトレヘムで、そして祝福せられたる處女の告知の祭りを次の年にナザレで過すほかに何處にこれよりよき處があらう？ そして彼は聖なる金曜と復活祭をエルザレムに、ゲトセマネの園に、そしてゴルゴタに過すほかにいづこに行かう？ 彼の傳記著者たちは彼の生涯のこの時期についてまったく何も曰はない、けれど、彼が故國に歸つたのちに、彼がグレッチオの馬槽にクリスマスを見れば、それはまことのベトレヘムに於ける降誕祭の夜の思ひ出であることを感ずることができ、そしてラ・エルナの山であつたこと、彼のからだにキリストの傷を烙き印されたことは、彼

がすでに二年前の「聖なる金曜日」にまことの「髑髏の野」に於いて感じたものを完全にしたのに過ぎないのではなからうか？

この順禮のあひだにフランスは面白からぬ報知をイタリアから齎らした使者のために邪魔された。それはステファノといふ名の在俗の兄弟であるが、その長上のもより命令を受けたのではなく聖地へと旅だつて、フランスの不在のあひだに故國ではどんなになつてゐるか知らせに來たのであつた。彼が謂ふところのものは甚だ心を痛ましむるものであつた、フランスは再びジャック・ドウ・ギトリーの正しくもいふやうに「完全なるものも、また不完全なる若きものと雖も豫めの試み、あるひは修道院の規律の試練を経ずして受け入れらるる」大数の團體を導びくことはいかに困難であるかを見た。最初彼の二人の代理者ナポリのグレゴリオとナルニのマッテオとは團體内の年長なる兄弟たちとともに恐らく一二一九年七月十九日に開かれた集會でまへに團體の掟のなかになかつた斷食についての明記せられたる法規を採用したのであつた。そしてフラテ・フィリポはクラリツサたちの長としての資格でローマに在つたが、これら彼の被保護者を凌辱するものは破門に處せらるべきことを願つた。最後にフラテ・ジョ・ヴンニ・デムラ・カッペラは彼を中心として一群の癩病者を集めて、彼らに一つの掟を書き與へ、かやうにして一つの新しい團體を造らうと欲した、彼はローマに赴いてその掟に承認を受けやうとさへした。

フランスはビエトロ・ディ・カッタニとともに食卓についてゐたとき、ステファノはこの凶報を携へてきた

「肉はすでに卓の上に備へられた、この新しい掟によればこの日は肉を食べてはならない日の一つであつたが、この食物を一目見渡して、フランスは問うた。

「シニョール・ビエトロよ、」フランスは彼の學識に拂ふ尊敬として彼を君と呼んだ、「今私たちはどうしたらよからうか？」

「Eh, ビエトロはまつたくイタリア特有の間投詞で答つた、「え、シニョール・フランチェスコ、あなたがよいとお考へになるとほりに——あなたは權力をもつてゐらつしやるのではありませんか！」

「それでは私たちは、」フランスは答へた、「聖とい福音の旨に従つて、まづ私たちの前に備へられたものを食べやう。」

たゞ斷食の法規が聖書の旨に背き、そして彷徨せる説教者には守りがたいために彼にとつて氣に障つたのみならず、彼を深く悩ましたのは二人までも彼の徒弟らが彼の最も固く禁じたことを冒して、特權をローマの法王の座に請願することを敢へてしたことであつた。彼の造つた掟のなかに兄弟らに強ひてまでも修道院を取らうとするものがあるときには拘らずこれを引き渡すことを命じさへした彼が今クラリツサら保護するのに破門の勅令をもつてすべしといふことを見なければならぬとは！ 彼にとつてはただ能ふかぎり速やかに事件のなかに立ち入らなければならぬ、そしてフランスはビエトロ・カッタニ、エリア・ダ・コルトナ、ケザリウス・フォン・スパイエルその他の兄弟らとともにいそいでイタリアに歸つた。

彼らは夏の末に歸りついた、そしてすぐにウゴリノの許に赴いたやうに思はれる。彼の仲介によつてフラテ・フィリボのも、フラテ・ジヨヴァニ・デムラ・カッペラのも二つながら法王に許されなかつた、そしてフランスはそこで一二二一年のペンテコステ(五月三十日)を期してボルチウンクラに團體の集會を招集した。

フランスには今一つのこととは明らかであつた。彼の團體は新たにそして根柢から改造されなければならぬ。そしてこのことについてウゴリノが彼の輔けとなつたことは自然の徑路である。これはベッサのベルナルドによつて確實に證據を擧げられてある。今案かるべき建築の第一の石として——しかしてまことに礎石として——考へらるべきは、ホノリウス三世が一二二〇年の九月二十二日に出した文書、即ち小き兄弟の團體に入るものはまづ一年の試験時期を経なければならぬことを定めたものである。これは幾多の放縱な烏ども、フランスが「兄弟なる蠅」と名づけた連中、中世の頃には數多く存在して、よく食ひよく眠り、そして働らくことも祈ることもせず、兄弟らの許に幾日か送つてはまた立ち去るこれらの放浪者のために戸を鎖ざすものであつた。もし一たび團體のなかに入れられたならば、それを脱することは容易くはない、そして團體に加はることなしに、フランス派の衣を着、そして己れの手をもつて勞働する者に對しては(即ち*extra obedientiam*)嚴重な制度を用ゐらるべきであつた。何となれば、かのフラテ・ルフィノ、またはエジディオに許し與へた自由な生活は、のちになつて流れこむやうに集まつてきた多數のものに許してやることは不可能であつた。いくつか残つてゐるフランスの言葉は、彼がときとしては、彼が牧

人となるべきこの大きな、雑多な羊の群を殆ど怖ろしさを感じながら見遣つたことを示すのであつた。彼が東方の國に留まつてみたあひだに彼はその上にも眼に重い疾ひを受けた、そしてさまざまのことは彼をして一二二〇年の聖ミカエルの日の集會に於て團體の長としての職を去らしめることになつた。彼は代理者としてピエトロ・ロディ・カタニを指名した、そしてこの人がやがてまもなく死んだので(一二二一年三月十日)つぎにエリア・ボムパロネを任命した。かやうにして彼は目のまへにある組織の仕事について一層自由な手を働かさうと決心した。今よりはフランスはもはや團體の首、また導者でもなかつた、けれどまだその立法者であつて、そしてローマの眼中にはつねにその眞の長上なのであつた。才能の備はつた書記ケザリウス・フォン・スパイエルはフランスが東方の國にあつたときにすでに彼の信任を得たのであるが、これとともに彼は第一に重要な事業に着手した——即ちリヴァルトオで書かれ、そしてインノケンツ三世が在世のあひだに承認した言葉少なき、簡單な掟に代るものをつくり、團體の新たな完全無缺な掟として、ローマから嚴肅な、最終の承認を得ることであつた。

彼がこの困難な事業に着手するまへに、彼はまへよりも多數な兄弟らと共に集まる幸福を享けた。彼の不在のあひだに極めて無稽な風説はイタリアのうちを走つた。あるものは彼がモスレムの手には囚はれてゐると曰つた、あるひは彼は溺死したといひ、あるひはまた彼は殉教者として死んだと傳へた。そして今彼が生きてゐることが證されたとき、兄弟らは相逐うて、僧職も俗も、舊きも、また新入のものも、みな新

たに歸國した師を見、そして彼の祝福を受けやうと思つた。これがフランススカンの歴史に名だかい「磨の集會」であつた、その稱呼は、何となれば、集まつてきた三(若しくは五?)千の兄弟はアッシジの町が彼らのためにポルチウンクラに準備した家のなかに悉く收容することができずして、野に寝ね、あるひは杖と蓆(stroie)で編んだ小屋のなかに眠らなければならなかつたからである。

ウゴリノは此ときに當つてまた北イタリアに使節として行き十字軍遠征を説教することに忙しかつた、集會のあひだ彼はプレシアまたはエロナに留まつてゐた。彼の代理人として彼は他のカルヂナレ、ライネル・カッポッチオ・タ・ギテルボと、そして若干の高級の僧職を遣した。そのうちにゐた一人の僧正は嚴そかなペンテコステのミサをうたつた、そしてフランスは福音書を讀誦し、そして一人の他の兄弟は使徒の書翰エペソを讀んだ。そのちフランスはまづ兄弟らのまへで「戦ひにあたり我らの手を力つよくしたまふ主は頌ふべきかな」といふ題をもつて説教し、つぎに人々にむかつて説教した。「小さき花」の語るには、「されど聖フランスは聖靈が彼に吹き入れしものを高き聲もて説教したり。しかして説教の題として彼はこれらの言葉を與へたり、「小さき子らよ、われらは神に大なることを約束したり、されどなほ大なるものは神より我らに與へられむと約束されたり、もし我ら我らが爲せる約束を守り、しかして神の約束したまふものをつねに待つことあらばそは與へられむ。浮世の歡樂は短かし、されどそれにつづく罰は永く限りなし。この世の悩みは短かし、されど他の生の光榮は限りなし!」しかしてこれらのことばにつきて彼

は大なる敬虔をもて説教し、人々に聖とき母なる教會に従順なること、互ひの愛、神の民らすべてのために祈ること、苦難のなかにも忍耐すべきこと、純潔と天使のごとき貞操と、平和および神また人に對する融和、あらゆるものに對し謙り溫和なるべきこと、浮世を輕んずべきこと、聖なる貧しきの燃ゆることき努力、祈りと讚歌に於ける熱心と虔しきについて、しかして肉と靈に關するあらゆる憂ひにつきて、よき牧人我らが主イエスキリストに依るべきことを獎ましたり。²」

フランスがこのときに兄弟らと民衆とともに祝つたのは再會と歡こびの祝ひであつた。八日のあひだつゞいたこのカピトロの果てたときである、兄弟らはなほ二日のあひだポルチウンクラに留まつて、人々により遣はされた神の賜ものを食ひつくした。それはつひに終りに近づいたときフランスは會を司つてゐたフラテ・エリアの衣の裾を引いた(フランスは彼の足もとにすわつてゐた)、そして彼が心に思ふことのあるのを告げた。エリアは彼のうへに身を俯して、そしてやがて曰つた、「兄弟らよ、フラテは(これはフランスが退隱のちにもつた名である)兄弟は代つて私に話せと曰はれる、彼は疲れてもはや何も語ることはできない。彼の曰ふには、ドイツといふ國があつて、そこにはあまたの信仰の篤い基督教徒が住んでゐる、それは我々も屢ば見るところの此處に於ても、谷間の道を長き杖と大きな旅囊を負つて、神と聖徒の讚美を歌ひながら、太陽の熱さにも、汗にも恐れず聖使徒の墓に赴く人々である。けれどかつて我々の兄弟のうち幾人かがこのドイツの國で惡しく待遇されたために、兄弟は一人をもそこへ行かせることを

欲しなかつた。けれどもし何人か神の愛とおのがたましひの救はるゝための熱心の故に彼處に行くものがあれば、その人々は聖地へ行くものと同じ行動の自由が與へられるであらう、しかし、それより多くさへ與へられよう。されば、もし何人かそこに行かうと願ふものは、立つて側らに並べ。」九十人の兄弟らは立つて、彼らは死にも(彼らはさう思つた)赴かうと宣言した。

ドイツ傳道の先導として選ばれたのは當然ケザリウス・フオン・スパイエルであつた。彼とともに従つたのはビヤノ・カルビノのフラテ・ジョヴァンニ、これはラテン語とロンバルチア語で説教することができた、そしてロンバルチア語とドイツ語のできたフラテ・バルナバス、のちにフランシスの傳記を著したトマス・デ・チエラノその他許多の兄弟らであつた。傳道に派遣されたうちにはなほジョルダノ・ジャノがゐた、これは自ら記録のうちにいかに彼が不穩當に急いで立派な交友を求めたことの罰としてそれらとともに往かされたかを諸證をもつて語つてゐる。すべてに於てそこには十二人の牧師と十三人の在俗の兄弟らが行つたのである、そして我々はフランシスが彼らを「彼の能ふかぎり」をもつて祝福し、例よりもなほ一層の熱情をもつて、彼らのみならず、彼らの祈りによつて團體のなかに入れらるべきものすべてをも祝福したことを信ずることができぬ。

夏は過ぎて、そしてドイツに行くべき兄弟らは出かけた。けれど彼らの遭遇したのは殉教の苦難ではなかつた。ジョルダナスも書いたやうに、彼や他の兄弟らがトリエントよりポーツェンに、ポーツェンより

ブリクセンに、ブリクセンよりステルツィングに、ステルツィングよりミッテンワルデに行つた物語はフランシスカニスムの歴史のうちの最も美しい數頁である。ミッテンワルデの町に着いたのは夕方であつた、そして朝から彼らは何も食はずに、七里を旅したのであつた。空腹を抱へてやすらかに眠ることができたために彼らは傍らなる小川の水で腹を満たすことにきめた。翌朝彼らは旅をつゞけた、そして晝ごろになるとその幾人かは病氣になりはじめた。彼らはいくらかの野生の林檎を見出して食べた、そして時は蕪の收穫の時であつたので、彼らはいくつかを乞ひ受けてそれを食べた。

全體に於て兄弟らは旅のあひだによく款待された。彼らは時としてはストラスブルヒに、スパイエルに、ウォルムスに、マインツに、キヨルンに、ウルツブルヒに、レーゲンスブルヒに、ザルツブルヒに留まつた。むかしのフランシス派の仕方に従つて、彼らはいづこにも彼らを覆ふ庇ひを見いだした、あるひは癩病患者とともに、または穴倉に、また壊れ棄てられた會堂に。エルフルトの町でフラテ・ジョルダノは兄弟らとともに通りかゝつたとき市民から「修道院を建て、與へようか」と曰はれた。けれど彼はまだ團體の持つてゐる修道院を見たことがないために彼は答へた、「私は修道院とはどんなものか知らない、けれどあなたがたが何か爲たいのならば、私たちのために水に近いところに家を建て、下さい、さうすれば私たちは足を洗ふことができます。」そしてそれはその通り行はれた。そして特色を發揮した話はまたザルツブルヒの町にゐた兄弟たちについて語られてある、その兄弟たちにケザリウスは書簡を送つて、もし彼らが欲するな

らば、スバイエルの集會に來てもいゝ、また彼らが欲しないならば、來なくてもいゝと曰つてやつた。そして兄弟たちは決して自分自身の欲望をもつことを欲しなかつたので、このことについては尠らず心を苦しめて、つひにかやうに漠然とした命令を送つたケザリウスの考へを聴くためにスバイエルまで出かけた。席の集會に於て兄弟たちがことごとく分派されたとき——あるものはイタリアの諸地方にあるひは傳道に——に、一人の誰も知らず、誰も心にとめぬ兄弟が一人留まつてゐた。彼は兄弟らとともにメツシナから來た、そしてこの兄弟らも彼については何も知らずに、たゞ彼が新たに團體に入つたやうな風で、そしてアントニウスといふ名で、故郷はボルチュガルであるが、モロッコから歸國するときに漂流してシチリアに來たことだけわかつてゐた。つひに見知らぬ兄弟はロマニヤの地方に於ける長職フラテ・グラチアノの側に進み寄つて、そして彼に従つてゆくことの許しを求めた。「汝は牧師か？」「左様！」この答へを聞いてグラチアノは見知らぬ兄弟のためにエリアに請うた、(そしてこのころは兄弟らのうちに僧職にあるものは多くなかつた)。アントニオは彼の新しい長上に従つてロマニヤに赴いた、そしてそこで彼はフォルリの近くなるモンテ・パオロの隱栖にかくれて住んだ。そこで送つた贖罪と祈りの寂しい生活を、後に彼は見棄て、民衆に對する大いなる説教者となり、教會は彼をパドヴの聖アントニウスの名のもとに聖者として承認した。

1. Jacobi Vitiacensis Historia occidentalis, Lib. II. C. 32. Appendix zu Boelmers "Analekten" S. 101—105

2. 「小さき花」一八

3. 「完全の鏡」八七、聖フランシスの遺書書簡に於いて彼の心情の流弊する溢るゝごとき言葉を見よ、「わが祝福せられたる子どもらよ、「わが愛する子らよ、「われ、フラテ・フランチェスコ、汝らの小さき僕はわがあたり汝らを祝福す。」

八 掟 と 戒め

ケザリウス・フォン・スバイエルはしばらく兄弟たちとともにドイツの旅に上らなかつた。フランシスは彼に彼を助けて團體の掟を書き下すことを乞うた、そしてケザリウスもまた旅出のまへにしばらくフランシスの許にゐることを願つたのである——彼は再び歸つてきて師に見えることができると思へなかつた。これらの理由のいづれかで、ケザリウスは三月のあひだをフランシスとともにスポレトの谷、あるひはボルチウンクラに、また上つてカルチエリで過した。

フランシスがリヴォルトで書いた第一の掟はまったく簡單な短かいものであつた。「我は少許の單純なる言葉もて書きたり、しかして我らの主君法王はわがためにこれを保證したまへり。」とフランシスは彼の遺書のなかにも書いた。初期の傳記著者たちの證明はみなこれと一致してゐる。この第一回の掟の大部分は聖書の抄録——殊に馬太傳十章の九、十、十九章の二十一、十六章の二十四、そして路加傳九章の三等

を集めてつくつたのであつた。それから出てフランスが掟レギュラといふ言葉の代りに好んで用いた名は *Forma Sancti Evangelii*。聖とい福音の典型といふのは起つてゐる。約言すれば、福音を守ることが彼の欲したものであつた。

この第一のフランス派の掟といふものは今は亡くなつた、そして最近になつてからそれを發見しやうとした多くの勤勉な努力の一つとして成功したものはなかつた。けれどこれらの試みは正當な立場から企てられたのである、即ち謂はゆる *Regula prima* (一般にはカール・ミュラーの説によつて「一二二二年の掟」といはれてゐる) のなかに團體の原來の掟がその添加されたものとともに後世の追加や變更や擴張の莫大なる量のなかに埋まつてゐることは疑ひないのである。

いかにこの進歩が行はれたかといふことについての暗示はジャック・ドゥギトリーがフランス派の集會カピトルを記述したものから得られる。そのなかに彼はいかに兄弟たちがこの集會に來り集まつて、「そして善き人の補助によりて、聖とき掟を書きこれを定めた」かを語つてゐる。けれど兄弟たちを輔けた善き人々はカルチナレたちであつたに相違ない、これらとフランスとの密接な關係は一二一六年の夏につくられ、そしてそのときジャックは法王のクリアにゐたのである。そのうへこの記述は我々が他の根據から知つてゐるもの、「兄弟たちはペンテコステにはポルチウンクラに來り集まつていかにして彼らが最もよく掟を守り得べきかを議した、」といふこととよく一致する。

フランスは勿論これらの會議に決定的な發言權をもつてゐた、そして今も引用したオーソリティーがまた謂ふには、「聖フランスは主に於て彼の善しと思ひしごとくに、戒め、責め、しかして命令したり。」ここにラテン語の原文を引いてくると意味は一層明瞭になる。それはかう書いてある、*faciebant admonitiones reprehensiones et praecepta* けれどこゝに我々はアッシジのフランスの書いたものゝなかに *Admonitiones* といふ名のついた一部の集録の残つてゐるのをもつてゐる。もし原來の掟に加へた第一の添加を發見しようとするならば、第一に著目すべきはこゝである。表題はつぎのやうに語つてゐる、「神父、神子及び聖靈の御名に於て、これは我らの譽れある父聖フランスが兄弟らすべてに與へたる訓戒の聖ときことばなり。」

この「訓戒」のなかに、トマス・デ・チェラノが掟について謂ふときに、「聖とき生活のために全く必要なる若干の追加せられたる命令」と名づけたものが見出だされる。そのなかにはつぎのものが收められてゐる

- 一 「主の聖體について。」フランスが第一に彼の弟子たちの心に刻み、深く胸のうちに懐かしめむと欲したことは、聖體に於て信仰の目に啓示される神に對する大いなる畏敬と大いなる愛であつた。
- 二 「自我の意志に罪あること。」墮罪に導くものは自我の意志である。
- 三 「完全なる従順について。」あらゆるもの、己の意志までも棄つるに非ざれば、イエスの弟子となることはできなす。

- 四 「何人も統治の力を欲求せざること。」 兄弟らを統治するよりは彼らの足を洗ふ方が優つてゐる。
- 五 「何人も讃へ擧げらるゝこと勿れ、たゞ主の十字架に於て榮ふべきこと。」 それはのちになつて遂に「小さき花」の名だかい第八章に展開された思想(第二編の四)と同じ思想の徑路である。
- 六 「主の跡に従ふこと。」「我らは主の僕と呼ばれむことを願ふ。されどこは恥づべきことなり、何となれば聖者らは大なる事を成しぬ、しかるに我らはたゞ彼らについて語りまた説教するをもつて同じく譽まれを得、敬まはれむとすればなり。」
- 七 「叡智は労働をもつて従はれざるべからず。」 よき労働を教へる智慧のみ價值があるといふこと、これはフランスが屢ば繰りかへす思想である。
- 八 「何人をも羨やむ勿れ。」 ことに神がたましひに爲したまふ善について人を羨やんではならない。
- 九 「愛について。」 人が不當な苦しみを受けたときに、まづ何よりも悪しき人が己のがたましひに爲した害を思ふものはまことにその敵に對して愛をもつものである。
- 十 「肉體を責むること。」 我々の愛してはならない敵はたゞ一つある、それは肉體である。そしてもし我々が勇敢に撓まずこの敵と戦ひつゞけるならば、靈的な、また物質的な敵は他に一つも我々を害することのできるものはない。
- 十一 「他の人の罪の結果を頌ち有すること勿れ。」 惡に惡を報いるとき、人は罪の結果を己がたましひ

に負ふ。

- 十二 「主の聖靈の徴」 について人はまことにより善くなるに従つて自ら益々より惡しきものと思ふ。
- 十三 「忍耐について。」 己が忍耐がいかに大なるかをまことに知るのは忍耐することのできない原因がそこにあるときである。
- 十四 「たましひの貧しさについて。」 たましひの貧しさは多くの斷食や贖罪のうちにあるのではない、たゞ右の頬を打たれたときに左の頬をも向けてやることに存在する。
- 十五 「平和について。」 柔和なるものは福ひなり。
- 十六 「心の潔きことについて。」 浮世を輕んじ、天國を求め、つねに主なる神を目のまへに見るものは心潔きものである。
- 十七 「神に仕ふる卑しき僕たること。」 しかして隣人より求むるに己れが神にさゝぐるよりも多くを欲せざること。
- 十八 「隣人を慈しみあはれむこと。」 隣人が有する缺點について隣人が己れについてもつべきものとおなじ心がけをもつものは福ひである。
- 十九 「神のよき僕について。」 人々より擧げられ讃へられたるときにも自らを人々より嘲けられ蔑まれ辱しめられたるときより大なるものまたは善きものと思はざるものは幸ひである。何となれば人はたゞ

神のまなこに映ずるとほりのものであり、そのほかにない。

二十 「團體の善きまた悪しき兄弟について。」神のためになす労働と神について語ることをのみ己が悦びとなし、それによりて人々を導きて平和と悦びに於て神に仕ふるに至らしむるものは福ひである。

二十一 「團體の虚しき饒舌なる兄弟について。」人々をして意味なき虚しき雑談に笑はしむるを悦び、神より享けし恩寵に適應せざる行ひをなす兄弟は禍ひなるかな。

二十二 「過を改むることについて」非を飾るを急がずして、讓だりをもつて、罪なきときにも恥しめを受け責められむと欲する兄弟は福ひである。

二十三 「謙だりについて。」長上に對するがごとくなほ己れより卑きものゝあひだにても自ら卑くせむとするものは福ひなるかな。

二十四 「まことの愛について。」兄弟が病みて己れに依るときも、なほ彼が健やかにして彼を助けしかして樂しますときのごとくに愛する神の僕は福ひなるかな。

二十五 しかして兄弟が彼を離れしときも、また傍にあるときも等しく愛し、恐れ、彼に愛に於て聞かしむる能はざることとその背にて曰ふことなきまことの神の僕は福ひなるかな。

二十六 「神の僕は僧職を敬ぶべきこと。」聖ローマ教會の法に依りて生くる僧職らに忠實なる神の僕は福ひなるかな。しかして彼らを輕んずるものは禍ひなるかな。たとひもし彼ら罪あるものなりとも、彼

らはイエス・キリストの血肉を守るものなれば何人もこれを審判するべからず。

二十七 「罪を逐ひ退くるもろもろの徳について。」これはすでに掲げた(第三編の四)諸徳の讚美である。

二十八 「おのが善徳を誇らざること。」神は隠れたるに見たまふ、たゞ彼のためにのみ我らはあらゆる事をなし、しかして我ら自らがために天に徳を積むべきである。

Haec sunt documenta pii patris. (これらは敬虔なる父の書けるものなり。)我々はこの二十八の短かい章を読み通したのちに、トマス・デ・チュラノの言葉でかうも謂へやう、「この訓言をもつて敬虔なる父は彼の新しき子を練りたり。」フランスはたしかに驚くべき能力をもつた「新入者の訓練家」(と修道院の術語ではいふ。)であつた、けれどこの宗教的心理學的なアフォーリズムは屢ばふしぎなほど織巧なものであるが、一つの修道院の掟のやうには思へない。

こゝにあるやうな掟を聖フランスが書く仕方については、我々は一方にまつたく彼の手から出たことを疑はれぬ一片の規則書によつて一つの概念をもつことができる。「團體の初期にあつて兄弟の數少なくきまつた修道院のなかつたころ」(小さき花、四)には、團體の各員は多くは傳道の旅に日を送つて、いづこにも見出したところに雨露を凌いだ。そのあひだには彼らは孤獨のなかに退いて安らかに祈りをし、そして新たに傳道にゆく力をたましひに強くするために、師の例に従つて、「他の人々に説教することを彼ら自らに確證した。」これらの方法で最初のフランス派の「修道院」は創立されたのである、これらは、けれど名

譽ある名を受けるに誤用されたものと曰へる。ポルチウクラでは「修道院」は生垣で圍まれた若干の草小屋の集まりであつた、カルチェリのはたゞ三四の窟であつた、フォンテ・コロムボとラ・ゼルニアの山のも同じであつた。そして「小さき花」をよむとき私たちは幾たびかこれらの「兄弟たちは眠るのにたゞ草の小舎に覆はれるばかりの修道院」に運ばれる。Quaranta (修道院)といふ言葉もフランス派の棲家を曰ふときに用ゐられはしなかつた。前にも曰つたやうにフラテ・ジヨルダノはエルフルトで修道院を造り與へやうと申し出されたときに少からず當惑した。かやうなフランス派の住家はたゞ處、または隱栖、あるひはかくれ家と呼ばれてゐた。そして一時かやうな隱栖に宿らうとする兄弟らのためにフランスはつぎの掟——あるひはたゞ定めといはうか——を書いた、それはカルチナレ・ウゴリノまたはフラテル・ケザリウスの助力無しにまつたく彼自らの手から出たことは疑ひないので愈よ貴重なものである。こゝにそれをすこしも略さずに載せやう。

De Religiosa Habitatione in Eremo.

(隱栖の宗教的生活について)

「隱者の住家に於て信仰の生活を爲さむとするものは三人もしくは多くも四人なるべし。その二人は母となりて他の二人もしくは一人を子とすべし。しかして母なるものはマルタの生活をなし他はマグダラのマリアのごとくなすべし。」

「母なる二人はマルタの生活を爲すべく、しかして二人の子はマリアの生活をなし、一つの圍クワットロひのなかに室ケンナを有しそにて祈りまた眠るべし。日没とともに彼らはコムブレトリオ(一日の最終の祈禱)を祈りそれより無言を勤むべし、しかしてマッド・ティノ(朝の祈り)には起き出でて時の祈りをなし、第一に神の王國と彼の審判を求むべし。適當なる時にまづ第一時の祈り、つぎに第三時の中には無言を解きて彼らの母たちの許に行き、しかしてもし必要ならば、他の貧しき人々と同じく彼らより神のために施しを受くべし。しかしてそののち第六時と第九時の祈りをなし、適宜の時にゴスペルスを唱ふべし。」

「しかして彼らは何人をも棲處の圍ひのうちに入らしむべからず、また何人もそこに食すべからず。母となれる兄弟らはあらゆる人より離れ、しかしてその上なるものの命ぜしごとく、彼らの子をよく守りて何人とも語らしむること勿れ。しかして子となるものはたゞその母たる兄弟及び神の祝福をもつて訪ひ來る長上とのほか何人とも談話すべからず。しかれども子は母たちの勤めをも願ちてもしそのこと互に益ありと思はゞこれをなし、しかしてすべて前に曰へることを正しく行ふべきことを努むべし。」

フランスに書くことのできたのはこのやうな掟であつた。フォンテ・コロムボあるひはモンテ・スバジオの寂しい山の中にも棲んで、その二人は聖書にあるマルタのやうに浮世のことに心をつけて他を防げば、二人はまたマリアのやうに主の足もとにすわること許されてゐる。かやうな兄弟たちの叙述はいかに愛すべきものではないか！そして書ごととなれば、マリアの役をもつてゐた二人はそこへ來て温順し

くしとやかに食物を乞ふ——あたかもしつけのいゝ子供が愛らしい母に求めるやうに。

一二二〇年の簡短な固有の掟と隠栖についての掟のほか、我々は一つのボルチウンクラにのみ有効な特別な掟のあることを聞いてゐる。これは「完全の鏡」の第五五節に保存されてゐて、多くの點で隠者に對する掟を聯想させるものである。たとへば他人はその處に立ち入ることを禁じてある等のごときはこゝにも出てゐる。浮世の話や無益な言語はボルチウンクラで口にしてはならない。そこに在る兄弟らは全體中の最もよく、信仰の篤いものうちから選ばれたもので、そして模範たる祈禱讚美の讀誦によつてすべての人の徳を高めるのである。「しかししてこの處には益なきことは何ごとたりとも爲されずまた口にされずたゞ讚歌と聖歌をもつて潔よく尊とく保たるべし。」この掟を破つたときには——同じ本の八十二節にあるやうに——その犯した者は「我らが父」を一度とそしてフランスの作つた祈禱文「神の讚美」を唱へなければならぬのであつた。

聖フランスが立法者としての仕事はまつたくたゞ折々にふれてのことであつた。ある集會のときに、彼は多くの兄弟らが贖罪の褌衣や鐵の環やその他のものを肌につけて身を責めてゐることを耳にした。彼はたゞちに兄弟らがかやうな苦行の道具を用うることを禁じた。またあるときには彼はつき定めを書き止めさせた、「兄弟らは陰氣な、悄然とした顔をして偽善者のやうな様子にならないやうに注意しなければならぬ、彼らはいつとも主に於て樂しげに、悦はしげに、愛らしく、そして心ちよい様子をしなければ

らないこのところは現存の *Regula Prima* 第七章に見出され、そして「完全の鏡」には他の定めが引用してあるが（九十六章）これは他に我々の知るものとまつたく一致してゐる。第一の掟の最終の章は題として、*Admonitio Fratrum* と名づけられてゐる。

もしリヴァルトの掟に全法典の基礎が見出さるべきものならば、同様にしてこれらの折々の定めや戒めは最初の形どりとして考へらるべきものである。そしてその他のものは時と場合の必要に適應してこれらの上に築かれたのである。一二一七年に大規模のフランス派の布教は始められたのであるが、レグラブリマの十四及び十六章のやうな簡條、「兄弟らはいかにして諸國に行くべきか、」また「サラセン人その他の異教徒に赴くものについて」はこの時期に成立したものととして誤りはなからう。この種の告別の戒めは聖フランスの傳記を書いた人々によつていくつかの例を残されてある。例としては「完全の鏡」の第六十五節「出發せんとする兄弟らに與ふる訓戒」及び掟のなかから取つたいくつかの拔萃の「主の御名に於て」*In nomine Domini*（この形式はこの時代にあらゆる公けの文書の始まりを書くのに通例であつたのである）といふ言葉で始まるのを読んで見ればわかる。

これらののちになつて團體が發展したときますます大いなるものとなつたこれらの訓戒の言葉はその時書き下されたことについては確かであるとして可いのである。そのすべてはみなフランスが兄弟らを導びくに足り、また守らしめむと欲した純に實際な目的をもたないのではない。いかに彼がこれを主張した

かそれを我々は彼の後の手紙のうちに見出しを謄寫して數多くつくり、そして各の一部を祈禱書とともに保持して、「ますますよくこれらを行ふ」ことを求めたかに見ることが出来る。

もし我々がフランスとケザリウスとが一二二一年の夏に團體の掟をつくるためにした協力の仕事を理解しやうと思ふならば、我々はまづ彼らが一二一〇年の固有の掟のほかに、材料として訓戒と規定をすべて集めたものをもつてゐたことを考へなければならぬ。この材料から彼らは團體の新しい掟を集録する企てであつた。實際に於て、彼らは古きものと新しきものとを、屢ば連絡もなく、繋ぎつけて、そしてこの行はれた「規定」の集録(あるひは抄録と曰つた方が好いであらう)を編み出した、これを初期の學者はレグラ・プリマと呼び、新しい學者たちは「一二二一年の掟」と呼ぶのである、これは、いかなる意味に於ても團體のこととして採用されなかつたのである。

カール・ミュラーまたはベニメルのやうに細微に穿つことを欲せずしては、この大いなる材料の集録の何處が原來の掟から出て、どれが後の添加であるかを理解するのは不可能である。リヴォルトの掟からは緒言(フランスは法王インノケントに従順を誓ふこと)のほかに、疑ひもなくつぎの部分がでてゐる。第一章、團體に入る三つの誓約、従順、貧しさ、純潔。第二章、兄弟らを入れることおよび着衣を受くることにつきて。第三章、勤行と斷食について。第七章、兄弟のいかに勞働し祈禱すべきかについて。第八章、及び九章、金錢に心かけざること、必要なるときに施しを乞ふことについて。第十二章、女人を避くるこ

とについて。第十四章、道に何も携へざること、そして悪しき人々と争はざること。第十九章、僧職を敬ふこと。これらの章は原來の掟のなかには他の形式に排列されてあつたかもしれない、けれど意味は同じである。斷食についての定めはもとレグラ・プリマにあるよりも厳しかつたやうに思はれる。

基礎となる掟に後から添へたものとして我々は第四章の公式に「神の御名に於て」と始まつてゐるのを見なければならぬ。これはそのうへに長とにつきて、及びこれに對する兄弟らの服従について書いてある、これは第一回の長たちが選ばれ、そして教區アドモニチオネスの分置が定められたときのカピトロ集會に源をもつてゐる筈である。他にいくつかの章は現存の訓戒と一致するのがある、かやうにしてこの第五章は第四、第十一の訓戒と、第二十二章は第九、十の訓戒と一つに置くことができる。トマス・デ・チェラノが名を擧げた「訓へ」のことは現存の訓戒のうちには見出されず、却つてレグラ・プリマの第八章に見えてゐる。

レグラ・プリマの第三の要素は我々が宗教的詩歌と呼ぶべきものから成り立つてゐる。まづ第一にこれに屬するのはすでに(第二編の一)謂つた讚美の歌であつて、フランスが彼の兄弟らに與へて、神のよき音楽者として町々に歌はしめたものである、それにはすでにのちの太陽の歌を思ひ出させるリズムも含まれてゐる。フランスが何ごとよりも最も欲したのは人々の心を神にむかつて燃えしむることであつた。そしてつひに最後の *Admonitio fratrum* 兄弟らの戒め——(古い名はこゝに章の題として保存されてゐる)に彼とケザリウス・フォンス・パイエルの勞作は一つの大きいなる讚美の歌の高潮に昇つて、いよく強く流れ出

でるオルガンの音のやうに抑へがたくますます高まつて、そして最高の巔に達するまでは決して息まない——そこに至ればあらゆる人の言語は口を噤み、あらゆる人の思想は潜み、たゞ天使の「聖なるかな、聖なるかな」とたえまなき福ひなるたましひらのアレルヤのほかには何も残らない。この最後の章はかやうに響く、

「祈り、讚美の歌、及び感謝の行ひ。」

「能はざることなき、最高のたかきに在ます崇かき神、聖とき義しき父、天と地の主よ王よ、我らは君に君みづからの故に感謝したてまつる、何となれば君は聖とき意志をもて、及び君のたゞひとりの御子と聖靈とをもてあらゆる靈と物の世をつくり、我らを君が姿に似せて造りたまひ、しかして我らを天國に住ませたまひぬ。しかるに我らは己のが罪もて彼處より墮ちぬ。しかして我らはなほ君に感謝す、何となれば君は、君が聖子によりて我らをつくりたまひしごとく、また我らを愛したまふまことの聖とき愛によりて彼、まことの神にしてまことの人なるものを、永しへに純潔なるいと聖なる處女マリアより生れしめたまひ、しかして彼の十字架と血と死によりて君は我ら憐れなる罪人らを放たむと欲ひたまへり。しかして我らは君に感謝す、何となればその同じきもの君が聖子は權能の光榮に於て歸りきたりしかして、悔い改めず君を知らざりし詛はれたるものを永への火に送り、しかして君を知り、君に祈り、悔い改めて君に仕へしものには「こゝに來れ、わが父の恵みを享くべきものよ、世の始めより汝らのために備へられてあり

し富を嗣げよ」と宣へばなり。

「しかして我ら憐れなる罪人はみな君が名を謂ふに足らざるものなれば、我らは主イエス・キリスト君が悦びたまふ愛子が聖靈なる慰めの人とともに、君が彼によりて我らに爲したまへる大いなることのために感謝したまはむことを祈りしかして求むるなり、アレルヤ。しかして我らは恭しく最も幸おほき聖母處女マリア、ミカエル、ガブリエル、ラファエル、その他聖とき精靈の群れ、セラフィムとケルビム、王座、領地、力、權能、天使、大天使、幸ある洗禮のヨハネ、福音のヨハネ、ペテロ、パウロ、族長たちおよび豫言者たち聖とき罪なきもの、聖使徒たち、福音の宣傳者たち、御弟子たち、殉教者たち、懺悔父たち、處女たち、エリアおよびエノクその他あらゆる過去未來の聖者に祈りて、彼らが君にむかひて愛よりして、君が心に適ふがごとく我らの感謝をとしへにいつまでも傳へむことを乞ふ、君、最も高きまことの永しへなる生ける神、御子なる我らの愛する主イエス・キリスト、慰さめをたまふ聖靈とともに。永しへの永しへにアメン。アレルヤ。

「しかして我ら小さき兄弟ら、我ら益なき僕らはみなつゝしみてすべてのものに祈る、聖とき正教と聖使徒の教會にありて主なる神に仕へむとするものみな、團體にあるものみな、ありとある牧師、輔祭、副輔祭、讀經師その他ありとある僧職、あらゆる修道僧、あらゆる尼、あらゆる小兒とあらゆる女および少女、ありとある貧しき乏しきもの、王、または公侯、勞働者、農民、僕、主人、ありとある處女、妻あるもの

及び良人あるもの、ありとある俗の人、男女、あらゆる嬰兒、幼兒、老若、健やかなるもの、病めるもの、ありとある大小の人々、諸族、あらゆる國人および到るところの現在また未來の人々、我らは彼らにみな謙りて祈りて彼らまことの信仰と悔い改めに撓まざらむことを欲す、しからざれば何人も救はるゝこと能はざればなり。我らみな我らの心をつくし、たましひをつくし、われらの智をつくし、我らの力、能力をつくし、我らの理智と力をつくし、我らの努めをつくし、我らの愛をつくし、我らの内にある自己を悉し我らの欲求と意志をつくして主なる我らの神を、我らに肉體のすべてを與へ、たましひのすべてを與へ、我らのいのちのすべてを與へたまひ、我らを造り、我らを贖ひ、しかしてたまことの愛より我らを救はむと欲したまふ主、すべてよきものを我ら憐れむべき、腐れたる、恩に背ける惡しきものに與へたまひ、日々に與へたまふ主を愛せむ。

「されば我らは他に何ものをも求めず願はず、何ものをも悦ばず樂しまざらむ、たゞ我らの造り主、贖ひ主、救ひ主、一つのまことの神のみ、完全の善すべての善まことの高き極みなる善なるもの、善く篤く心温たかに、たのしく愛にみだせるもののみ、たゞひとり聖とく、正しく眞にして義しきもの、たゞひとり善く罪なく純よくして、それより、またそれとともに、またそのうちにあるすべてのものはみなありとある贖罪者、正しきもの、天に祝福せられたるもの、赦し、恩寵、光榮なるものをのみ願はむ。されば何ものも我らを彼より抑ふるもの、我らを離つもの、逐ふものなからむことを。我らはいかなる道にあり

ても、いかなる時、いかなる處にありても、日々に、恒に、まことに、恭しく神を信じ神を我らの胸に守らむ、しかして我らは最高の永へなる神を愛し、讃へ、願ひ、仕へ、従ひしかして祝ひ、讃へ譽めむ。三位に、一體に、父と子と聖靈を、あらゆるものを造りたまへる主を、彼を愛し希望するもの、救ひの主を始めなく終りなき神を、變らざる、思惟すべからざる、見えざる、知られざる、穿たれざる、祝福られせたる、光榮ある、擧げられたる、高き、やさしき、愛すべき、恐ろしき、しかしてつねにあらゆるものうへにいつまでも渝らず愛すべきまた願はしき價ある神を永しへの永しへの、父、子、および聖靈に榮えあれ、その始めにありしがごとく、今在るがごとく、永しへに在るべきがごとく。アメン。」

1. Boehmers, „Analekten“, S. 30—49
2. Ibid., S. 67—68
3. „Dico tibi, fili mi, sicut mater“ (われはなんぢにいふ、わが子よ、母のごとくに) 聖フランシスは彼の愛する弟子レオネにむかつてかやうに書いた、この人とともに彼はしばしば隠栖に留まつたのである。Boehmers, „Analekten“, S. 68.
4. ヘエメル氏は聖フランシスのこの點についての願慮を示す幾多の章句を指示した。„Analekten“, S. XXXVI.
5. Böhmner, „Analekten“, S. 23—26

九 聖フランシスと學問

團體の決定した掟のできあがるまでにはまた二年を費した。一二二二年九月にケザリウスはドイツに出發して傳道師たちとともになつた。そして始めて一二二三年十一月二十九日にホノリウス三世は彼の文書 *Sollet annone* をもつて掟に承認を與へた。これら二つの日附のあひだには不幸にも明瞭な記録の残つてゐない數多の事件の縦列が横はり、そしてそのあひだには一方にフランスと他方にエリア・ボムパローネとその同志とのあひだに大なる對抗が進んだやうに見える。ウゴリノはこの争ひには困難な任務をもつて仲裁者となり、できるだけ二つの派を和めようとした。

この争ひの核を理解するためには人は新しい團體が最近の數年に經過したひろい發展を識らなければならぬ。

彼の引退にあつてフランスはたしかにある定まつた権能の地位を己れのために留めて置いた——たとへば一二二一年のペンテコステのカピトロ集會に於てドイツの傳道隊を派遣したのは彼であつた。そして他の典據は彼がつねにその集會に少からぬ權威をもつて示したことを示すものがある。フランスはそのあひだすこしも事實強制的であることを行つたことはない。「彼は悪しきものをもつてするよりはむしろよきものをもつて最終の目的に達することを願つてゐた」とジョルダノは曰ふ。もし彼が欲することく行ひえなかつたときにも、彼は「浮世の権力者の如くに」威力を揮はうとは思はなかつた。彼が兄弟らをして義務を果さしめることに成功しなかつたときには、彼は自ら二倍の務めを負つて自ら慰さめてゐた。¹

このやうな傾向のある心の人には、彼より精力の強い人々の意志はたやすく十分な影響をもつた。その最も著しい第一の者はエリア・ボムパローネあるひは彼ののちに一般に名づけられた風にすればエリア・ダ・コルトナその人で、この種類の強固な意志の人であるが、そのうしろには彼の味方で、そしてフランスに反抗したあまたの他のものがあつた。その一人の名は傳はつてゐる——それはボロニヤから來たフラテ・ビエトロ・スタチャである。他のものは記録にはたゞ「長」たちといふ名で現れてくるが、それには殊にイタリアの諸地方の長上——若くはフランス派の言葉でこれらの諸區の「僕たち」ミニストリ²のことが意味されてゐる。

私は今ボロニヤを擧げたが、それによつて私は團體自身のうちからフランスに對して現はれた背反の中心地を名指したのである。そこには舊くからフランス派と名だかい大學のある市とのあひだにはある關係があつた。すでに一二二二年のところにクィンタヴレのベルナルドはそこで説教し、そして一二二三年にこの小さい兄弟たちはボルタ・ガリエラのすぐ外にあるレナリオレと名づけた家に定住した。新しい團體の列のうちで最も重要な人々のいくたりかはボロニヤで學んだ、そのうちにはフランスの二人の最初の代理者^{チガレ}ビエトロ・デイ・カタニとエリアがゐた、なほのちになつて團體のジネラレとなつたものゝ多くは、即ちジョヴァンニ・パレンティ、エーモン・オブ・ファヴーシヤム、クレシエンチオ・エジ、ジョヴァンニ・パルマなどがそのうちにゐた。大學の教授ニコロ・ベポリはまへに曰つたやうに始めから團體の助力者で、そして

恩人の一人であつたが、最後に自からそれに入つた、ポロニヤの最も有名な法律家アックルジオ（これは大の字を冠せられてゐた）は同じころ彼の市の外にある別荘ラ・リカルディナを團體に譲つた、そしてそこに立つた第一の修道院はまもなく狭小を告げるやうになつた。そして最後にビエトロ・デスタチアは聖ドメニコ派によつてポロニヤに開かれた神學校と同じ様な學舎をフランシスカンのために開いた。

けれどこれはフランシスの悦ばぬところであつた。生涯のあひだ彼は自ら *solus* といふことを好んだごとく何も學ばない人であつた。彼は決して學問に悪意はもつてゐなかつた、そしてサバチエがフランシスには學術に對する根本的な反感があつたといふのは當らない。訓戒の形式で彼はあるとき書いた——「すべて神學者など神の言葉もて我らを助け補ふものは、我らこれを譽め敬ふべし、彼らは我らに精神と生命を與ふればなり。」けれどこの研學は實際的な目的がなければならぬ、即ちそれは神の言葉の註解とならなければならぬ。それ故きはめて少數の書物で足りるのである、祈りに於て人は心に刻まれるものをもつともよく學ぶ。フランシス自らも聖書を読むことを好んだ、これは彼の著作にも示される通りである。

けれど彼が齡を重ねたとき彼にとつては彼は神の言葉さへもはや十分に讀みつくして、彼の生涯の殘部をば、彼はそれを熟慮すること——それを實踐することに目もたらぬほど多くをなさなければならなかつた。彼の心はつねに思つた、實行の例こそは最もよき説教である。彼は彼の掟のなかに人々の三つの階級——説教する者、*プレチカトレス*、祈禱する者、*オラトレス*、働らく者——を定めた、そして彼は祈るもの、働らくもの、上に説教する

ものを置いた、けれど彼はまた謂ふ、「すべて兄弟らはみな彼らの行ひをもつて説教しなければならぬ。」そして彼は「浮世の智慧」としてただ言ふのみであつて何も爲すことなきもの、またかく在らむとはせずしてかく見えむとする者に反對して戒めを止めない。そして最後に宣言するには、「私については、私はイエス・キリスト、十字架にかゝれる彼を知つてゐる、それで私には十分である。」

「完全の鏡」のうちに残つてゐる一つの話は、この時期に屬するもので、そしてフランシスが益なくして害ある書物學問に對する態度を最も明白に説明するのがある。

ある若い新入者^{ノビチオ}はフラテ・エリアから一冊のダビデの詩篇を所有してこれを讀むことを許された。彼がフランシスの心で兄弟たちが學術や書籍に熱心になることを悦ばないことを知つたときに、彼は詩篇をよむときに良心の安けくあるためになほ聖フランシスからこれを所有することの許可を得やうと思つた。彼の願ひに對してフランシスは答へた。

「皇帝シャルル、ローラン、オリギエその他の英雄は多くの汗と勞苦をもつて異教徒と戦ひ克ち、そしてつひに聖とい殉教者となつてキリストの信仰のための軍に死んだ。しかるに今日ではこれらの人々の爲した業を物語ることのみをもつて人々から譽まれと讚へを收めむとするものが多くある。おなじく我々のなかに聖とい人々の爲したることについて説教し、談話するばかりで榮えと尊敬を獲やうとするものが多くある。」

若い新人者はこの答へをもつて満足しなかつた、そしてなほ彼の請ひを主張した。フランシスは目を舉げた、彼は他の兄弟たちとともに火にあたつて身を温めてゐたのである——そして答へた。

「私の子よ、一ど汝は詩篇を持つとつぎには汝は祈禱書が欲しくなるだらう、そして祈禱書を持つと、汝は僧正のやうに高い椅子にすわつて汝の兄弟に「私の祈禱書をもつて来い」と曰ひたくなるであらう。」

不機嫌になつて、そして彼の團體の將來のありさまを憂ひながら、彼は熱い灰のなかに手を入れて、一握みを掬つて、讀書を好む兄弟の頭にふりかけ、そして彼の頭を洗つてやるやうに灰を擦り込んだ、そしてくりかへし叫んだ「私こそ汝の祈禱書だ、私こそ汝の祈禱書だ！」

「兄弟よ、」フランシスはやがていくらか静かになつて再びすわつたときに曰つた、「私もやはり書物を蒐めやうと思つたことがある。けれど私は神様がこれについていかなる御旨であるか知らなかつた、それで私は聖書を取りあげて、神に御心を知らしめ給ふことを祈つた。私は本を開いた、そしてすぐにこのことばを見た、神の國の神秘を爾らには知らしめたまへど、他の者には譬へを以てす。」

フランシスはしばらく無言であつた、そしてやがてまた曰つた、「今日では智慧と學問とを求めむとするものは多い、されば主われらの神を愛するために自ら愚かなる知らざるものとなるものはまことに幸ひである。」

フランシスが彼の生活してゐる時代が殆んど他のあらゆる時代よりもつとも知識を渴望してゐると考

へたことは疑ひもなく誤まりではなかつた。一二〇〇年から一二五〇年まで半世紀のあひだに十七を下らぬ新しい大學の設立があつた——そのうち八つはイタリアのうちであつた(レッジヨ、ギチエンツァ、パドヴァ、ナポリ、ゼルチエリ、ローマ、ビヤチエンツァ、アレツツォ)。これより先に創立された大なる三つの大學、ボロニヤ、パリ、オクスフォードのはこの同じ時に完全な發達を遂げ、そして中世時代の終期の特色である知識學術に於ける力づよい向上は始まつた。この運動には聖ドメニコの派たちは最初から與かつてゐた。それはずでに彼らの聖アウグスチヌス學派から嗣いだ制規に因るのである。今小さき兄弟は時代の傾向に引きつけられるのであつた、そしてこゝに到つてフランシスははじめて斷然たる反對の手段をとつた、こゝで彼は——フラテ・レオネの夢に見えたやうに——翼を延べ爪を張つて團體を掩護する様子を示した。

フランシスの憤りは第一にピエトロ・スタチアとその建てたボロニヤの學舎によつて激された。たしかにピエトロはこれを單獨な手で設けたのではなくて、一二二〇年にボロニヤに来てゐたウゴリノとの協同でしたことであらう、そして彼は必要な建物の登記に於て持主となつたにちがひない。フランシスはたゞちにそこへ旅行した、そして兄弟らに従順の名に於てその家から退去することを命じ——そこに病で臥てゐた一人さへも出て行かなければならなかつた——そして彼自らドメニコ派たちのなかに宿つた。こゝに兄弟らは彼を探し出して、そして贖ひと改めを約束した、たゞピエトロ・スタチアはそのうちになかつた、これをば、つねにはあのやうに溫呼な快活なフランシスは呪詛までしたと曰はれる——この詛ひを彼は死に

至るまで解かうと欲しなかつた。

聖フランスがピエトロによつて害せられたと見たのはたゞ福音による無知のみではなくて——福音による貧しさもまた害せられた、それ故にフランスはかやうにまで強硬であつたのである。もし大いなる美しい、學問の深い、高價な書籍を買ひ、大きな、立派な、高價な家を買つてこれを蓄へるやうになつたときどうして善良な小さき兄弟であることができよう？ 福音のうちにも書いてあるではないか——そしてそれ故に團體の掟のなかにも、「途をゆくとき何物をも携ふること勿れ。」「これらの言葉を私はかやうに解釋するのである。」フランスは謂つた、「兄弟らは一着の衣と帶とする繩と、そして下衣と必要ならば靴とこのほかに何も所有してはならない。」あるとき一人の長は彼に問うた、「如何致しませう、私は銀五十斤よりも多額な書籍を所持して居りますが。」「汝の書籍があるからとて、私は私の導びきと頼んだ福音の書に背かうとは思はない。」とフランスは答へた。それ故彼はあるとき造つた團體のジエネラレたるものの理想的な資格のうちにつきのやうな小さい、けれど必要な一句を加へるのを忘れなかつた——「しかりして彼は書籍蒐集家たるべからず。」

けれどこの戦ひをつけるにはフランスのもつてゐたより強い意志が必要であつた。強い方となつたのは反對側——即ち學問を遠くから尊敬しやうとはせずしてそのなかにみづからたづさばることを欲する人々であつた。レオネの書いたものに信を措いて見ると、エリアとその一味はフランスの書いた掟を無効のものとして、そしてその代りに例へばドメニコ派の掟のごとき研學により多く大いなる位置を與へるものを取り入れやうとする直接な努力さへ企てた。一三二二年あるひは三三年あたりのある集會カピトルのときにこれらはウゴリノをもこの企てに抱き込んだのであつた。フランスはカルチナレの注意深く引き入れる準備の言集を聞いてゐた。答へもなく彼はウゴリノの手をとつて、集まつてゐる兄弟たちのなかに彼を引き出して高い聲で叫んだ。

「私の兄弟よ、私の兄弟よ、主は私に謙だりと無知のみちを旅せよとて私を、そして私に従ひ私を模倣しやうとするものの悉くをお招きなされたのである。それ故に私に向つて聖ベネディクトゥスの掟あるひは聖アウグスチヌス、あるひは聖ベルナルその他のものについて曰つてくれるな。何となれば主はたゞ私が今までかつて類のなかつたやうな愚かな、無智なものであることを欲したまひ、そしてなほ彼は私たちに知識のそれにはあらぬ他の道より往けと曰はれたのである。けれど神は汝らの智慧と學問を恥ぢしめたまふであらう、そして私には彼が懲らしめの司を遣して汝らを罰したまふのが目に見えてゐる、さうして汝らの欲するも欲せざるも汝らは恥ぢてもとのところに歸つてこなければならぬであらう。」⁴

フランスのかやうに知識を恐れたのは正當なことであつたらうか？ 聖使徒はまことに曰つたに違ひない、「知識は空しく誇らしむ、されど愛は徳を建つ。」けれど我々の時代に曰はれたやうにこの言葉は屢ば聖とさとはまつたく違つたあまたのものを隠蔽しなければならぬことはまた眞實である。純粹に、單純

に眞を求め、眞よりほかに何も求めぬこともまた神への奉仕である、そして個人的利害のない眞の探求は人の道徳的存在の全部に強力な、純潔にする感化をもつてゐる。あらゆる眞に向つて心を開いてゐるといふことは實際に於てあらゆる善に向つて開かれた意志の徴である。されば聖使徒が他のところでは「眞の聖ときこと」について語つてゐるのは正當であつて——彼は、意志のなかにある聖とさは思惟のなかにある眞の結果であつて、そしてたゞ眞にむかつての充實せる意志のみが聖境にむかつての充實せる意志であることを知つてゐる。

最もフランスの心の底で悦ばなかつたことは、知識的な誇りと、知識をもつて我の虚榮心を満足せしむる具とするエゴイズムとであらう。彼は人が他より顧みられ敬はれむがために知識をもつて身を飾ることを欲しなかつた。彼はかう感じた——ともに生くる人々のためにたゞひとり人知らぬ洞もしくは山の高い上にある隠栖で、跪びて祈ることは、大寺院のなかで虚榮にみちたたましひをもつてみづからいかなる立派な人であるかを示して立つよりもはるか優つてゐる。

フランスは青年時代の騎士物語から口にされた言ひ方で謂ふのをつねとした。「人なき處に遙かはなれて祈りと静想のうちに棲み、そして自らと他人の罪に涙をながし、無智と謙だりに生くるもの、かやうなものこそ私の圓卓の騎士たちである。何となればこれらの人々のたましひが主のみまへに現はれるとき、主は彼らの爲せる業の結果と報償とを示したまはるであらう、即ちそれは彼らが行ひと祈りと涙をもつて

救つたものたましひである。「わが愛する子らよ」、主は仰せられる、「他のものは彼らの學問を積んだ言語をもつて説教した、けれど私がたましひらを救つたのは汝らの功德によつてである、それゆゑに汝らの働らきの報いと功德の果を、この天なる永しへの王國を受けよ、」けれどもものを知り、そして他のものの道を指すことをのみ心がけて、己れのためには何もしなかつたものどもは、これらは恥しくもキリストの審判の座のまへに赤裸かで空虚で立たなければならぬ。』フランスが一般集會で兄弟らに與へるのを常としたこの説明に、彼はまたサムエル前書(二章の五)からとつた一節を添へるのを常とした、「石女なるものは多くを生みしなり、多くの子をもてる母は衰ふるにいたる。」

祈りとそして總體的な生活とはフランスにとつてはいかなることに拘らず本質的なもの——彼と兄弟らがことにこれに依るべき本質的なものであつた、それは言葉もしくは理論ではなかつた。他の人々はあるひはその各の好める途を行くであらう、彼はそれらを誹りも批評もしなかつた。彼は派手な高價な衣裳を着てゐるものを誹りも批評もしなかつたやうに。彼は彼の知つてゐることはたゞ彼と兄弟たちとはこの世に直かれとてのみ召されたのであるといふことであると信じてゐた、そしてもし彼がつひに——若干の人の考へるやうに——パドヴのアントニウス(これがボルチュガルの大學に於ける修學は知られ、そしてこゝに用ゐられるべきことになつた)にボロニヤに於て兄弟らに神學を教へることを許したとすれば、それはたしかに傳説に存してゐるやうな形で起つたことに違ひない。

「わが最も親しき兄弟アントニウスに兄弟フランスよりキリストに於て挨拶をおくる。爾が兄弟らのために神學を講ずるはわが悦ぶところなり、もし兄弟らこの研學のために掟に定まれるごとき祈禱を廢し、信仰の精神を減ずる等のことなき限りは。さらば。」

フランスのここに引照したのは最後に決着した掟のことで、この規定は第五章に見出される。この章はそのとき掟のなかに存在してしたのであらう、けれど掟は全體としてまだ取り入れられず認められてゐなかつた。一二二三年十一月二十九日に始めてそれは承認されたのである、そしてアントニウスは一二二四年にはすでにポロニヤを去つてモンベリエに赴いた。もし彼の講義が若干の長い時日に亘つたものならば、それはこれよりもつと早くから始まつたので、そしてこの許可が一二二二年にフランスがポロニヤに在つたときに與へられたとするのは正しさうに見える。アントニウスはそのときポロニヤと同じくロマニヤのプロギンスに屬するフォルリの町に留つてゐた。

その上フランスが團體の中の變遷にも拘はらず人々からやはりまへと同じ狂熱をもつて迎へられたこと、そして彼の技巧なき説教が學問の發達したポロニヤの町に於てさへも最深の印象を與へたことは、それを目睹したものゝ物語によつて我々に知られてゐる。トムマソ・スパラットの *Historia Pontificum Saloniarum et Spalatensium* (これは一二六八年より以前に書かれた) のなかにつぎのやうにある。

「同年(即ち一二二二年) マリア昇天節の休日(八月十五日)にあたり、そのとき我はポロニヤに於ける學

生なりしが、聖フランスが市場にてある家の前に立ちて説教し、殆ど全市のものそこに集まれるを見た。しかるに彼の説教の始まりは「天使、人、惡魔」といふ言葉なりき。彼は今美しく巧みにこれら三種の思惟すべき精靈について語りたれば、そこに在りしあまたの學識長けたる人々みなこの不學の人かくのごとく語るを聞きて少からず驚きたり。しかして彼の講演の全題は敵心を去りて和親を生ずることについてなりき。彼の衣は汚れ、外見鄙しく、容貌も美ならず。しかれども神は彼の言葉に大いなる力を與へたまひたれば、幾多の古くより互に敵對し血を流したる貴族の家々はこれに動かされてこゝに和睦を結ぶに至りぬ。しかして人々はみな彼に對し大いなる信仰と尊敬を抱き、多くの男女は群をなして彼のみちを遮りて、彼の衣の端を裂き收め、あるひはたゞ衣の裾にだにも觸れむとせり。」

身親しく聖フランスを見、彼の言葉を聞いた人の書いたこの古い記録をよんで感動せざるを得ない、それには恰かもフランスは最初にこの學識ある聽衆に向つて特に理智ある三種のもの、天使、人、惡魔の三類のごときアカデミックな題テマを選んですこしばかり嚇かしをしゃうとしたやうに見える。けれどまもなく昔のフランスは再び現はれ、説教家は消滅して、残つたのは民衆に語る人であつた。そしてそのときにこそ彼の言葉は神のためにはたましひを掴み、責め、靈能を賦與するものであつた、それは恰かも昔のアシジ、またはアレツォの頃のこと、もしくは彼がグッピオの狼と市民とのあひだを和睦せしめたときの姿であつた。むかしの怨みはレテの書に忘れ水をもて書かれ、暗殺や厄死は記載から抹り消され、そして最近の

流血のうちにも手と手は和睦に握りあつた。そのやうに死に近づいてみたけれどフランスは彼の最初の日にアッシジの市場の階に立つて平和を勧めたときと變らなかつた。彼はなほ大なる王の使者であつた、そして彼の齋らす使命は十五年前と全く同じもの——それはイエスみづからに教へられた挨拶： Dominus dei tibi paxem i. 「主は爾に平和を賜はむ。」であつた。

1. 「完全の鏡」七一
2. 一二二三年に團體の包有せる地域は十二の縣(布教區)に分たれ、その各のを(聖)フランスが院主といふ言葉を用うることを禁じた故に)「縣の僕」(minister provincialis)が代表した。各の縣はより小き區分、custodisにわかたれて、それを「護る人」が代表する。ある處(修道院)の長、代表者は守人と稱する。全團體の長としてはミニストロジェネラレ、(minister generalis 全團體の僕)が立つ、この名はやがて約められて「ジェネラレ」となつた、あだかもミニストロ・プロゲンチアレがたゞミニストロとなつたごとく。
3. 「完全の鏡」四。
4. 同じく、四八。
5. おなじく、七二。
6. Boehmer: Analecten S. 106.

十 學識あるフランシスカンと第三團體

フランスの反對しやうと試みた機運はその枉げがたい改めがたい進路をすゝんだ。小さき兄弟らはま

すますドメニコ派と同じやうな知識ある研究的な團體となつた。

一二一九年のペンテコステの後フラテ・パチフィコとその伴侶らは再びフランスへ往つた、そしてそれは同年六月十一日の日附の法王よりの推薦狀を持つてゐた。このとき彼らの計畫は一二一七年の第一回の旅のときには往かなかつたパリに定住する豫定であつた。フランスの僧職たちは兄弟らが携へてきた紹介の書簡では満足しなかつたと見えて、彼らのことをローマに問ひ合せた。この照會の結果は新たに法王から直接にフランスの高級の僧職に宛てた一二二〇年五月二十九日附の推薦狀となつた。これによつて兄弟らがパリ市外のゼン・ドゥーニーの住家に定住する権利は與へられた。彼らはそこに禮拜堂一つさへ持たず、そして近傍の牧師の會堂で祭式に列なつた。一二三四年になると彼らはセン・ジェルメン・デ・プレに彼らの所有として大いなる修道院を受け、そしてこゝに二百十四人の學生を容れるセミナリーが建てられた。入學志望者の数はまもなくあまり多数になつて、そして屢ばこれらは永い期間を空しく待命簿に載せられて試験を終つた學生の出で往つたのちまで空席のできるのを待つてゐなければならなかつた。

古い典型のフランシスカンたちはたゞ疑ひと不同意の目をもつてこの新しい方向を眺めてゐた。ことにエジディオは俺ますにそれに反對した。絶えまなく彼はいつもの鋭い機智を用ひて聖フランスのまことの子ならぬ學識ある兄弟らに向つた。彼は曰つた、「鳴く羊と草を食ふ羊とのあひだには大なる相違がある、鳴くことは誰にも益をなさぬ、けれど草を食ふのは己れにだけでも益がある。同じやうに説教を事とする

小さき兄弟らと、そして祈りつゝ働らく小さき兄弟らもさうである、そして全世界に教へるよりも自身を教へることの方が千倍も優つてゐる。」

あるときはまたかく絶叫した、「どちらがより富めるものであらう——たゞ小さき園を持ちそしてこれを耕やすもの、あるひは全世界を興へられながら、それをもつて何もしやうとしないもの——多くの知識はそのやうに救はれのみちには役にたゝない、けれどまことに知らうと欲するものは多く働らき、そして頭をなほ低く垂れなければならぬ。」

ある一人の兄弟がエジディオの許に来て、ベルジアの市場で説教するために彼の祝福を受けやうとした。「よし」、エジディオは答へた、「若し汝が説教してこれよりほかのことを曰はないならば、『私の興へるものは大なる叫び聲とすこしばかりの羊毛である』と。」

あるときエジディオは、フランスの死後三十年のあひだ棲んでゐたベルジアの近在のモンテ・リビドの隠栖を出て、すぐ前にある園に入つて行つた。彼は幾人かの労働者が葡萄畑のなかで働かずに話しばかりしてゐるといつて主人から叱られてゐるのを聞きつけた。「Fuite, fuite, e non parlate.」(働らけ、働らけ、そして話をするな、)と葡萄畑の主は彼らに曰つた。これは恰かもエジディオの曰ひたい言葉であつた。彼は室を出て他の兄弟らをつれてきた、「これを聴け、あの人の曰ふことを、働らけ、働らけ、そして話をするな。」またあるときエジディオは鳩が園で鳴くのを聞いてゐた、彼は曰つた、「あゝ姉妹よ、鳩よ、私はおまへか

ら主に仕へる仕方を學ぼう！ 何となればおまへはいつもクワ、クワと曰ふ、そして決してラ、ラと曰はない——私たちが神に仕へるには「ここ」に、この地の上に於てすべく、そして「彼處」、あなたの天の上に於てすべきものではない。あゝ小さい姉妹よ、鳩よ、おまへの鳴く聲は何といふ美しいものなのであらう？ あゝ人の子よ、何故汝は姉妹なる鳩から教へを受けないのか？」

このやうな時彼には恰かもむかしが再び歸つてきて、彼とフランスが神の歌人としてイタリア中を旅した時のやうな感情があつた。この思ひに燃えて、彼は彼の女王なる「貧しさ」としてその妹なるけだかい貴婦人、「純潔」の譽れのために歌をうたひ、そのあひだ彼の作つた花床のあひだを往きつ歸りつして、二本の杖をもつて一つつを他のうへに擦り合はせて并オラを奏でるがごとくにした。

けれど直ちにフラテ・エジディオは彼の追憶と夢みから目をさまし、そしてむかしのたのしき日もはや呼べども返らぬかなたに去り、フランスは死に、そして彼自らは老いて、彼の考へに何人も心をとめぬやうになつたことを見た——それはあたかも彼にとつては太陽が熄えたやうなものであつた、そして彼の園に花はもはや甘く匂ひもせず、そして鳩の鳴き聲は黙したかのやうであつた。そのときフラテ・エジディオは深い長いためいきをついて曰つた、「我々の船は水が洩るやうになつた、それは沈まなければならぬ、脱れられるものは脱れよ。パリよ、パリよ、汝は聖フランスの團體を崩すものだ！」

この歎息は今より聖フランスの子らの最も秀でたものゝあひだに反響を見出した。「パリよ、汝はアッシ

ジを滅しぬ、」とヤコボネ・ダ・トーデイはのちに歌つた¹。そしてエジディオが老年になつてから團體の長、聖ボナゼントラの前に出たとき、彼が第一にこの學識高き人に問うたことはこれであつた、「父よ、我々のとき無知識な、不學なものも救はれるであらうか？」「必らず救はれる、」聖ボナゼントラは懇に答へた。「學ばざるものでも、學べる人と同じやうに神を愛することができたらうか？」老つたフランスカンはまた問うた。「一人のお婆さんは神學の博士^{マキステル}よりもつと神を愛することができ、」これはボナゼントラの答へであつた。そのときエジディオは座を立つて、走つて彼の園の垣から、廣い世界にむかつて叫んだ。「汝たちみなよく聽け、かつて學ばざる、何も讀むことのできない老婆はフラテ・ボナゼントラよりもよく神を愛することができるのだ！」

このアッシジの聖フランススの忠實なる弟子はのちまもなく死んだ。エジディオは彼の師と先に歿つた友のあとを追つて一二六二年四月二十二日——聖ジョルジの祭りの前夜、半世紀よりもつと昔しにアッシジなる親の家の爐の傍らにすわつてフランススについて話を聞き、彼を求めようと決心したと同じ月日にこの世を去つた。永い生涯を通じて彼は彼の青春の日の第一のそして唯一つの愛を忠實に心に守つてゐた²。

學術的方面に於ける團體の發展はフランスカスがイギリスに入つたのち(一二二四年九月十日)一層大いなる衝動を感じた。この傳道はフランスから出かけた、一行の先導となつたのはパリでクストスを勤めたアニエロ・ダ・ビザであつた。兄弟らは最初にカンターベリーに落ちついた、けれどすでに早く一二二四年

十一月一日にはオクスフォードに處を定めた。こゝで彼らは名高い大學の學生や生徒候補者の多數が加はるのを受け入れた、そして研學はイギリスにある兄弟たちのあひだにあつたより大いなる熱心をもつて行はれたことは何處にもなかつた。エックルストンの謂ふには、彼らは例の跣足で長い道を霜や寒氣や深い泥濘をも恐れずに歩いて講義を聞きに行つたのである。同時に彼らはこの上なく嚴重にフランススの貧しさの誓約に従つた、また彼らは家に在つてもフランス風な和樂を味つてゐた、彼らは互ひに逢ふや否や笑みをかはした、そして寺院のなかに在つても、この狂喜の悦びは彼らを擒へて、それがために彼らは純なる樂しさのために合唱の祈禱を唱へることができないことがあつた。イギリスの兄弟らのフランススカニズムはかやうにしてその種の純粹なものであつた、そしてエリア・ダ・コルトナがジエネラレとなつたときに、彼の企てた掟の破壊に對して、學識すぐれたイギリス人なる兄弟アダム・オブ・マーシュほど強固な反對者はなかつた。けれどそれは兎に角學問したものでなければ團體のうちの諸職につくことはできないといふことを定めたのは、やはりイギリス人のエーモン・オブ・ファヴァーシヤムで、一二四〇から四四年までのあひだジエネラレであつたときである。

フラテ・エジディオやフラテ・ジネプロのやうなタイプはかくて殆ど滅びようとしてゐた。そして如何にしてそれがかうならずにあやう、一二二二年のペンテコステ集會^{カネト}には三千の兄弟が集まつた、けれどフランスはすべてこれらのものが最初の十二人の弟子のやうにみな「圓卓の騎士」であるべきことを期待するこ

とができたらうか？ ジョルダノ・ジアーノは彼自身がドイツの傳道に派遣されやうとしたとき、難を冒す神の戦士とはならず、執拗くこれを拒んだことを誇りに記してゐるが、かやうな兄弟らはもはや天つ國にむかつて翔る雲雀ではなかつた、フランスの目は過たずこれらのものが保護の翼に庇を求め、難鳥であることを看取してゐた。

この傾向は同じく第三團體にもつひに現れてきた、これはフランスが既婚の男女のために設立したものである。

トマス・デ・チュラーノの記載を信用するならば、聖フランスはベヅニヤに於て鳥に説教したのちに、オルテとオルギエトのあひだに、トディに近いところのアルギヤノの町に來た。こゝで彼とフラテ・マッセオは市場に足を駐めて、説教をはじめやうとした。けれどその時は日の暮れかたであつた、そして今もアルギアノの古い鼠色の壁や壊れた塔に巢をつくつてゐる燕はあまた輪を描いて飛び交ひながら、休みなく囀つて、庇の下の巢を出たり入つたりしながら悦ばしげな小さい叫びをあげた。フランスとマッセオはいつもの慣はしで彼らの讚美のうた *Timeo et honorate* (神を畏れよ、頌めよ) を歌つた、そして人々は集まつて黙つて待つて歌の終るまで立つてゐた。たゞ沈黙しないのは燕であつた。なほ群は大きくなつて、そして愈よ低く市場の上を飛び交ふときに、その囀りと叫びはつひにそのために何も聞えぬまでに甚しくなつた、そのときフランスは寛大な顔を擧げて極めてやさしげに曰つた、「姉妹よ、わが燕たち、今は私が語る機

會が來たであらう、汝たちは飽きるほど話したではないか。それだから神様のお言葉を聴きそして私が説教するあひだ黙つてゐて聲をたてゝはなりませんぞ。」そして直ちに燕は聲をひそめて、フランスの語るあひだ音をたてなかつた。

『けれどこの奇蹟とそしてフランスの語つた燃えるやうな言葉のために、市の民は悉くフランスに従つて彼の弟子となることを願つた。けれどフランスはこれを抑へて、曰つた、「急ぐには及ばない。私は汝たちが救はれるためにいかにすべきかを定めよう。』」 *Actus beati Francisci* はなほ語る、『そしてこのときから彼は「節制者の」と呼ぶ (*Qui dicitur continentium*) 第三の團體を造ることを考へた。』

一度ならずかやうな場合にフランスは出逢つた。一例を挙げればこゝに一人の村の牧師はフランスのことばを聴いたのち彼の爲すと同じ生活をしやうと思つた、けれど併しながら彼の職業を去ることはしたくなかつた。フランスは彼に教へて、その持つ寺院に留まらしめ、そしてたゞ毎年の彼の受ける寺税を集めたときに、前年の残りを貧しきものに與へることを命じた。これは場合に適應するやうに所有の抛棄を斟酌したものゝある。

またあるときに——フランスがしばらくのあひだコルトナの市に近き隱栖に住んでゐたときに——一人の女が精神上の状態について助言を彼に受けるために遠くからきたことがあつた。「あなたは良人のある人かまたあるひは獨身ですか？」フランスは問うた。そして彼女がすでに結婚してゐると答へたときに

フランシスは彼女と彼女の良人に、節制に於いて生活することを掟てた。

旅をしてゐるあるときにフランシスはボッジボンシの町(フィレンツェとシエナのあひだにあるエルサ河の谷に在る)で若いときから知つてゐたらしい一人の商人ルケジオといふのに逢つた。のちに出たシエナの人ジョヴァンニ・コロムビニのやうに、ルケジオはこれまで頑ななそして富を貪る人であつた、けれどもにはかに思慮を改めた。彼は貧しきものに多くを施し、順禮に宿を貸し、そして寡婦や孤兒を助けた。フランシスは彼の悔い改めには少しの感化もなかつたらしい、けれど彼とその妻ボナドナに一つの生活の掟と贖罪の衣を與へた。このルケジオは彼の閑暇をすべて慈善の事業に送つて、病院にある病者を助け、そしてあるときは一頭の驢馬に藥物を負はせて熱病の猖んなマレマに、その多くの熱病患者を助けるために赴いた。もし家に在るときには、彼は他の所有を棄てたときにたゞ一つ残して置いた小さな園で働いてその果物を賣つた。そしてこの方法が彼に足るだけと與へないときには、彼は出て物乞ひをしやうとした。ボナドナははじめしばらく良人のこの手段に力をきわめて反対したらしい、けれど、ジョヴァンニ・コロムビニの妻と同じく、彼女は奇蹟によつて改心したと傳へられる、そしてのち彼らは互ひの善き協力をもつてともに生きて、一二六〇年の四月二十八日に僅か數時間の差をもつて共に死んだ。

ルケジオを中心として傾向を同じうする一群の人々は集まつた、そして同様にしてこのイタリヤの諸市にも、グレゴリオ九世が *Penitentium collegia* (贖罪者の集まり) と名づけるに至つた組合があまたつくられ

た。上にあつた場合と同様にフランシスがこれらの贖罪者に生活の掟を與へたことは信すべきことである、これはいつも彼にたましひの導びきを乞ふものにしてやつたことである。これらの掟は一つとして存在してゐない、そしてたゞ比較の後期の根據によつて我々はこれらの實際の範圍と内容を推測するのである。

贖罪の兄弟の——テルチアリ(聖フランシスの第三團體の人)といふ用語はのちになつてからできたのである——特徴は彼らが與へられたる浮世の關係に在つて、聖フランシスと兄弟たちの生活方法を模倣しやうとしたことである。彼らはこの世のなかに在つて、けれどこの世のものであつてはならない。彼らは團體に入るとともに、すべて不正によつて得た財産を返して——それは多くの場合にすべても捨てることであつた——そして負債となつてゐる寺院上納を償ひ、適宜の時には遺言を作つて相続者の争ひを防ぎ、特別な、非常の時のほか誓ひを爲さず、武器を所有せず、そして公けの職に就かないこと等を約束した。彼らは貧しい特別なる着衣を纏ひ、そして時を分つて祈りと愛の行ひをした。彼らは一般には家族とともに棲むのであるがときとしては小^{フラトレスミニノレス}さき兄弟のやうに孤獨のなかに隠れるのもあつた。

贖罪の兄弟らは甚だ速やかに公けの権力と衝突することになつた、それは彼らの主義のためであつた。この方面でファエンツァ(リミニの近傍)に起つた事件は印象の強いものである。こゝでは市民は夥しく地方の兄弟團體に加はつた、そして市長が例のごとく彼らの服従を宣誓することを要求し爲政者の命令する場合には武器を執る義務を負はせやうとしたとき、これらは宣誓を拒んだ、即ちかゝる宣誓をなすこととも

に武器を使用することは彼らの守る掟に背むくのであると曰つた。あらゆる手段をつくして強制的に市長は兄弟らを宣誓に強ひやうとした、そして彼らは逼迫の場合にすべてフランス派の友なるウゴリノに助力を乞うた。ホノリウス三世が一二二二年十二月十六日附の文書でリミニの僧正に命じてファエンツアの兄弟らを特別に保護せしめたといふ事實はこのことによつてのみ説明されるべきである。

贖罪の兄弟らと諸市の政府とのあひだの衝突はまもなく全イタリアに擴まつた。一種の處罰として諸市は贖罪の兄弟らに特別な税を課し、あるひはその財産を貧民に頒ち與へることを禁じた。ホノリウスはイタリア全土の大僧正らに贈つた回文(これはいま我々に傳はつてゐない)に、僧職はみな兄弟らの味方として諸市の爲政者に反對しそしていかなる仕方にも彼らに損害を加へられぬやうにすることを命じた。そしてグレゴリオ九世(ウゴリノ)が法王となるや否や彼は相次いで贖罪の兄弟らの敵に對して「全能の神と聖使徒ペテロ、パウロの憤怒」をもつて威嚇した。後のキューカーやアドゼンチストなどよりはもつと幸福な地位にあつたので、贖罪の兄弟たちは、争鬭のたえぬイタリアの諸自由市にあつてすくなくも無武装の特權をもち、そしてある程度まで未來の平和にむかつて道を拓いたのである。そしてかやうにして中世時代の狼らを馴らすことはフランスの——若くは彼によつて創められた運動の功績となつた。

ファエンツアの反目が起るや否や、當然ウゴリノの心に浮んだのはこの散在してゐる兄弟團體を一つのとしてそれ故にもつと強力な全體に纏めることであつた。一二二一年の夏の末彼はまだボロニヤとその近傍

にゐたので、それ故種々の方法でファエンツアの市民と折衝することができた。フランスとウゴリノとはこのとき共同して贖罪の兄弟(ベルナルド・ベッサはすでに第三團體といつた)のために第一の掟を書いてゐたやうに思はれる。聖ボナゼントラの祕書であつたこれの曰ふには、「第三團體は僧職にも、俗にも、處女、寡婦、既婚の男女に平等なり。贖罪の兄弟および姉妹の目的は各の棲家に正義をもつて棲みて信仰の行ひをつとめしかして浮世の誇りを脱るゝことなり。しかしてそのうちには貴とき騎士あるひは世の貴族が賤しき衣を纏ひて貧富の人々に向ひて美しき振舞をなすを見るべく、それによりて人はまことに彼ら神を畏るゝ人々たるを見るを得べし。」

前に曰つたやうにフランスとウゴリノの書いた第三團體の原來の掟は傳はつてゐない。けれどそれはたしかに一二二八年の掟の據りどころであつて(この掟を世にあらはしたのはサバチエの功績である)、この行はれたのはラゼンナ地方のある市、あるひはそれはファエンツアであつたかもしれない。この掟はつぎの内容をもつてゐる——

第一より第五章は服装、斷食、祈禱についての定めである。六章の一は兄弟らの懺悔及び聖餐禮について記す、それらは一年に三回聖誕祭と復活祭とペンテコステとに定められてある。その三は良心に従つて寺院への上納を爲すべきことを教へ、三は武器携帯の禁令を含み、四には誓ひ(政治上の宣誓及び裁判に於ける宣誓は除外例として)を禁じ、五は呪詛と罵詈を止むることである。第七章は團體の會合のこと(毎

月一回、ミサを読み、説教と祈禱がある。第八章、病人について、一週一回は必ず訪問し、肉體の介抱とともにたましひにつきても教誨すべきこと。第九章、團體にて死せる人あらばそのために祈り葬りに列することについて。第十章、一は團體に受け入れられてより三ヶ月のうちに己れの遺言を定むべきこと、二、互に平和を守ること、三、公けよりの壓迫に對する心得（兄弟らの首なるものは僧正に訴ふべきことこの章の五は團體の兄弟または姉妹となることの條件についてである——隣人と争ひあらば和睦し、不義の財産を返却し、負ひめある寺税を支拂ふこと。第十一章、一異教徒を入れるべからず、二既婚の婦人は良人の同意なくして入れるべからず。第十二、十三章は團體の規律の維持についてである、ことに十三章は注意すべきもので、その八、九には、世間の醜聞となり團體の名を傷けたものは必ず集會せる兄弟らにまへでその罪を懺悔し罰を受くべきことが命令されてある。もしその犯したことが甚だ大いならば、犯人は團體から放逐されるのである。十三より十五節には兄弟あるひは姉妹を法廷に訴へることを禁じて、すべての争論は團體の内輪で扱ふことを定めてある。十二節に至つてつひにすべて不正にして得た財産を返すことの命令についての追加が書いてある、もし何人が虐げられたのか、またその人の相續者が知られないときには、公共の觸れ廻し役、もしくは寺院の集會に掲示して、新入の兄弟より損害を被つたものはその主張を申し出すやうに招かれるのである。⁴

1. 「われらのアッシジを亡ぼせるバリは墮つべし、その高ぶる學びもて彼は惡の道を測ればなり。」Jacopone da Todi,

Poesie spirituali, I, lib. I, satira 10. (詩人ヤコポネについては「六合雜誌」四二九號に載せた譯者の叙述を見られよ。)

2. Pater Gisbert Menge: Der selige Aegidius von Assisi, Paderborn 1905.

3. Celano: Vita prima I, XX, 59, 「小や花」十六

4. この掟はサバチエ氏によつてカピストラノなるフランシス派の修道院で發見された。本文はBoehmer: Analekten S. 73—82. にも載せられてゐる。

十一 エリアダ・コルトナと決定せる掟

小さき兄弟の掟についてのフランシスとウゴリノの協力の仕事は第三團體の掟に於ける協力と同じ進路を踐んだ。フイレンツェのマリニヤノの曰ふには、「聖フランシスは靈の感激が彼に謂へるものをウゴリノに語り、しかしてカルチナレは親らこれを書き下し、しかして若干のことを添加したり。」

Legenda antiqua に載せられたある話はウゴリノの影響と彼がとり入れた改訂についての敘述をもつてゐる。例へば、フランシスはもし長たち^{ミニストロ}が兄弟らの掟を文字通りに、言葉どほりに守ることを注意しない場合には、兄弟らは自由に、ミニストロたちの意志に反對しても掟に従ふことが許される、といふことを掟のうちに入れようと欲した。このやうな許しをフランシスはかつてケザリウス・オンスバイエルに與へたためしがある、ケザリウス一人、あるひは心を同じうする他のものと共に、フランシスの祝福と許可をも

つて掟に忠實ならざる兄弟たちより離れて「註釋なしに文字通りに掟に従ふ」のは自由であつた。

疑ひもなくフランスはこの規定によつて、知識と貧しさの問題に關して一般の潮流とゞもに行かうと欲しない兄弟らのために脱げみちを開かうと欲したのである。ウゴリノにはかやうな許可は明白に團體を分裂せしめ解散せしむる道であるやうに見えた。けれどフランスは掟のなかに必要なこの許可を抱合しなければならぬことを辯じた、それについてウゴリノは曰つた、「それでは私は言葉の意味は變へることなく、たゞ曰ひ現はし方を改めるやうにしやう。」フランスはこれを同意した、けれど實際掟に現はれたものは彼の思想のきわめて薄弱な寫しであつた。

聖フランスの解釋では、掟はミニストロより高いものであり、そして服従の誓ひはミニストロに對するのではなくて掟にむかつてなされるものである故に、兄弟らは掟を文字通りに遵奉するために必要な場合には彼ら上長の命を背くことは許されるのみならず、服従の名に於て命令までされるべきものであつた。ウゴリノの書き下したのものには、けれど、フランスがまことの子とし、ケザリウスのごとく彼の祝福を受けた兄弟たちが、一種の拘泥者として、ミニストロたちは熟慮をもつてこれらを戒め説諭すべきものとされた。聖フランスの目に善意をもつた戦士であつた人々はウゴリノの目では病者となつたのである。

ウゴリノに加ふるに、フラテ・エリアもまた團體の代理者として掟の決定の形については大いなる勢力をもつてゐた。この證明はフランスが一二二二——二三年の冬に彼に與へた一つの書簡にある。

エリアは公然とフランスに赴いて若干の兄弟らを訴へ、そしてそれらの匡正についての意見をもつて往つた。フランスはまつたく彼の平生の思想の傾向からかやうに答へた。

「我はわが能ふかぎりをもつてわが思ふことを汝に告げむ、即ち、兄弟らまた他の人々汝に背くとき汝はこれをたゞ恩寵なりと思へ、……汝はそのことが正しくして變更すべからざるものなるをねがふべきなり、我はたしかに知る、こゝにまことの従順あり。しかして汝に抗するものを愛せよ、しかして彼らにむかつて汝が主より與へらるべきものゝほかを願ふこと勿れ。しかしてこゝに汝の愛を示すべきは、汝は彼らよりよき信徒たることを願はざることなり。しかしてこのことは汝にとりては隠者となるより優れり。」

あらゆるものを神の手よりとして受け入れ、こゝろよからぬ周圍よりも身を退かず、あるひはひとり自らが善くあらむために同じく生くる伴侶のより善くあらむことを願ふことを欲せざるこの愛の深い精神からフランスはまた他の問題——それは彼とエリアとのあひだに屢ば演ぜられたに違ひない——をも取り扱つてゐる。それは罪に墮ちた兄弟らをいかにすべきかの問題であつた。エリアは隣人を匡ふことに急なる性質から勿論苛酷な手段を欲してゐた——「粗い木には荒い鋸を用ゐよ」と情けもない民衆の正義はいふ、フランスはこれに反して、かう書いた。

「汝が主をしかしてわれを、主の僕にして汝の僕なるわれを愛するごとく、つねに汝は全世界の兄弟らの一人として、たとひ彼いかなる罪を犯せるものなりとも、いかなるときにも、赦しを乞はゞそを與へずし

て去らしむることなきやうにせよ。もし彼赦しを乞はざるときには、彼赦しをねがはざるやを問へ。しかももし彼千度も罪を携へて汝の目前に来るとも、却つてますく彼を愛し汝がわれを愛するよりも愛して、彼を主のもとに引くことを思ひ、つねにかゝるものに對して慈しみあるべし。」

「掟にあるところの、恐しき罪人どもについて書かれたるすべての章について、我らは主の助けによりベントコステの集會にあたりて兄弟らとともにつぎの一章を設けむと欲す、即ち『もし兄弟にして惡しき敵に誘はれ、罪に墮つるものあらば、彼はそれを彼の守人グアルディアヌスに啓くべし。しかして彼が罪を犯せることを知れる兄弟らはみな彼を恥ぢしめまたは責むべからず、たゞ彼に大いなる慈愛を示し、彼らの兄弟の罪を隠すべし、何となれば、醫師に赴くを要するは健康なるものにあらずして、病ひに悩むものなればなり。同様にして彼らは彼を一人の伴侶とともに保護者のもとに遣はすべきなり。しかして保護者は情深く彼を助くること、恰かも彼自らかゝる場合にありてしかせられむと欲することくなるべし。しかしてもし兄弟輕き罪に落つることあらば、彼はそのことを兄弟らの中に牧師なるものに告ぐべし、しかしてもし牧師在らざるときには、彼の兄弟に知らしめてこれが牧師を伴ひ來るを待ちてまことの滅罪アブソルチオネを與へられむ、されど罪をなせるものには、『往けしかしてもはや罪を爲さざれ、』このほかに贖罪を課すべからず。」

「しかれども汝が更によくこの書簡の旨を行ひ得るために、復活祭までこれを保持すべし。そのとき汝は汝らの兄弟とも在るべし、しかしてそのとき主の助けによりて我らは掟に闕けたるものすべてにつき

て手段を備ふるを得べし。」

フランススの書いた物のうちで彼の性格の限りないやさしみと思慮ふかさについてこれよりも強い印象をあたへるものは多くない。彼はかすかに燃える燈心を消さず、そして撓める蘆を折ることをしなかつた。もし我々がフランススの指した一二三年のベントコステの集會に於て定められた掟を見れば、彼の欲したことから極めて僅かしか残つてゐないのを見て我々は殆どおどろくばかりである。それはかやうに簡單にそして味ひもなく書かれてゐる――

「兄弟らのうち惡しき敵と呼ばれ、死すべき罪に墮つるものあり、しかしてもしその罪はたゞ布教區プロウケンチアのミニストロによりてのみ決定せらるゝを得るものならば、彼は直ちにその區のミニストロのもとに赴くべし、しかしてもしそのミニストロが牧師なるときは、これは彼に贖罪を云ひ渡し罪の消滅を宣告することを得べし、もし彼が牧師ならざるときは、彼は團體にある他の牧師をして主に仕ふるに適せる贖罪を課せしむべし。しかしてミニストロは他の人の罪によりて怒りあるひは憤りを起すことなからむことを思ふべし、何となれば怒りと憤りはキリストの愛を妨ぐればなり。」

これは正しき寺院法律の一式となつて、それにどこか他の場所に屬する戒めの若干を添へて、それをこにつけてフランススがある程度までなだめやうとした。そしてフランススの手紙の福音的な深刻な愛はすべてどこへ往つたのだらう？――頑なな、あるひは恐らくは反抗的な罪人に面とむかひあひながら、あ

はれた幸なきたましひのために心の奥より憐れみにうごかされて、そして罪人に行き、そしてその頸を抱いて彼の耳にさゝやいて、「兄弟よ、いとしい、いとしい兄弟よ、おまへはそれでも赦されを乞はうと思はないか。」と問ふ彼の愛はどこへ往つたらう？ フランススの言葉のなかに、兄弟らの一人として罪人に石を投ずることなく、人々はみなその過ちを黙だし、そして彼ら自らがあるひはやがて必要となるときに助けられたいと思ふほどに彼を助くべく、そしてもし軽き罪 (Pecatum veniale) ならばイエスが罪ある女に「往けしかしてもはや罪をなさざれ。」と曰つたことばのほかにも何も曰つてはならない、と教へたことはどこに残つてゐるのであらう？

フランススの書いたことが抹殺されあるひはその面影も止めず改竄されることは屢ばであつた。彼が祭壇の聖禮を尊ぶ心から、彼は兄弟らをしてもしも一片の紙でも、その上にミサの聖文が書かれ、あるひは神または主といふ字でもあるときに、それがふさはしき處に置いてないときには、その紙を尊敬をもつて拾ひあげ、尊敬をもつてこれを保存せしめることを定めやうとした。このかぎりなく美しいデリケートな敬虔を——聖という言葉がふさはしからぬところに置かれてあるのを見るに忍びぬ敬虔を、團體を率ゐる人は兄弟らに公けに傳へなかつた——フランススにその申し出た理由は、このやうな命令を守るべきことは彼らに煩はしいであらうといふのであつた！ 彼と最初の彼の友だちに一たびあのやうに力つよい印象をあたへた福音の言葉——ポルチウンクラの聖マタイのミサに於て彼に語られ、そしてのちにふたゝびク

キントヴルレのベルナルドとともに読み出したことば、即ち、「旅するとき何物をも携ふることなかれ、杖も、行囊も、パンも、金銭も。」といふことばが、彼の最後に兄弟らに與へるべき掟に入れることを許されなかつたのは、彼にとつては殆どたましひの眞個の悲痛であつた。これは情も容赦もなく省略された、そしてフランススの謙れる心とはいへこれは恐らくは彼にもつとも忍びがたいことであつた。これらの聖書のことばの眞中を抹してゆく線はフランススの心に針のやうに徹つて行つた、彼はあたかも彼の生涯の目的とし、それを實現するために彼の生涯をさゝげたものは今たゞ脳髓の蜘蛛の巣、誇張された理論にすぎないと宣告されたやうな心ちがした、そしてそれも彼にもつとも近く立ち、そして彼の事業を繼ぐべき人々によつてされやうとは！ この時より最期に至るまでフランススは、彼の忠實な友レオネが曰ふやうに *erant prope mortem et graviter infirmabatur* 致死の病ひを負ひ、死の傷を負へるものであつた。

大きな繪にかいたやうに、後の傳説はフランススとその反對派との抗争の追憶を書き傳へてゐる。「完全の鏡」に、そしてクルラード・ド・フィダによつてつぎの話が聞かれる——フランススは斷食と祈りをもつて、團體の掟に仕上げの筆を加へるために、リエティの谷なるフォンテ・コロムボの隱栖に赴いた、そして彼はレオネとボニチオを伴侶として擇んだ。

『しかしてフランススは他の人々より石を投げて達するばかりなるところに山腹の窟に在り、しかして祈りのうちに主彼に示したまへることを、彼は彼らに語りぬ、しかしてフラテ・ボニチオこれを口授しレオネ

は寫せり。

しかるにフランス新しき掟を書きつゝありと聞きてイタリアなる兄弟らすべてのあひだに大いなる動搖起りて、ミニストロたちは互に煽動したり。しかしてイタリアに在るものはみなその時代理者なりしフラテ・エリアに往きて曰ひぬ、「我らはきけり、フランスは新しき掟を造りつゝありと、しかして我らはそのあまり厳しくして従ひがたきを恐る。何となれば彼は自ら守ること甚だ峻しければ、我らの爲しがたきことをも容易^{たや}すげに命令するなり。されば法王がそを承認せざるまへに行きてこのことを語れ。」

そのときエリアは彼ひとり行くを欲せずと答へたり、しかして彼らはみな往きぬ。彼らその處に近づきしかば、エリアは呼ひぬ、「主は讃むべきかな、」そのときフランスは出で來りて彼らを見、フラテ・エリアに問ひぬ、「これらの兄弟は何を欲するや？ 何人もこゝに來るべからずとすでに曰ひしにあらざや。」エリアは答へぬ、「こは爾が新しき掟を書けりと聞きたるイタリアなるミニストロたち悉く來れるなり、いま彼ら曰く、汝は掟を我らの従ひ得ることく書くべし、もしかくのごとくせざれば、彼らはこの掟をもつて繋かれざるべく、しかして汝はそれをたゞ汝自らにのみ書き與へ彼らのためにせざるを得べし。」

そのとき聖フランスは聲をあげて叫びぬ、「おゝ主よがために答へ給へ！」しかして彼らはみなキリストの聲を空に聞けり、その曰ひけるは、「フランスよ、汝の掟のうちには何ものも汝のものなるはなしとゞそのなかにあるすべては我がものなり、しかして我は掟が文字通りに遵奉さるゝことゝを欲す、文字

の通りに、註釋することなく、註釋なく、註釋なく、しかしてこれに従はざるものは何人にもあれ團體を去るべきなり！」そのとき聖フランスは兄弟らに向ひ、曰ひぬ、「汝らこれを聞きしか？ 汝らこれを聞きしか？ 若しくは汝らに再び曰ふべきや？」しかれどもミニストロらは恐れをなして歸り去れり¹。

この物語はカザレのウベルテイノにも見出されるが、これは明らかに一二三三年に法王から承認された掟のことではない。私は私の「順禮記」にフォンテ・コロムボについて書いた頃（一九〇三）にこの結論に到達したのである。そして私はそのなかでこれについてはげしくポール・サバチエ氏と議論した。上に引いた物語に曰はるゝ掟、キリストが現はれて承認したといふものは、まったく明瞭に一つの以前の掟であつてそれは即ちボナゼントウラの書いた傳記のなかにも語られて、フラテ・エリアがそれをフランスから受けとつて、そしてまもなく彼はそれを紛失したと言明したといふそれである。このうちフォンテ・コロムボの新しい滞在でつくられた掟こそホノリウス三世が一二三三年十一月二十九日に承認したもので、そしてそれをフランスは兄弟らを騒がせることを恐れそして彼らと争ふことを欲しなかつた故に書き、彼はよりよき確信にはそむきながら彼らに讓歩し、そして己れを神のまへに謝したのである。そして彼が宣べ傳ふべく與へられた主の御言葉が果を結ばずにゐないためには、彼はみづからそれに従つて生活し、そしてそこに彼はつひに安息を見出し、それをもつて自ら慰さめた²。

上記のことは恰かもローマで承認された掟はまつたくフランスカンの痕を止めぬものであつたといふ

やうに解釋されてはならない。却つて我々はもし他に何も知らず、その變更についてすこしも暗示をうけず、にみたならば、我々はこれがフランス自身の手で書かれた掟ではなからうなどとは思ひもよらなかつたに違ひない。そのなかに我々は聖フランスの特徴である、まったく本質的な主張を見出だす、その著しいのはまづ緒言プロローグのなかに「福音に従ひて、従順と貧しさと純潔とに生くべき」つとめである。そして十二の章のあなたにあなたに(聖フランスは十二使徒を尊ぶことから掟をそれに準へて十二に分けた)まことのフランスカンの主義は見出される。かやうにして我々は第四章には絶対に金銭を受くることを禁止したことを引き、そして何物をも所有せぬことは第六章に、労働の命令は第五章に、恥づることなく乞ふべきこと(第五章)質素なる衣服を用ひ、その破れは糞の布地あるひは他の襤褸をもつて綴ることができ、そして兄弟は貧しさの誇りをもつことなくこれらの美服を着て奢つた幸福な生活をするものを審判してはならないこと(同じ章)をこゝに引くことができる。兄弟らが世を旅するときには彼らはあらゆる人に對して温和に、謙遜につまじやかに、親しくなくてはならない。彼らはお互に争つたり、何人をも審判してはならない。彼らが一つの家に歩み入るときには、その挨拶は *Pax hinc domini* (この家に平和あれ)といふべく、そして彼らのまへに置かれたものは、福音に従つて、彼らは食ふことを許されてゐる(第三章)。兄弟らはもし處の僧正が反對したときには説教してはならない(第六章)。彼らは尼の修道院に立ち入つてはならない(第十一章)。僧職なるものはローマ教會の慣例に従つて儀式オフィチウムを勤めること、けれど在俗の

兄弟らはたゞ「我らの父パテルノス」を唱へる、(第三章)。讀むこと能はざるものはそれを學ばざるをよしとする、彼らは此處に入つた目的は何よりもたゞ、あらゆる誇り、あらゆる虚飾、あらゆる嫉み、あらゆる悪名と愁訴、あらゆる欲、あらゆる浮世の憂ひを去つて、主の聖靈を受けて神のための労働をなすことであつたのを心に記憶し、つねに純い心から彼に祈つて壓制あるひは病患にも、謙だりと忍耐とを保ち、そして己れを憎み、苦しみ、逐ふものを愛することを忘れてはならない、何となれば「汝の敵を愛し、汝を虐げ、汝を苦しむるものゝために祈れ、」と主は曰はれた、「義しきことのために虐げを愛くるものは幸ひなり、天の國は汝のものなればなり、しかしして終りまで忍ぶものは救はれむ。」(第十章)。

かやうにして種々のことに關はらず、今に至るまで小さき兄弟らの掟のなかにフランスがこの世に來て點した聖といふ火の焔がもえてゐる、今日までもそしてあらゆる時のあひだを通じて、最も善き、最も尊といふフランスカンはその生涯をさゝげてこの焔の純潔を守つた。 *sine glossa, sine glossa* (これらのフォンテ・コロムボでキリストがエリアに曰はれた言葉は彼らの戦ひの叫びであつた——「註釋なく、説明なく」、彼らは彼らにとつては「生命の書であり、救はれの希望、福音の核心、十字架の道、完全の状態天國の鍵、永しへの生の最初の味ひとその質である」)とこのこの法律に従つて生きることを欲した。數世紀のあひだに相踵いでフランスの再生であるかのごとき人々は現はれた—— *ジョヴァンニ・ディ・バルマ、ウベルテ・ディ・カザール、ピエトロ・ジョヴァンニ・オリゴイ、アンジエロ・クラレノ、ジャンティレ・ディ・スポレト、バ*

オロ・トリンチ、シエナの聖ベルナルディノ、マッテオ・ダ・バシ、ステファノ・モリナらはそれである。再びまた再び踏足の兄弟らの群れはこれらの粗い褐色の衣に腰には繩を結んだ人々のまはりに集まり、そしてフランスとその最初の兄弟らの住んだ古い隠者小屋に赴き、そしてそこでむかしの半ば忘れられた掟の章々を歌へば、それは恰かも新しい、かつて聞いたことのない歌のやうに、彼らに「世界を順禮のごとく旅人のごとく、この地の上には最も高き貧しさの失はれざる寶のほかは何物をも所有せずして旅する」(第六章)ことを教へる。それはボルチウンクラとリヴォルトの響きが繰りかへしくりかへしひびいてその惹きつける力を加へるのである。そしてシュトラスブルヒの壘壁の上にあつてラインの彼方の岸でうたはれる己のが幼なき日の *Kuhreigen* (牛飼ひの歌)を聴くスウキツル人のやうに、小さき兄弟らは彼らを妨ぐるあらゆるものを抛げすて、急流を泳いで祖國と故郷へ渡らうとする……

1. 「完全の鏡」一。

2. 同じく、二。

3. 同じく、七六。

十二 最後のローマ行きとグレッツチオの馬槽

フランスは掟について法王の承認を受けるために一二三三年の末にローマに行つた、そしてこのときウゴリノは大いに彼の便宜を計つた。「われ未だ低き職にありしとき、われは聖フランスと、もに在りて掟を書きしかして法王より其保證を得たり、」と彼は法王となつてからのち一二三〇年に自ら謂つてゐる。

この滞在のあひだにフランスが再び「フラテ・ヤコバ」、ヤコバ・デ・セツテゾリを訪れた事は疑はれない、彼女は一二一七年に寡婦となつたのである。彼女は、フランスが彼自らの懺悔に曰ふことによれば彼女顔を知つてゐた二人の女性(一人は聖キアラである)のうち一人であつた¹。彼女の家のなかでは彼は寛いで歡待せられてゐた、それは彼のベタニヤであつて、ヤコバは同時にマリアとマルタであつた。彼女は彼のために好きな食物を調理した——中にも巴旦杏のクリームは彼が最後の疾患のときにも思ひだしそして味ひたいと願つたものであつた。その返禮として彼は彼女に、まつたく彼の心の特徴を示す贈物を與へた……彼は屠場に曳かれる小羊を見るに堪へなかつた、それは彼にはゴルゴタに往くイエスを思はせた、そして彼はつねにもし能ふときにはそれを救けることを試みた。かやうにして彼はマルカダンコナであるとき一人の商人を見つけて小羊を買ひ取らせ、そしてそれを携へてオジモの僧正のところへ行つた。フランスは多くの言葉を費したあとではじめてこの僧職に何故彼がこんな行粧で出てきたのか解らせた、そして小羊はそのときにサン・セゼリノの尼たちに贈られた。その毛からのちに一着の僧衣ができた、そしてそれはつぎのペンテコステのときにフランスのところに贈られた。またあるときにはフランスは一

人の農夫が昇いで行つた二頭の小さい小羊の身の代として上衣を脱いで與へた。『何となれば小羊の啼けるを聞きしときフランシスの心は動かされ、彼は行きて、泣く子を慰さむる母のごとく彼らを愛撫し慰さめたり、しかして彼は農夫に向ひて曰ひぬ、「何故なれば汝はかくまでわが兄弟ら、小羊らを苦しむるや？」しかるに農夫の答へけるは、「我はこれを携へて市場に行きて賣らんと欲す。」「しかしてそれを買ひて何にするや？」「これを買ふ人はこれを殺し食するなり。」「かゝることあるべからず、」とてフランシスは直ちにこれを買ひとりたり。』ポルチウンクラでも彼は永いあひだ一頭のよく馴れた小羊を養つた、それはどこへでも彼のあとに跟いて、寺院のなかへまで行き、そしてそのやさしく鳴く聲は兄弟らの歌に聲を交へた。また同じ様にしてローマでも、フランシスは一頭の小羊を獲て、それを別れるときに彼はヤコバに贈つた。彼女の家のなかでそれは永いあひだ生きてゐた、そして物語には、それは彼女とともに朝のミサにも行き、そして彼女がはやく起きないときには、早く寺院へ行きたさに、馴々しく角でつゝいて彼女を覺ましたといはれてゐる。その毛を採つてヤコバは紡いで、一着の衣を織り、それを彼女は一二二六年の秋にポルチウンクラに携へて行つた、そしてそれを着てフランシスは死んだ。

たゞヤコバ・デイセツヅリの懇なもてなしのみならずフランシスはまたカルチナレたちの客となつた。この方面では彼は他の兄弟たちの例に従つた。すでに團體の發展の初期にあつて、幾人かのカルチナレたちは己れの許に小さき兄弟を留めやうとした、それは「決して使役、あるひは任務のためにあらずして、

たゞ彼らが兄弟の聖とさについて抱ける敬虔のため」であつた。このやうにしてフラテ・エジディオはしばらくのあひだカルチナレ・ニコラウス・キアラモンティ(第二章の四)の許に棲み、フラテ・アンジエロ・タンクレディはカルチナレ・レオネ・ブランカレオネのもとに住んだ。小さき兄弟を客とすることは法王朝廷の敬虔な流行の一つともなつた、そしてトマス・デ・チエラノはのちにこれらの「宮廷兄弟」(Frater Palatinus)の懶惰と奢侈の生活を鋭く攻撃してゐる。

フランシスの性格にはかやうな宮廷兄弟となる素質が缺けてゐた。ウゴリノの家に在つて彼は外へ出て己のが食べるものを乞ひ受け、そしてかうして得たパンをカルチナレの食卓に持ち出すことを決して忘れなかつた。そして彼が、家内の生活を好むやうになつたフラテ・アンジエロとともにカルチナレ・レオネの家に入り、そしてカルチナレが隠れ家として適當であると曰つて與へた寂しい塔に住むや否や、主の刑吏、悪魔の責苦は第一の夜に來てフランシスの上に落ちた。

『しかるに翌る朝フランシスはフラテ・アンジエロに曰ひぬ、「何故に悪魔は我を鞭打ちしや、しかして何故に主は彼らに我に優る力を與へたまひしや?」悪魔はわれらの主の刑吏なり、何となれば市長が悪を爲せるものを罰するためにガスタルディ(ロムバルディアの諸侯の意)を遣はすがごとく、主もまた悪魔なるガスタルディをもつて、彼の愛したまふものを懲らしめたまふ。何となれば主はこの世にて一事をも罰せざることなきはまことにその人を愛したまへばなり。しかしてわれは心にかたく思ふ、神のめぐみによりてわれは罪を犯して、そ

のためにわが過ちを懺悔し改ためて償ひをせざりしことなし。しかれどもこの懲罰は、我がカルデナレの招きを諾ひたるによりて遣されたるものならむ。何となればもしわれこれを諾ふことを許されたりとも、わが兄弟らそのことを聞くべし、彼らは異國に彷徨して饑餓またはあまたの患ひに苦しめるなり、しかしまた隠栖または貧しき小屋に棲める兄弟らもこれを聞くべし、しかししてそのとき彼らはわがことを快からず思ひてかく曰ふならむ、「我らかく苦しめるとき彼は安逸にあり！」何となればわれは兄弟らに善き模範として與へられるたなり、しかししてもしわれ彼らとともに彼らの貧しき小さき家ならば、そは更に大なる建徳のためなるべく、しかししてもし彼らわが決して彼らよりもよきものを得ざるを見れば、彼らはおのれの運命を更によく堪へ忍ぶならむ。」

その日にフランスはカルデナレとその塔に別れをつげた、そしてそれは刺すやうに寒い十二月の頃で、雨は殆ど小止みなくローマの空から注いだけれど、彼を引きとめることはできなかつた。ポルタ・サララは忽ちあとになり、フランスは北に向つて、泥深い道を、疾風を冒して降りそぐ雨のなかを歩んだ。うす黒い空と雨にも拘らず彼の心はたゞちに日の光にみちわたつて、彼は思はずも歩みを早めて進みなつかしいリエティの谷を見、再びフォンテ・コロムボの忠實な兄弟たちのなかに在るのをうれしんだ。

そして今他の慰安は彼をあなたに高く荒いサビニの丘のあひだに待つてゐた。

聖地の旅とベトレヘムのおとづれのと時からフランスは聖誕祭について特別な愛をもつてゐた。ある

年この祭りは金曜日に重なつた、そしてフラテ・モリコはこの理由で聖誕祭に肉を食べてはならないといふ意見を兄弟たちに提議した。「今日がクリスマスならば、今日は金曜日ではない。もしこの壁が肉を食べることができたなら、私は今日はそれを食べさせてやりたい、けれどそれはできないから、私は少くも壁の面を肉で擦つてやらう。」フランスは斯う答へた。彼は屢はこの日のことについて曰つた、「もし私が皇帝を知つてゐたならば、私は彼に願つて、この日には何人もみな穀物を鳥に投げ與へ、ことに我々の姉妹なる雲雀に與へ、そして人々はみな飼つてある獸に、秣槽に生れた聖子イエスの愛のために特別によき糧を與へることを命令させたいと思ふ。そしてこの日に富めるものはあらゆる貧しきものを宴に招いてもてなさなければならぬ！」

一二三三年にフランスは自らクリスマスを、世界にかつて類例を見ない方法で祝ふことを企てた。グレッチオには彼は一人の友でそして助力者である人を知つてゐた、それはメッセル・ジョヴァンニ・エリタといつて、彼と兄弟たちに住家としてグレッチオの上なる木の繁つた峯を與へた。フランスは今この人をフォンテ・コロムボに招いて、そして彼に謂つた、「私は聖といクリスマス夜のあなたとともに祝はうと思ひます、そして私が考へついたことをよく聞いて下さい。修道院の傍らの森のなかに一つの洞穴があります、そしてそこにあなたは藁を入れた一つの秣槽を備へて下さい。そしてあだかもベトレヘムであつたときのやうに一頭の牡牛と一頭の驢馬を繋がなければなりません。私は一たびでも神の御子の地上に來られたこ



祭誕聖のヨチツレグ
作ネードンボイデートツヨジ

とを厳そかに祝ひ、そして目のあたりに彼が私たちのためにいかに貧しく憐れむべきものとなられたかを見やうと思ひます。」

ジ・ヴン・エリタはフランスの請ひをすべて果した、そしてクリスマスの前夜にフォンテ・コロムボの兄弟らと近在の人々は来り集まつてクリスマスの祭りを祝つた。人々はみな炬火を點して、そして秣槽のまはりに兄弟らは蠟燭を携へて立つてゐた、それで暗い櫛の森の天井の下でも晝のやうに明るかつた。秣槽を祭壇としてミサが讀まれ、そしてそれとともに神の子はパンの葡萄酒の形のもとにみづから現はれ、ベトレヘムの厩であつたときのやうに肉體をそなへて、目のあたりに來るのであつた。しばしジ・ヴン・エリタには彼はまことの幼児が秣槽のなかに、死せるものかまたは眠れるもののやうに横はつてゐるのが見えるやうであつた。そしてフラテ・フランチェスコは進み出て幼児を愛らしく腕に抱きあげると、幼な兒はめさめてフランスにむかつて微笑み、そして小さな手をあげて彼の鬚の生えた頬や、粗い鼠色の衣を撫でた。そして、けれどこの幻はジ・ヴンにはふしぎではなかつた。何となれば、イエスは多くの心には死ねるものあるひは眠れるものであつた。そしてフラテ・フランチェスコはその言葉とその行ひをもつて再び神の子を甦らせ、または眠りよりさましたのであつた。

福音の書から讀誦されたとき、フランスは輔祭の服装で進み出た。「深い歎息をなし、敬虔の高潮に抑へがたく、不可思議の歡喜に満ちて、神の聖とき人は秣槽のほとりに立つた、」とトマス・デ・チラノは曰ふ、



祭誕聖のヨチツレグ
作ネードンボイデートツヨジ

とを厳そかに祝ひ、そして目のあたりに彼が私たちのためにいかに貧しく憐れむべきものとなられたかを見やうと思ひます。」

ジョヴァンニ・ゴッティはフランシスの請ひをすべて果した、そしてクリスマスの前夜にフォンテ・コロムボの兄弟らと近在の人々は来り集まつてクリスマスの祭りを祝つた。人々はみな炬火を點して、そして秣槽のまはりに兄弟らは蠟燭を携へて立つてゐた、それで暗い櫛の森の天井の下でも晝のやうに明るかつた。秣槽を祭壇としてミサが讀まれ、そしてそれとともに神の子は、パンの葡萄酒の形のもとにみづから現はれ、ペトレハムの厩であつたときのやうに肉體をそなへて、目のあたりに來るのであつた。しばしジョヴァンニ・ゴッティには彼はまことの幼児が秣槽のなかに、死せるものかまたは眠れるもののやうに横はつてゐるのが見えるやうであつた。そしてフラテ・フランチェスコは進み出て幼児を愛らしく腕に抱きあげると、幼な兒はめさめてフランシスにむかつて微笑み、そして小さな手をあげて彼の鬚の生えた頬や、粗い鼠色の衣を撫でた。そして、けれどこの幻はジョヴァンニにはふしぎではなかつた。何となれば、イエスは多くの心には死ねるものあるひは眠れるものであつた。そしてフラテ・フランチェスコはその言葉とその行ひをもつて再び神の子を甦らせ、または眠りよりさましたのであつた。

福音の書から讀誦されたとき、フランシスは輔祭サコフの服装で進み出た。「深い歎息をなし、敬虔の高潮に抑へがたく、不可思議の歡喜に満ちて、神の聖とき人は秣槽のほとりに立つた、」とトマス・デ・チェラノは曰ふ、

「しかして彼の聲、彼の強き聲、やさしき聲、きよき聲、鳴りひびく聲は、人々をみな最高の善を求めよと招いた。」

フラテ・フランチェスコは御子イエスについて説教した。「甘美の味ひの滴たる言葉をもつて、彼はこの夜に生れた貧しき王、ダゲデの都に於て主イエスたる君について語つた。そしてイエスの名を口にせむと思ふときごとに、愛の火は彼を抑へがたくみたして、彼はその代りにベトレヘムの御子とのみ曰つた。そしてベトレヘムといふ言葉を彼はあたかも小羊のやうな聲をもつて曰ひ、そして彼がイエスの名を曰ふときには、彼はこの名が唇をすぎてゆくとき残した甘さを味はうとするやうに、唇の上に舌を滑らせた。聖とい通夜は夜更けまでつゝいた、そして人々はみな歡びを抱いて家に歸つた。」

けれど後になつてこの秣槽の置かれたところは主のために堂として獻ぜられ、そして秣槽の上に一つの祭壇をば、我らの祝福されたる父フランシスの光榮のために建て、かくしてもいはいはぬ獸が槽から秣をたべたところに於て、そこで人々は今きよき汚れなき小羊、語りがたき愛の故に世界の生命のために己の血を與へたまひ、父と聖靈とともに永しへの神聖なる光榮のうちに生きいつまでも統治したまふわれらが主イエス・キリストを迎へ、彼らのたましひと身の救はれを得るところとなつた。

1. Celano : Vita secunda III, c. 55.

2. Celano : Vita prima. I, XXVIII, n. 27. 79.

3. 「完全の鏡」二三。
4. 同じく、六七。聖フランシスの悪魔に対する関係についてはなほ、「完全の鏡」五九を見られよ。
5. Celano : Vita secunda II, 151. 「完全の鏡」一一四
6. Celano : Vita prima, I, CXXX.

第四編 隠者フランシス

Corpus est cella nostra, et anima est qui moratur intus in cella ad
orandum Dominum et meditandum de ipso.

Speculum perfectionis.

「内體は我らの庵、たましひはその庵に住みて神に祈り神を思ふ隠者なり」

一 著 作

このときから彼の死に至るまでフランシスはそのため生きてゆく二つの目的をもつてゐた——彼自らは完全の極致に達するまで福音と合致して生活し、そしてかやうにして彼の模範によつて兄弟らに正しい道を示すこと、そしてつぎに新たに筆をとつて、法王の許した掟に闕けたところのもの、彼がそのなかに曰ふことを許されなかつたものを補ふことであつた。フランシスははじめは獨りで、のちには兄弟らを従へて、福音を傳へる人、神の歌うたひのやうにさまよひ歩いた日は過ぎて返らないのであつた、なほ残れる年々をば、彼はベンに由り、私の生活に由つて働らきつゝ送らなければならなかつた。

これら彼の終りの年々の大部分をフランシスはリエティの谷で費した。この谷はエリノの川に貫かれて、テルニからアクァラにまで連なり。一方はサピニの丘に境せられ、一方は嚴やかな雲を纏ひ、雪を戴いたアブルッチの山々に境せられて、フランシスの最初の布教の舞臺の一つであつた。今もそのときと變らず山腹に懸り、あるひは山の頂きを守る小さい町々のいづれも、彼にそのイノチシモン幻の一つとして未だ破れず、そして彼が天と地のあひだに橋を架けてすべての人々を己れとともに樂園に伴つてゆくことが可能であると思つてゐたむかしのことを思ひ出させぬものはなかつた。彼はいま人といふものはいかなる物質から成りた

つてゐるかを根本的に知つた、そしてあるものは、福音の書にもあるやうに、大いなる晩餐の招きが呼ばれるときにも飼つてゐる牛の世話に忙しく、あるものは收穫のことに心を委ねてゐることも知りえた。けれどフランスはなほこのことも知つた、それはやはりなほ進んで福音のなかに見出されることであるが、天の王國にあつて主は怒り給ひそして彼の僕らに仰せられた、「速やかに市なる街と小道に往きて、貧しきもの、弱きもの、跛へなるもの盲ひたるものをこゝに伴ひきたれ……しかしてわが家を満たせ。」まへよりも更に大いなる信仰をもつてフランスは山上の説教の約束をくりかへした、「貧しきものは福ひなり、平和を求むるものは福ひなり、心のきよきものは福ひなり。」

このち彼が兄弟らに語るとき、それは彼らのうへに權威をもつ人としてではなかつた。彼はまた兄弟らを彼の好まぬところに派遣するミニストロたちや僧職らの仕打には憚らず思ふこともあつたらう、そして刹那の激情のうちにはかうも叫んだであらう——「私の兄弟たちを敢へて私から奪はうとする汝たちは全體何者だ？」¹けれど彼はなほ神とその懲罰者カスチディにたよつてゐた、もし小さき兄弟らが理想の高みから墮つるときは、人々は彼らを侮どり、はては彼らに迫害を加へて、かくて彼らを正しき道に逐ひかへすであらう。彼自らはもはや兄弟らのために祈りをし、そして彼の模範によつて理想を彼らの目のまへに掲げて、背くものに言ひのがれる言葉のないやうにするほかに、他につとめはないのである。神は一人の病める人にこれより多くを求めることができやうか？²

そして此處はフランスの病ひ——あまたの病ひつにいて語るべきところである、ことにこれらは彼を生涯の終りの年々にあたつて苦しめぬいたのである。我々のみな知ることく彼の健康はもとより甚だよくはなかつた。彼の青年時代に於ても熱病はあひついで彼を攻めた。のちに彼のあまたたびのそして長い斷食は彼の身體を破壊してゐた。悪魔は「救ひはどんな罪人にも與へられる、たゞ過度の苦行で自ら壊つたものを除いては、」と曰つて彼を絶望の涯りまで逐ふことができたであらう。彼は調理した食物を食べるの稀であつた、そしてかやうな場合には「わが姉妹なる灰は清い」といひながら灰を塗ヌして食べたのである。彼はたゞ少ししか眠らなかつた、そして眠るときはすはつたまゝ、あるひは石か木片を枕としてゐた。カルチエリにあるとき、または後にラ・エルナに於て彼の臥床は裸かの岩石であつた。この生活を營むこと二十年のち。彼の身體は散々に破壊されてしまつた、彼の胃からは屢ば出血し、そして兄弟らはそのたびに彼の最期が近いと思つた。

その上にかて加へてフランスは東方の國に留まつてゐたあひだにエチプトの眼病に傳染して、時としては殆ど盲目となつたほどの不幸であつた。その年ごろに書かれた一つの手紙に彼が自ら *Homo caecus* (仆れたる人) と署名してゐるのも不思議ではない。³

彼にとつては書簡によつて使徒の務めをすることは殆ど必然のことであつたので、そのなかに彼が人々を天に導びかうとする熱心は最後までその表現をもつてゐた。彼の生涯のこの最後の時期に、フランス

は五つの書簡(あるひは回章)——全基督教徒に與ふる書、彼が出席することのできなかつたあるときのベントコステのカピトロ集會に與ふる書(一二二四年)、あらゆる司祭たるものに與ふる書、あらゆる保護者に與ふる書、そしてすべて長上たるものに與ふる書を書いた。この上に彼の遺書、クラリッサの尼たちに與へた手書、そして最後に彼の宗教的詩歌を——なにも「太陽の歌」を擧げなければならぬ。同じ時代に我々はなほフラテ・レオネに與へた小さい自筆で傳はつてゐる書きものを數へることができよう。

けれど今我々はアッシジのフランシスの書簡に新しき駭くべき思想を見出さうと期待してはならない。それは彼がくりかへし教へやうと欲したもとよりの思想である。書翰はそのうへに種々なる範圍に宛ててあるので、フランシスは重複を避ける必要も理由もなかつた。心なく讀む人はそれ故五つの書簡が思想に貧しく、二三のライトモチーフをたえずくりかへすことに倦厭を覺えるであらう、「けれど」——ベニメルは謂ふ——「もし人がこれらの言語のうしろに立つ生ける人格、アッシジの單純な「學ばぬ人」のあらゆるナイヴテと愛の充實とを思ふならば、そのとき死せる言葉は愛する血肉となり、靈の貧しさはその富として啓かれるであらう。何となればフランシスの持つてゐた僅かなものは、たゞ彼に飛びきたつたものではなくて、それは彼をまつたく満たし、彼の奥底までを所有し、されば彼の言語は彼の人格とおなじく人々に天啓の力をもつて作用したのである。」

聖フランシスのこれらの手紙を讀めば、我々は實際に於て、すでに「戒め」や「第一の掟」、およびエリア

に與へた書簡で知つてゐるもののほかに何物をも見出さない。そこにあるのは同じく神を愛し神に仕へる道のしるべ、悔い改めの生活をなすこと、斷食——譬喩的な意味でそれによつて罪や過ちに斷食すること、我らの敵を愛し助けること、浮世の智慧あるひは高位を求めざること、多く祈ること、懺悔をなし、聖餐を受くること、我らがかつて惡をなしたところに善を爲して償ふことを努めることである——この最後の訓戒はフランシスに書簡の一つのなかに譬喩畫とも呼ばれうべき仕方、いかにして罪人が死にゆくかの叙述を記す機會をつくつた。

『肉體は疾み、死は近づく、親しきもの、友はきたりて曰ふ、「汝の家をよく定めよ。」しかして彼の妻、子、近親、友だちは恰かも泣けるがごとき狀をなす。しかして病める人はあたりを視て、人々の泣けるを見、しかして僞れる愁ひに動かされて自から思ふ、「さなり、われはわれとわがたましひとからだとともに、しかしてわがもてるものすべてを汝らの誠ある手に委ねむ。」たましひ、からだ、所有のすべてをかゝる手に委ねて、頼みとするこの人はまことに呪はれたるかな。されば王は豫言者によつて宣べたまふ、「人を恃むものは呪はる。」しかして直ちに司祭は迎へらる。しかしてこの司祭は彼に曰ふ、「汝は犯せし罪を贖はむと思ふや?」病める人は答ふ、「然り。」しかして司祭は問ふ、「汝の犯したるもの、また汝の欺ける人々に、汝の力のおよぶかぎり悉く償ひをなさむと思へりや?」「否、」彼は答ふ。しかして司祭は曰ふ、「何故に爲さざる?」彼は答ふ、「何となればわれはすべてをわが妻子とわが友に與へたればなり。」しかしてここに於て

彼は彼の爲せる不義を償はずして言葉を失ひ、しかして死す。しかれどもみな人知らざるべからざるはことなり、即ち何處にて如何にして、人その重き罪にありて、爲したる不義を償はずして死するかなり、しかして彼それを爲しうべかりしときにもこれを爲さむと思はず、つひに爲さざるとき、かゝるたましひを惡魔はたゞちに擒ふ、しかしてその惱みその苦しみいかに大いなるものとなるべきか、それは自らそを嘗むるものほか何人も知らず。しかして彼が有したりきと思へるあらゆる力、あらゆる智、あらゆる學識、みな彼より奪ひ去られむ。しかして彼は身後に彼の妻子と友のために財を遺す、しかしてこれらはそを取りて分ち、そのち曰く、「彼のたましひは呪はれよ、彼は我らがためにこれより多くを贏けず、多くを遺さざる故に。」しかしてかくのごとく彼は浮世にすべてを失ひ、しかしてあの世にありてはとこしへの地獄に苦しめらる。』

この描寫のなかにはフランスに他のところでは見出されない、人間の解釋に於ける苦痛が現はれてゐる。これは決して氣もちのいゝ繪ではない。彼は、これらの利己的な「近親なるもの」が死にゆく人の床のまはりに立つて彼らの利益になる遺言さへ造らせれば、あとは心のまゝに彼をして地獄に墮ち入らしめるのを描いてゐる——そして彼らが偽善者の偽りの涙をもつて、彼らの愛するごとく裝ふその人に、一つの償ひがたき最後の罪のなかにその不義の生活を終らしめ、そして彼がこの世に目を瞑りそしてあの世のとこしへの苦しみに再び目を開くや否や、こなたでは人々は彼が彼らの利益となるためにもつと多くを貯へ

なかつたと曰つて彼を誣ふ。彼の生涯を通じて彼らは彼をたゞ一個の勞役の奴隸として視、そして正しきか不正なるかは心とせずにとゞその克ちえた勞銀を彼らのものとするのみ思つたのである。彼が十分な金を積むために永への福祉を賭けたこと、それは彼らの一人だに思ひ浮ばない、——まして如何にして彼らは今彼の末期のときにそのことを思ひもしやう？ 我らは恰かもレオ・トルストイの最も深酷な小説の一つを讀んでゐるやうな心ちがする——例へば「死の審判の座の前に」といふ短篇に、イワン・イリッチは彼の永いあびだの最後の病ひに臥してそて彼が「一たびも愛せられなかつたことを見いだし、そして彼の妻が一生のあひだ彼を彼女みづからの目的に對する手段とのみ考へて決して他に何ものをも見なかつたことを、そして彼の子どもらも同様に躑けされて、彼をたゞ觸るのに好都合なお老爺さんで、そして今惜しいことには往つて了はうとしてゐるのだと思つてゐないことを見いだした。けれどイワン・イリッチよりも更に不幸なのは、アツシジのフランスの書いた小説のなかの死にゆく人である、彼の目のひらくときはすでに遅い——そして永しへに遅い。

一二二四年のベンテコステに集まつた兄弟らに贈る書簡、司祭と保護者（修道院の長上たるもの）とへの書簡にはフランスは特に掟のなかに省かれた諸ろの指命の意味を強めやうと試みてゐる。彼は兄弟らに祭壇の聖物を尊ぶことを要求し、もし若干の司祭がともにあるならばたゞ一回のミサを唱へて、他の人はそこに列席したことをもつて満足してゐること、また聖とい言葉の記されてある紙片を拾つて尊敬を

もつて貯へて置くこと、勤行の讀誦は聲音の諧調によりは、内心の敬虔に心をとめて唱ふべきこと、聖盃および祭壇の布は艶々と清らかにして置くこと、そして最も尊とい聖體は敬虔をもつて保存されなければならぬことをくりかへしくりかへし司祭ら並びにクストスたちに戒めてある。そしてそれがミサに於て祭壇の上にさゝげられるときにはすべての人は跪き、神を讃へ、そして鐘を鳴らして近くにあるものはみなこの讚美を共にすることのできるやうにしなければならぬ。

『しかしてわれ、フラテル・フランシスカス、汝らの小さき僕は、神みづからなる愛に於て、しかして汝らの足に接吻せむと欲しつゝ、汝らに謙たりと愛をもつてわれらが主イエス・キリストの言葉を受け、そを行ひ、完全に保たむことを祈りまた命ずるなり。しかして讀む能はざるものには屢ばこれを讀み聞かせ、これを記憶せしめ、最後に至るまで聖とき行ひをもつてこれにしたがひ生活せしむべし、そはこれらの言葉は靈と生命なればなり。しかしてこれを爲さざるものは最後の日審判の座シヤールのまへにて條理を述べべきなり。しかしてすべて歡こびをもて道道を受け、これを抱き、これに従ひて生き、他人の模範たるもの、最後まで堪ふるもの、彼らは父なる神、御子、聖書によりて祝福せられむ。アメン』

フランシスが兄弟らを各地に遣して、美しい輝やくチポリオ(ピクシデス)を與へて、何處にても主の聖體がその保存法に闕けてゐるところでは、處の牧師に新しい祭壇の聖器を與へさせやうといふ考へを起したのもこのころのことらしく思はれる。他の方面には兄弟らをして新しい立派な裝飾のある炮烙を贈らし

めて美しい純白な祭壇のパンを焼くことのできるやうにしやうと思つた。これらの企ての一つとして汎く行はれなかつたに違ひない、けれど、グレッチオの修道院には、フランシスの贈つたのだといふ一つの炮烙がある。

すべての權能者、即ち「すべてのポデスタ、コンソル、法官、レクトルらに」與へる書簡は聖フランシスがなほ人類の全社會にまじつてともに働かうとする熱心から起つたものである。宗教は彼にとつては決して私人の問題ではない、それは汎く見た社會の問題であつた。彼はそれ故に權能あるものをして彼らの多様な任務のまへにあつて。たゞ一つの必要なものを忘れるなど要求するのである。まことに、死が來たときに、何があとに残らう？ エルレーヌが七百年のうちに歌ふべきであつたやうに—— *et pueri, qui ad la mort viendra, que reste-t-il ?* それ故フランシスはすべての力ある君主たちに、他の民衆と等しく聖餐に往き、そして今は力が與へられてあれば、それを用ひて、使者あるひは他の仕方をもつて相圖を與へ、そしてその相圖を聞くものはみな主を讃へ主の榮えを歌ふべきことを計れと要求した。

フラテ・レオネへの手紙は、掟のなかの變更や抹殺の憤りと悲しみが彼の胸にも師の胸にもまだ新しかつた時に書かれたものゝやうに見える。それはまへの大規模な回章のやうな殆ど心をこめて彫琢した様式では書いてない、(まへのは恐らくケザリウス・フォン・スパイエルが一二二三年にドイツから歸つたのちに、フランシスを助けて書いたのであつたらう。)その手紙の全文はかうである。

『兄弟なるレオネよ、汝の兄弟なるフランシスコは汝に挨拶と平和を送る。

われはかくのごとく汝に語る、わが子よ、母のごとく、何となれば道にて語れるすべての言葉をつまみやかにわれ次ぎのことばと助言のうちに列ぬ。しかしてやがてわれに來りて助言を求むべきときのため、かくのごとくわれは汝に助言す。いかなる仕方にもせよ、汝が主なる神の御心に適ひ、貧しさのうちに彼の歩みを踐むたによしと思はゞ、神のめぐみとわが許しもてそれを爲すべし。しかしてもし汝のたましひのため、あるひは汝の他の慰安のために必要にして、汝わがもとに來らんと欲するときには、レオネよ、われに來よ。』

フランシスは明白にこゝではフラテ・レオネに、彼がケザリウスに與へたのと同じ種類の許可を與へてゐる。この手紙に用ゐられた複數の形 (*Facialis*) は、サバチエの考へるやうに、許可はたゞレオネにのみでなく同じ心の他の人々にも與へられたことを示すかもしれない。嚴密にいへば、フランシスはこれを爲すことはできない、何となれば立法の權力はもはや彼の、若しくは彼單獨の力ではなかつたのである。そして彼はいつもこれについて明らかでなかつたやうに思はれる、さればエックルストンは、フランシスが、この確定したのちに、兄弟らは各の修道院の外にあつて食するときにはあまり多くの食欲を示して俗の人々を不快に思はせてはならないため三口より多くを食べないといふ命令を出した。多くの人にはフランシスはまた團體の眞の長であつた。そして彼の死後まもなく、數百年につゞく争ひは聖者の允した許可にした

がつて掟を文字通りに守らうとするものと、そしてローマの允した輕減をとり入れやうとするものとのあひだに起つた。

1. 「完全の鏡」四一。

2. 同じく七一、八一。

3. *Epistola ad capitulum generale* (Böhmer, *Analekten* S.57)

4. *Boehmer: Analekten, S.III-III.*

5. *Epistola ad omnes fideles, S. 12. „De infirmo qui male penitet.“* (*Analekten, S. 55-56.*)

6. *F. Leo F. Francisco tuo salutem et pacem. Ita dico tibi, fili mi, et sicut mater, quia omnia verba, quae diximus in via, breviter in hoc verbo dispono et consilio, et si te post oportet propter consilium venire ad me, quia ita consilio tibi: In quocumque modo melius videtur tibi placere Domino Deo et sequi vestigia et paupertatem suam, faciatis cum benedictione Domini Dei et mea obedientia. Et, si tibi est necessarium propter animam tuam aut aliam consulationem tuam, et vis, Leo, venire ad me, veni.* (*Analekten, S.68.-69.*)

二 靈 的 生 活

フランシスはたゞ言葉のみで説教することを欲せずしてそれ以上に行ひをもつてすることを欲した。「そして汝らはみな己れの模範をもつて説教すべし」と彼はすでに掟のなかで兄弟らに命じ、そしてこの命令に従つた第一の人であつた。彼はその生活と言説とを異にせざりき、とチエラノのトマスは曰ふ。

リエティの谷に於ける彼の最後の年々は幾たびか彼の深い誠實の新しい例を示すのである。一二二三年もしくは二四のアドエントの頃に彼はボジヨ・ブストネの洞で日を送つてゐた。彼の薄弱な消化力は植物性の油をもつて料理した食物を食べることを許さなかつた、そして彼は豚脂をもつて料理した特別な食物を取つてゐた、フランスはクリスマスの日になつて民たちに説教したとき自らかくのごとくして教會に定められたアドエントの精進の掟を破つたことを責めた。彼は直ちに曰つた、「汝たちは、私が敬虔な神を畏れる人であると思ふ故にこゝへ來たのであらう。それゆゑに汝たちはこのことを知つてゐなければならぬ、私がこの精進のあひだに豚脂で料理したものを食べたことを。」

彼が一二二〇——二一年の冬に彼の毎々の發病の一つのときにすこしばかりの肉汁と煮た肉を食べて養つたことがあつた、これも同じ種類の一例なのである。彼はすこしく快癒するや否やたちちに、彼が會堂で説教したあとで、半裸の姿となつて彼の代理者なるビエトロ・ディ・カッタニに曳かれて、首には繩を縛つて町のなかを回つて市場の罪人曝し場まで來た。群れてきた市の人々に對してフランスは公けに彼の贅澤を懺悔した¹。

またあるときおなじく病めるときに彼は兄弟らに切に勧められて、腹を温めるために衣の内側に一片の毛皮を縫ひつけることになつた。「それならば外側にも一つを縫つて置け、」フランスは謂つた、「さうすればすべての人は私が毛皮を着てゐることを見ることができよう。」

彼はしばしば曰つた、「私は隠れたるところと人の見てゐるところと異つてあることを欲しない。」彼がいづこかへ招かれて何か特別なものを食べたときには、歸つてきてすぐに兄弟たちとそのことを話した。彼はすべての人が彼をまつたく知悉すべきことを欲した。もしアッシジの町を行きながらだれかに施しを興へて、そして何ごとか善き事をしたといふやうな利己的な一種の快感を感じたときには、すぐにそれを共に行きつゝある兄弟に自白した。團體の長たるものゝ理想的な面影を定めるとき、彼は則ちこのものは密かに美食をなさざることを要求し、そしていつもその食卓に載るものをほかの兄弟に見えるやうにすることを欲した。

何ごとよりも彼は貧しさのために心をつくした。施しを興ふることは福ひである、けれどそれを受けることもまた福ひである。恵まれたパンは「天使の」パンである。されば物乞ひに出て歸る兄弟は歌ひつゝ來なければならぬ。フランスは口のなかにつねに貧しさを讃へる讚美歌と聖書の章句を絶たなかつた。あるとき一人の兄弟がある隠者小家にあつて彼に「私はあなたの庵から來ました、」と曰つたとき、フランスはそのなかにもはや一刻も留まつてゐなかつた。材木を削つて建てた家は彼にはあまりに過ぎてゐた、そして蘆と泥とで編んだ小屋で甘んじてゐた。けれど彼の最も好むのは福音書にある狐のごとく穴に棲む（馬太傳八の二十一）ことであつた。アッシジの市民がボルチウンクラの傍に建てた石造の家をば、彼は破壊しやうとはじめた、そしてすでに屋根の一部分を破り去つたとき市のボデスタは抗議を申し込んで、フラ

ンシスは市の共有財産を破壊するのだと曰つてきた。明日の必要のために今日より備へることは裕かなる人のすべきことである、それ故に彼は兄弟らが青々した蔬菜を夕方に水に漬けてあすまで保存することを禁じた、それは彼らが今日食ふことができるより多くの施しを受けてはならないことと同じであつた。彼の衣を眞に貧しく見えるやうにするために彼は好んで處々に普通の襤褸を縫ひつけさせた。そしてもし彼が新しい衣を要するときには、彼はそれを恵まれるまで待つてゐた。そして物乞ひに出るのを嫌がる兄弟は「雄蜂の兄弟」と呼ばれることを覺悟しなければならぬ、何となればそれは巢のなかにある蜜を食ふことを悦びながら、けれど自ら飛んで行つてそれを集めることを欲しないからであつた。²

かくのごとくして貧しさを努めながら、フランシスは決して彼と彼の兄弟らが十分貧しくあると思ふことはできなかつた。「私たちは恥ぢなければならぬ、」彼は一人の眞の襤褸を着た乞食に出逢つたとき曰つた、「私たちは貧しいと呼ばれ、そして全世界から私たちの貧しさのために讃へられてゐる、そしてこゝに私たちは私たちよりもはるかに貧しくけれどそれを誇りとしぬものに出逢ふではないか！」かやうな乞食はフランシスの目には聖といものであつた、そして彼は兄弟らのたれにもかやうなものを侮り、またはその貧賤を嘲けることを許さなかつた。貧しきものと呼ばれる、フランシスは悦んで彼の持つてゐるものをすべてこれらまことの貧しき人々に與へた——彼の頭巾、衣の一部分、あるひは下穿きまでも。彼は曰つた、「これはもと正當に彼らのものである、もし私が彼らの所有たるものを取りあげたならば私は自ら

を盗人であると思ふ！」私たちの兄弟なる貧しき人に、彼から借りたものを返さうではないか、」かやうな時に彼はたゞちにかう曰ふのであつた。もし彼が何ものか施されたときには、彼はいつでもそれをよりふさはしく缺ける人に與へ去らうと思つてゐた。兄弟らはかやうにして屢ば師の着物を脱がせまいとする手段に盡きた、殊にそれは彼が新しい衣を着ることを欲せずして必らず他の着古したものを出せと曰ひ張るからであつた。あるときは兄弟の一人はその着衣の一半を、そして他の一人の兄弟は残りの半部をフランシスに與へた。時としては兄弟らはフランシスが人に與へた着物を取りかへさうとした、けれど彼がこれを發見したときには彼はそのためその乞食たちに、金錢などで十分な代償を取らずにそれを渡してはならないと注意した。そのやうにしてチエルレに於て兄弟らはフランシスの上着を一人の老婆から買ひ戻さなければならぬことがあつた。³

彼はしばしば施しをするのに特別な目的をもつてした。例へば彼がベルジアの近傍なるチエルレで一人の男に逢つた、それはフランシスが昔し知つてゐた人であつて今は貧しい状態に陥つてゐるのであつた。話のあひだに憐れな男はことに彼の主人から不當な待遇をされたことを訴へ、そしてそのために消しがたい悪意をもつてゐた。「もし汝が主人から受けた虐待を赦さうと思ふならば、私は悦んで私の頭巾を汝に與へよう」とフランシスは曰つた。そしてその男の心は動かされ、彼の憎みをすて、そして神の精靈の甘美な味ひに満たされた。

リエティに於てフランスはあるとき一人の貧しい女が彼と同じやうに眼を疾つてゐるのを見た。彼は女にたゞ着物を與へたのみならずあまたのパンの塊を與へて助けた。また他の貧しき女は、その子は二人まで兄弟たちのなかに入つてゐるのであつたが、ポルチウンクラに来て彼女の窮乏を訴へた。フランスは彼女に彼が神のまへの儀式に使用する新約全書を與へて賣らしめた。「私たちがかうして私たちのお母さんをお助けするならば、主はたしかに我々が彼女に何も與へずに歸すよりも悦ばしく思召すに違ひない」と彼は曰つた。「我々の母」といふ稱呼は團體に子を送つた女のたれにもつけたのである。

ポルチウンクラでは祭壇の裝飾の缺損に苦しまうとした。今團體に加はつてくるあまたの兄弟の要する食物を得るために、ピエトロ・デイ・カッタニは、新たに入るものはこれまでのごとく所有を貧民に分與することをやめ、その一部は團體に寄進せしむることとすることを提議した。「否々それはいけない、フランスは答へた、「それは掟に禁じたことではないか！」それでは如何したら宜しいでせう？」當惑してピエトロは問うた。「祭壇の裝飾を剝して賣つてしまへ。祭壇を裸かにして福音の旨を保つのは、それを離れながら飾つた祭壇を守るより優つてゐる！」

かやうにしてフランスは彼の道を純潔に保ち、そして福音に外見のみならず眞實に於て従ふことを努めた。されば兄弟らが神の御名に於ていそしんで乞うてきた施物を貧しき人々に應はしからぬ仕方で使用してゐると思はれるときほど彼の悦ばぬことはなかつた。マインツの名だかい僧正ケッテルはあるとき不

意に襲うて彼から常に莫大な補助を乞ひながら家に在つて鷺鳥の丸焼と赤葡萄酒を味はつてゐる家族をおどろかせた。僧正の曰つたことは、彼は彼の施したものによつて一家が愉快な一夕を過してゐるのを見るのははなはだうれいことである、といふだけであつたといふ。フランスはかやうな場合にもつと嚴重であつた。

あるとき復活祭の月曜日のこと、グレッチオの修道院に於て兄弟らは祭りの日を祝ふためと、そして賓客として來た一人のミニストロのために、卓子に布を覆ひ、そして平生の錫の碗の代りにガラスの盃を列ねた。晝すこしまへにフランスはそこへ來てあらゆる設けを見た、彼はこつそりと忍び出て、一人の乞食が遺れて行つた古帽子を冠り、そして鉢を携へて、丁度兄弟たちが席に就くころを計つて戸を音なつた。

悲しみ訴へるとき聲が戸のまへに聞えた、「Per l'amor di messer Domeneddio, faciate elemosina a questo povero ed inferno peregrino!」（主なる神の愛のために、この貧しき弱き順禮に恵みを與へたまへ。）

兄弟らの親切な招きに從つてフランスは内へ入つた。人々はみなたゞちに彼を識つた、けれどなほそれを氣色に現はさなかつた。彼は爐のかたはらに地の上にすわつて、一皿の汁と一切れのパンを與へられ、それを食べはじめた。兄弟らの一人として言葉を出さなかつた、そして一人も食物を咽喉に通すことはできなかつた——フランスがチンデレラを男で見るやうに膝の上に皿を持つて隅の方に小さくうづくまつてゐるのを見れば、立派に飾つた食卓にすわるだけでも堪へがたいことであつた。まもなくフランス

スは匙を置いて獨りつぶやいた、「今私は小さき兄弟のすわるべきやうにしてすわつてゐる。けれど私がこへ入つてきて食卓の上の立派なものを見たとき私は、毎日そとへ出て戸ごとに物を乞はなければならぬ貧しい團體の仲間のところにあるのだとは思へなかつた。」兄弟らはもはや堪へかねた、彼らのあるものは泣きはじめ、そしてみな起つてフランシスがそのまゝすわつてゐるところへ行つた。⁵

他のときにも同様な一場が演ぜられた。それはクリスマスのときであつた、フランシスは兄弟らとともに食卓にすわつてゐた。彼らのうちの一人は語り出した、御子イエスはいかに貧しかつたであらう、そしてマリアにとつては彼女の子を厩のなかで生み、秣槽のほかに寢床とはなく、枕や褥とは枯草と藁のほかに何もなく、寒い冬の夜に嬰兒のかよわき身を温めるのに牡牛と驢馬の呼吸のほかに何もなかつたときどんなに悲しいことであつたらう……フランシスはだまつてすわつて聽いてゐた、つひに彼は號泣して、パンをもちながら冷たい土の床に身を据ゑて、イエスとマリアのゐたところに劣らぬ状態でそこにすわつて食べた。⁶

フランシスはつひにいかなる種類の安逸にも馴れない身となつて、はては彼はそれらに満足よりは苦痛を感じた。彼の眼病の治療として顛顛を熱火に入れた鐵で灼いたあとで、グレチオの兄弟らは彼に強ひて頭を安めるために枕を用ひさせた。あくる朝フランシスは出てきて曰つた。「兄弟たちよ、昨夜は汝たちの枕のせいで眠られなかつた。私のまはりにあるものは皆跳ねまはる、そして私の足は震へ出す——枕のな

かに悪魔がゐるに違ひない！」彼はたゞちに一人の兄弟に命じて枕を注意して運び出させ、それを後を顧みないやうに氣をつけて捨てさせた。

フランシスが闇の力に襲はれたのはこれがはじめてではなかつた。夕かたなど彼が人なき寺院のうち、あるひは洞穴のなかでさびしき祈りをつゞけてゐたとき、何人か彼のうしろに立つやうな、または忙はしいかすかな足の音がしのびよつて彼のあたりに動くやうな、または一つの醜くき頭が彼の肩ごしにのぞいてともに祈禱書を読まうとするやうなけはひがすることも屢ばであつた。⁷ そのとき彼は山の森のなかに吹き荒れる暴風のなかに呼ぶ聲を聞き、彼の庵のそとに梟が鳴くとき悪魔は彼を笑ふ、けれど何よりもものすごいのは、眞夜なかの死んだやうな静けさのなかで聖フランシスの耳に響く殆ど聞きとりがたいほど低いさゝやきであつた——憎みをもち嘲けるやうな唇のさゝやくやうに、「フランシスよ、すべてのことは徒勞だ。汝は好きなことを願つたり祈つたりするが、けれど汝はもう俺の手のものだ！」そのときにフランシスは彼の永しへの生命のために闘ふ、そしてあくる朝彼のもとに來た兄弟らは彼が闇の侵し入る力との戦ひに疲れて色青さめてゐるのを見いだす。「私はかつてこの世に在つたなかにも最大の罪人であるやうな心ちがする、」と彼はあるときかやうな一夜のあとで。フラテ・パチフィコに曰つた、けれど歌の君王はまた同じ夜の夢に天の國が開けて、そして誇りやかなルチフェルが棄てられたのち空いてゐる王座はフランシスにその深い謙だりの故に備へられてゐるのを見た。

- 1 「完全の鏡」六一——六三。
- 2 同じく、五、一四、一六、七、八、九、一九。
- 3 同じく、二九——三五、三七、三八。
- 4 Celano, Vita Secunda, II. 37.
- 5 「完全の鏡」二〇。
- 6 Celano, Vita Secunda II. 151
- 7 「完全の鏡」九八、九九、五九、六〇。

三 眞個の弟子

フランシスは靈の生活に於けるこれらの經驗のすべてをもつて、弟子たちのためには一個の善き師、導びきであつた。彼は彼らに誘惑を恐れざれと教へた。彼は曰つた、「何人もあまたの誘惑と艱みに由つて試みられざるものは神の眞の弟子なりと思ふべからず。誘惑に勝てば、そはたとへば神がたましひに贈りたまふ結婚の指環のごときものなり。」また他のときには彼は好んで用ふる言葉、神の「懲罰者」としての惡魔の思想をくりかへした。彼は曰つた、「クキンタブレのベルナルドは地獄のこの上なく詭りの巧みな惡靈たちに襲はれてゐる、それらは空より星の墜ちるやうに彼を陥らせやうと試みてゐる。それゆゑに今彼は虐げられ、彼らの攻撃に首を低れてゐる、けれど彼の死の近づくとき暴風は止み、そこにより大いなる安

けさがあるであらう。」そしてそれはその通りになつた。生涯の最後の日々に於てフラテ・ベルナルドのたましひはまつたく地上のものから離れてゐた、そして彼は「燕のごとくその養ひを空に捉へたり、」とフラテ・エジディオは曰つた。「しかししてあるひは二十日あるひは三十日のあひだもつゝきて彼はひとり最も高き山の頂をさまよひて天なるものを靜觀したり。」けれどその死にゆくとき彼は集まれる兄弟らに曰つた、「この世のごとく美しき世界を幾千も與へらるるとも、われはわが主イエスキリストのほかなる主に仕へじ、」そしてはなはだ大いなる悦びに輝やきつつ彼はあらゆる聖者のとこしへの故郷に赴いた。

また一人の初期の弟子、フラテ・ルフィノも大いなる誘惑によつて潔められた。それは彼の師の場合と同様であつた——「舊しの敵彼の心にささやきけるは、彼はとこしへの生命に定められたるものうちにあらず、しかしして彼がなせしことはそれ故にみな徒らなりと。」そして彼のまへには救世主がみづから現はれてそして彼に曰ふやうに思はれた、「おゝフラテ・ルフィノよ汝は永しへの生命を享くべきものならず、然るに何故祈りと贖罪もて己れを煩はずや？ しかして汝わが言を信ぜよ、われは豫め誰を選び誰をすたるかよく知れり。しかしてこのフランシスと呼ぶもの、ピエトロ・ベルナルドネの子もまた棄てられたるものうちにあり、しかしして彼に従ふものはみなともに地獄の苦しみを永しへに受くべし。しかればもはや彼より教へを受くること勿れ、何事にも彼の言葉を聽くことなかれ。」そのときフラテ・ルフィノの心は暗くされた、そして彼は今まで頼みとした師に對する信頼と愛とを悉く失つてしまつた、そして陰氣な顔をし

て一人彼の室にすわつてもはや祈りをやめ、そして兄弟らのお勤めにも出やうとしなかつた。そのすべてがどれだけの善いことでありえやう——かくするとても彼をどこしへの却火と悪魔と彼の天使のほかには何ものも待たなかつた。

フラテ・マッセオがフランシスの命によつてルフィノを呼びに使ひしたけれど空しく歸つてきた。不幸な人の答へは怒りを含みそして粗々しく聞えた。「フランシスには何の用事もない！」そしてフランシスは自ら行つてフラテ・ルフィノを暗のなかから救ひ出した。「しかしすでに間違きところよりフランシスは叫びぬ、「お、フラテ・ルフィノよ、汝憐れなる人よ、何人を汝は信じたるか？」しかしして彼はルフィノに明らかに、彼のまへに姿を示せしは悪魔にしてキリストに非ざりしことを示したり、「しかしれどももし悪魔再び汝に「汝は失はれたるものなり」と曰ふことあらば、彼に靜かに答ふべし、「汝の口を開け、我そのなかに糞を食はせむ。」しかししてそれが悪魔たる印として、されば汝かく答へなば彼はたゞちに飛び去らむ。しかしして汝はこれによりても彼が悪魔なりしことを知るべし、何となれば、彼は汝の心をあらゆる善に對して頑にしたり、これまことに彼の行ひなり、されど祝福せられたるキリストは決して生ける人の心を頑にしたり、たまはず、たゞそを和らけたまふ、恰かも彼が豫言者の口を假りて「われは汝の石の心をとりに去り、汝に代りとして生きてる心と與へむ、」といはれたることとなり。」

そのときフラテ・ルフィノは彼がいかに欺かれてゐたかを知つた、そして心は胸のうちに和らぎ、彼は苦しみみちた涙をながしてフランシスのまへにひれふし、そして再びあらたに彼の手に身を任せた。涙をながしながら、けれど楽しく、力強くされ、慰さめられて彼は起きあがつた、そして悪魔が再び彼のまへにキリストの姿をして現はれたとき、彼はフランシスが教へたとほりに勇ましく答へた。「しかしして悪魔は大いに怒り大風を起し音を響かし、モンテ・スバジオの石を飛ばしつゝ立ち去りぬ、その遠く飛びたる石は今もなほ在り、しかししてその石は谷へ墮つるとき互ひに打ちあひて火花を散らしたれば、フランシスと兄弟らは驚きて外に出できたり何ごとか起りしかを眺めたり。しかれどもキリストはフラテ・ルフィノを祝福しかして彼を大いなるたましひの歡びと甘美さと靈の高まりを返しあたへたまひしかば、日も夜も彼はわが身を忘れて神に溺れぬたり。しかししてその時より彼はまつたく彼の享くる恩寵に賢くせられ、永しへの救はれを確かめ、しかしして彼は今までとは別人のごとなりぬ、しかししてもし彼に許されなば、彼はたゞ祈りと天なるものゝ豫想にのみ身を委ねんと思ひぬ。さればフランシスはフラテ・ルフィノを生きながらキリストによりて聖よくされたるものなりといひ、しかしして彼が聞かざるところにては、フランシスは彼を、彼は未だこの世にありしかど、聖ルフィノと呼ぶに躊躇せざりき。」

彼のまめやかな兄弟たちに圍繞され、つねにこれらとゞもに棲みともに語つてゐるとき、フランシスは世を離れたリエテイの谷の靜けさのなかにあつて、山のかなたにあることをみな忘れた——ボロニヤに在る兄弟ら、パリに在る兄弟ら、クリアの中に入つた兄弟ら、大學に在る兄弟ら、すべてフランシスが欲し

たところに行かずして他に留まつて、そしてフランシスが爲せと欲することを爲さずして他のことを努めてゐる兄弟らのことを。それらのすべてに對する手段としてフランシスは理想的なる小さな兄弟の姿繪をかいた、それは空に彫刻した姿ではなくて、そのなかに彼はすべて最も誠實な弟子たちの特徴を示したのであつた。『小さな兄弟の完全なるものは、』フランシスは曰つた、『クァンタヴルレのベルナルドのごとく貧をよく守り、レオネのごとく單純に。純潔に、アンジェロのごとく禮儀あり、マッセオのごとく明らかなる心をもちて自から雄辯に、エジディオのごとく高きに向へる心をもたざるべからず、その祈りはルフィノのそれのごとくなるべし、ルフィノは祈りを絶つことなく、醒めても眠りても心はつねに神とよみにあり、ジネプロのごとく忍耐つよく、讚美のジッボンニのごとく靈と肉とよみに健やかに、ルッジェロ・ダ・トディオのごとく愛深く、ルチドのごとくいづこにも住所を定めざれ、何となればもしフラテ・ルチドが一處に一月より多く棲みて、その處を好むに至れば彼はたゞちにそこを去り、心には、「われらが故郷は天にあり」といへばなり。』

フランシスはまたこのもつとも誠實な弟子たちの小さい群れのなかに彼にもつとも親しいものゝほかなるものをも數へることができるとを悦んだ。彼はあるときスバニヤから歸つた牧師がスバニヤなるフランシスカンたちについて語るのを聞いて大いなる歡びをもつた。旅する人は曰つた、「あなたの兄弟たちはそこで小さな隠者小屋に棲み、そしてその一半の人は一週のおひだ家内のことをあづかり、そして一半

は祈りに身を委ねます、そしてつぎの一週間は二組は仕事を交代するのであります。ある日午餐の鐘が鳴りました、そして兄弟たちうち一人來ないものがありました。そしてこの日はつねならずよき食物があつた日でありましたから人々は來ない人を探しに行きました。ほどへてから人々が彼を見出したとき彼は地にひれ伏して、顔を地につけて、手は十字架のやうにひろげられ、見たところは生命なきものゝやうにまつたく現身のそとに狂喜に誘はれてゐました。兄弟たちはそつとそこを去りました、やがてその恩寵を受けた人は歸つてきました。けれど何ごととも變つたことはなかつたやうな風に、彼は恭しく跪いて遅くなつたことについて赦しを乞ひました。」

かやうな出來ごとはまつたくフランシスの願ふところに諧つてゐた。「主よ、私はあなたに感謝します、」彼は叫んだ、「あなたが私にこのやうな兄弟らを興へて下さいましたことを。」そして彼はスバニヤの方の空に顔をむけつつ十字架の大きな印を畫いて、遠くはなれた彼の誠な弟子たちを祝福した。

○ フランシスに見えるために遠いグレッチオの山へと長い道をたどつて苦しい旅をしてきた二人の兄弟もまたかやうな誠なフランシスカンの一對であつた。聖フランシスの生涯の晩年となつたとき、彼が他の兄弟らを離れて孤獨のなかに退いて祈禱するとき、何人も彼に近づいて妨げやうと敢へてするものはなく、そして兄弟たちが諸事を處理して行くやうになつた。この二人の順禮が來たときフランシスは恰かも不在であつた、そしていつ歸つてくるかわからなかつた。留まつて待つ餘裕のない旅人はこれを聞いて大いに